

NO. 52  
WINTER  
1976

# 英語展望

*ELEC BULLETIN*

特集：マザー・グースのすべて  
(インタビュー) 平野敬一  
吉田新一・高橋康也・脇山 怜  
芦川長三郎・谷川俊太郎  
矢川澄子



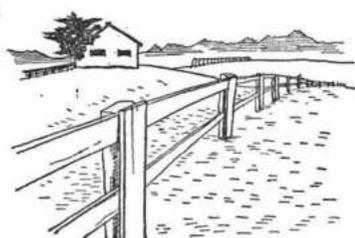
*ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL*

# 英語展望

NO. 52  
WINTER  
1976

*ELEC BULLETIN*

Edited by Fumio Nakajima  
The English Language Education Council, Inc., Tokyo



## 【国際展望】

＜英語有限視思想＞の奨め……………森 常治 2

## 【特集】 マザー・グースのすべて

インタビュー：マザー・グースをめぐって……………	平野 敬一	4
マザー・グースのイラストレーション……………	吉田 新一	8
雨の降る日は……………	高橋 康也	10
アメリカで聞いたマザー・グース……………	脇山 怜	12
2, 3の nursery rhymes について……………	芦川長三郎	15
無駄ばなし・マザー・グースと私……………	谷川俊太郎	16
マザー・グースとわたし……………	矢川 澄子	17
疑問文(I)……………	太田 朗	18
戦争中の外国人教師……………	外山滋比古	22
Challenge and Response……………	中尾清秋・國弘正雄・西山 千 村田勇三郎・村田聖明	26
「国際英語」と学校教育の英語／英語表現のレベル		
英語の諺(その1)……………	戸田 豊	32
要求される英語の2つのレベル……………	斎藤 栄二	37
Forum……………		39
【新刊書評】『新コンサイス英和辞典』……………	小島 義郎	41
『人間のための鏡』……………	國弘 正雄	43
新刊紹介……………		45
新刊案内……………		47
展望通信……………		48

表紙デザイン

太田英男

## 〈英語有限視思想〉の奨め

—「国際英語」習得のために—

MORI Jōji  
森 常 治

国際的とはどういうことか、また国際語としての英語教育のあり方等々の問題に答えよ、というのが本誌のご下命である。実は筆者、日頃国際的のなんたるやを考えたことがない。良く言えば四海同胞主義、悪く言えば（日本的発音で）ルーズというわけで、〈国際的〉なるもの内容についてあまりうんぬんする資格はなさそうである。それでもご下命とあれば、ということで無い知恵をしぼってみたもののさっぱりなのだ。〈国際的〉がいぜん宙に浮いたままなのである。だが、〈国際的〉などというものはそもそもそうしたものではなかったのではなからうか。〈国際的〉とある特定の言語の習得を結びつけようとするのが土台無理な話なのだ。たとえば外国語を一語も解せない田舎の老人でもじゅうぶんに国際的でありうる。特に山小屋の親爺さんたちと話しているとアルプスかニューイングランドの山中にいるのではないかと錯覚を起こすくらいだ。その反対に英語を母国語とする白人でも国際性をもたないものはゴマンといる。日本にいながらアメリカ即世界でもあるまいにマクドナルドのハンバーガーその他ですませてしまう連中からはじまって、筆者の拙宅から通りを隔てたところにある、あるインターナショナル・スクールの白人の子弟たちも、すべてとは言わないまでも、近所の日本人の子供たちとの接し方をみていると、お世辞にも国際人とはいえないようである。もちろんわが同胞のなかにも非国際人がそれに劣らず（いや、より多く）いることも確かである。といっても彼らが英語を話せないからではない。またスープを音を立てて飲むとか、飲まないとか、たまたま武力と外交手腕を背景にして大きくなった文化圏の、本質的には地方的マナーにすぎないものを心得ていないからではない（最近のアチラ製の若者の汗くさいアンダーシャツ姿で街頭を闊歩する姿と比べると「西洋通」の叔母様たちの柳眉を逆立てさせた農協氏のステテコ姿とさして変わらないと思うくらいである）。彼らが〈国際的〉でないのは、そうしたことではなく、野山に行っても紙屑や空缶をなんら躊躇なく捨て、乗客が降りるのも待てずに電車に乗り込もうとする「他人音痴」なるが故である。

つまり、外国語の習得は〈国際的なること〉の必要条件ではないのである。〈国際性〉とはむしろ〈心性〉の問題であり、さらに具体的に言えば困難に逢着しても回避せず、〈マトモ〉に対面する真摯さといえよう。逆に〈非国際的〉な心性とは、自然汚染の問題ならば、「なに、自分一人くらい自然を汚したとてどうということもないだろう」と考えたがる心性であり、また事がいざ自分の問題となると、ライオンに襲われた縞馬のごとく円陣をつくり、既得権益の防衛のみに浮身をやつし、そうした田舎根生丸出しの防衛工作、もしくはそうした問題の黙殺に加わらない者を外部と通じる裏切者と考える貧しき心性である。

「では」と読者は問われるかもしれない、「国際性と語学学習とは全く無関係であるのか」と。答えは yes and no である。yes の理由はのべた。だが no にしても同じ理由で no なのだ。なぜならば語学学習も人間の営為である以上、おのずから態度や心性の関わる 部面があり、ということは、窮極は心性の問題に還元された〈国際性〉と関わりをもつということになる。具体的にはこうだ。語学学習以上に定義した意味での〈国際性〉を「代入」すると、語学学習が要求する困難さを素直に受け入れそれに立ち向う真摯な態度となる。逆に〈非国際的〉な態度を「代入」すると、語学学習において特に困難な部面があると、それに立ち向かい解決するのは逆に、それがあたかも語学学習の本質的部分ではないかのように擬装することのみに熱中しはじめ、あたかもライオンに襲われた縞馬のごとき態度をとりはじめる。まだ防衛一手ならよいのだが、こうしたノイローゼが募ると、「まとも」な語学学習にともなう特有な（ときには克服不可能かとも思われる、目眩めくほどの）困難に立ち向っている人に向けて「私の経験では、日本人で英会話がうまい人というのは、少し変わったところがあったり（中略）する者が多い。静かに悩む生徒と語り合うようなタイプの教師には、しゃべることが下手な人が多いのかもしれない（本誌 50 号投稿欄より）」といった憶測が投げかけられるのである。英語が話せるか、さもなくば人格者か、

それこそ〇×式思考ではないか。実名を出して恐縮だが筆者より國弘氏のほうがはるかに英語に堪能であることは疑う余地はないが筆者はそれだからといって氏に「変わったところがある」とは思わないし、また筆者が劣った分だけ筆者が國弘氏よりも生徒の指導にたけているとも思わない。話は筆者が氏に劣っているだけの話なのである。

もちろん投稿氏の気持ちもわからぬではない。しかし、筆者はいまだかつてたとえば音楽の教師から「ピアノを上手に弾けてもストリップショーの伴奏家になるのが関の山の人間が多い。それよりもベートーヴェンを正しく鑑賞することのほうが大事だ」という言葉を耳にしたことはない。こうした感想にも一片の真実はあろう。しかしいやしくもプロなら口が裂けても言ってはならない言葉なのだ。茶の湯にも、建築設計にも「心」の欠けた鼻持ちならない論語読みの論語知らずは大勢いるだろう。だが各専門家はそれを技術への精進を軽視する口実にはしない。なぜ語学に限ってこうした「甘ったれ」現象が生じるのだろうか。

だが「甘ったれ」とはやや意地悪な言い方で正確にはやはり「ノイローゼ」と言うべきであり、ノイローゼには善意に満ちた示唆しか治療法はない。そこでただただ恐ろ戦<sup>おの</sup>いでいないで現実に立ち向かう勇気をもっていただくために外国語に対する〈構造的把握〉とでもいうべきものを披露してみたいのだが、この〈構造的把握〉も実は〈国際的であること〉の一要諦なのだ。筆者は相手を無限に広がる連続体とは考えず、有限のなかで無限な現象を解釈・処理していく閉じた完結体としてとらえることを仮りに〈構造的把握〉と呼んだのだが、外国語についての〈連続的無限観〉が実はわが国の語学教育において教師からも生徒からも目的意識ひいては意欲を奪っているのではなからうか。こうした「どこまで続くぬかるみぞ」式の〈無限観〉は外国語を即現象一般もしくはそれについての知識そのものとする伝統的外国語観に由来してしよう。つまり、現象一般は学んでも学んでも学びきれものではない、もし学び終わったという者があったら自らを知らぬ粗忽者であるように、もし学びつつある外国語の何たるかを知った人間がいたとすと思いがりもいいところである、という外国語「修業」思想である。となれば教師のほうだって相手は無限に高いエヴェレスト、いや、オリンポスの神様の言葉、その「使用」なぞとんでもない、ということになる。

ところで筆者、日頃自らを平均的英語の先生方よりも素質的には劣っていると信じて疑わないのだが、米国の大学で講義を行ったり、会議に出席したり、また早稲

田の国際部で学生指導に当たったりでこれまで大きな失敗をしたという記憶がない。ニューヨークの Praeger 社から共著出版をしたときもほとんど英語は直されなかった。誤解されないでほしい。筆者のごとき凡夫でもとにかくも大過なくすごせたのは、ひとえに自らの発明になる外国語の〈構造的把握〉というアトラキシンをたえず服用しているからであると言いたかっただけである。それは一寸きくとたいへんに「思いあがった」と考えられがちな〈英語有限思想〉である。それは英語と現象との「切り離し」であり、「英語のような人間の一言語にすぎないものに現象が表現できるものか」といういわば居直りの英語軽視思想である（この言い方にはレトリックという増幅器が掛かっているだけで、現象学的にも文化人類学的にもその根幹においては正しいだろう）。さて、以上を頭に入れて、たとえば米国の大学の先生方と話してみてごらん下さい。専攻分野が違っているのだから、さぞや全く別な言語的把握が行なわれると思いきや、実はそうでないことに気付かれるにちがいない。なんでも in terms of というケネス・パークの言葉を使えば terministic screen で対象が捉えられ、primarily because... と priority の序列のなかで理由付けられ、すぐには用いられないものでも potentially relevant と力学的評価が加えられ、良ければ relatively, tremendously dramatically effective とその impressiveness が秩序づけられ、ある前提は必ず幾つかのものを involve し、その幾つかは serious problems を create し、それらに cope with するために必要な, perspective, basic terms, 制度上の minimum requirement, 法的 provisions はうんぬん、ということになり、どうしてこうも同じ言葉の framework で彼らは物を考えるのだろうか、と聞いていて欠伸が出るほどである。ところで大学での上級英語、こうした〈欠伸誘発剤〉を教えこめばよいのであり、英語〈無限観〉どころか、2年の終わりには、「またか、あの教師、同じ構文でしゃべってらあ」と大きく欠伸をしたところで、一番大きく開けた口に「優」の点を投げ込めばいいのである。

さて賢明な読者なら筆者が英語をナメてよいなぞと言っているのではないことはお判りだろう。だが一方、相手を〈有限〉と考えることこそ相手に温い親しみ、さらには人間的敬意さえ抱く、つまり〈国際的心情〉のための入口なのである。〈無限〉なるものに対し人間はともすれば恐怖と怨恨のみを招き、いつの日かの意趣返しを夢みがちである。われら英語教師、語学的パールハーバーだけは留めたいものである。

(早稲田大学教授)

(インタビュー)

## マザー・グースをめぐって



HIRANO KEIICHI  
平野 敬一

### マザー・グースとは？

——まず、そもそもマザー・グースとは何か、ということからお話を始めていただきたいと思いますが。

平野 簡単に言えば、イギリスの伝承童謡の作者とされている想像上の人物のことをマザー・グース(鶯鳥おばさん)と呼んでるのです。そのマザー・グースが作った唄が現在伝わっている英語の童謡というわけですが、もちろんそういうおばさんが実在したわけではありません。グースという名の唄好きのおばさんが実在したという説が、たとえばアメリカなどにはないわけではありません——北原白秋はそれを踏襲しています。しかし結論的に言えば17世紀末に出たフランスのペローの童謡集のサブ・タイトル「鶯鳥おばさんのコント」をイギリスの児童書出版屋 Newbery がイギリスの童謡集のタイトルに「転用」した、あるいは借用した(1765年ごろ)というのがこの名の使用のはじまりらしい、というのが定説でしょう。

——そうすると18世紀ごろにイギリスの童謡集のタイトル名として使われはじめたというわけですね。それ以来、イギリスの童謡はすべてマザー・グースの唄と呼ばれてきたのですか。

平野 いや、そうじゃないんです。童謡は普通英語で nursery rhymes といいますが、その collection の title にいろいろの名が使われるのです。その中の一つがマザー・グースだったというだけのことです。

——ではマザー・グースの他にどんな名があったのですか。

平野 挙げだしたらそれこそきりがありませんね。18世紀には他に Tommy Thumb (おや指トム) の唄の本というふうに Tommy Thumb を使った例があるし、Nancy Cock の Pretty Song Book (きれいな唄の本, 1780) とか、Gammer Gurton's Garland (ガートンおばさんの花わ, 1781) というのもありました。19世紀になると Nurse Lovechild (子供を愛する保母) の唄の

本、あるいは Good Child (よい子) の唄の本——どうも芸のない名前ですが——といった名などが使われています。そしてこういう多くの名前のうち Mother Goose がいちばん普及し、他を圧倒して今に生き残ったということなのでしょう。

童謡集に特別変わったタイトルをつける必要は別にないんです。19世紀の大収集家 Halliwell はその集成した童謡集に *The Nursery Rhymes of England* (1842) という何のへんてつもないタイトルをつけたし、20世紀のこれも大集成家 Opie 夫妻も、たとえばその代表的な *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes* のタイトルに見られるように、Mother Goose とか Tommy Thumb といった擬人化した名称、あるいは作者名を使ったりしていません。Mother Goose という名を使わなくても、童謡集を編むことはもちろんできますし、童謡を論じることも可能です。

ただ、比較的にいえばイギリスにおいてよりもアメリカで Mother Goose というタイトルが好まれるようになり、Opie 夫妻などもイギリスで nursery rhymes として知られているものがアメリカでは Mother Goose songs と呼ばれているのだ、とはっきりいっています。しかし、Opie がいっほど明確にイギリスでは nursery rhymes、アメリカでは Mother Goose songs (あるいは rhymes) というふうに使分けられているわけではなさそうです。洋書屋の店頭をのぞけばすぐわかることですが、イギリス発行の童謡集でも Mother Goose の名を使っているものが少なくないし、また段々ふえる傾向にあるようです。Mother Goose という名の抗しがたい魅力に commercialism がなびいているということかもしれませぬ。

### 日本におけるマザー・グース

日本ではご存じのように北原白秋あるいはそれより早く松原至大の翻訳が出て以来、半世紀あまりマザー・グースという名で親しまれてきたという歴史があり、マザ

ー・グースという名に対する日本人の愛着は、イギリスよりアメリカに近く、あるいはアメリカ以上かもしれません。

——最近テレビでマザー・グースというのは和製英語である、と断定した外国人研究家がいたそうですが。

平野 私はその番組を見たわけではありませんが、多分その方の日本語の表現力が不十分だったのだらうと思います。英米でひろく使われている表現が、なぜ和製英語となるのか私には分かりませんね。もっとも Mother Goose が和製英語なら、これは大した和製英語ですよ。ただマザー・グースの唄というべきところを短絡して、単にマザー・グースというのは日本独特の省略法かもしれませんね。(たとえば「この唄はマザー・グースでないかしら」というふうに。)それからマザー・グースという表現に白秋以来の日本の伝統が付与したある日本的色合い——それはたしかに存在するでしょう。アメリカとイギリスとの間でも Mother Goose ということばのもつ色合い、あるいはそれに対する親疎の情が違うのだからそれは当然です。そのへんのところをとらえて、「マザー・グース」というのは和製英語だとその外国人がいったのだと思います。日本人が Mother Goose に対して独自の受容の仕方をするのはけしからんというのでしたら、これはもう話になりません。日本の俳句や仏教の禪にしたって英米では日本と違った受容のされ方をしています。これに対して日本人の理解と異なるといういちゃもんをつけているようなものですよ。

### 勉強のしかた、楽しみかた

——マザー・グースを勉強するにはどうしたらいいのでしょうか。

平野 マザー・グースの勉強に別に方法とか王道はないんです。要はただ無心に親しむことだと思います。繰り返し繰り返し暗誦できるまで聞き込み、自分のものにするんですよ。それが第1段階。その基礎作業をおろそかにして何か研究書はないかとさがすのは本末転倒だと思います。私がある大学でやっているマザー・グースの講義でも、個々の童謡の暗誦を優先させています。期末試験ももっぱらそれだけです。ろくに親しみもしないであれこれ論議するのは、日本の学問の流儀かもしれませんが、あまり意味ないですね。

マザー・グースの勉強法如何などと問うから七面倒くさくなるんですが、どうすれば Mother Goose に親しめるかというふうに問いを変えたら、自から答えが出てくると思います。

——と言われたって、とりつく島もないという感じがちょっとしますが…

平野 そうですね、まさか幼児になって英語国の家庭へ入るわけにもいかないし…日本でマザー・グースに親しむ一番手っ取り早い方法はレコード、あるいはテープを聞くことだと思います。自分の仕事のPRのようになって恐縮ですけどELECの『マザー・グース童謡集』のテープには基本的なものが66曲はっていますし、コロンビアからもカセット(『マザー・グース40選』LLK 205~6)が出ています。伴奏など音楽的には後者(コロンビア版)の方が凝っていますが、前者(ELEC版)の方がMother Gooseの実際の姿に近いでしょう。

海外のレコードですと洋書店などの店頭で買えるものでは、CaedmonのMother Goose(TC 1091)とSpoken Artsの2枚もののTreasury of Nursery Rhymes(857, 885)が代表的でしょう。特にSpoken Artsのものは伝承童謡レコードとしては、その収録数(104曲)からいっても、また芸術的な美しさからいっても現在もっともすぐれたものだと思います。こういうレコードに歌詞がついてなくて戸惑う人がいるかもしれませんが、Opie夫妻のOxford Dictionaryで原詩をさがし出すのはそう難しいことでないし、またそういう作業が何よりの勉強になるはずですよ。それから素人っぽい唄い方や地味な朗読が多くて、日本人の好みにあわないかもしれませんがFolkwaysの101 Nursery Rhymes(FC 7730)はMother Gooseの唄が、実際に、たとえば家庭などで伝承されている形にいちばん近いのではないかという気が私にはします。

理想をいえばレコードやテープだけでなく、実際に子供たちが唄ったり、遊んだりしている状景を写した16ミリのフィルムでもあれば、それがいちばん参考になると思います。“London Bridge”とか“Ring-a-ring 'o Roses”とか“Pat-a-Cake”などすべて動作を伴うわけですから、そういうものがわかる教材がほしいですね。ELECあたりでも聴覚の教材ばかりでなく、16ミリなどを使った視聴覚の教材を考えたいかがでしょうか。

——勉強法に関連していると思いますが、日本におけるマザー・グース研究の現状について少しお聞かせ下さい。マザー・グースの専門家は先生お一人なんですか。

平野 いや、とんでもない。私はなにも童謡の専門家ではないんですよ。昔からこつこつとマザー・グースを研究してきた方はたくさんいます。もうご退官になった

かもしれませんが、九州大学の吉竹（迪夫）先生など対訳でマザー・グース童謡集を出していますし——これは私の『マザー・グースの唄』よりずっと早く出たものです。現役では立教大学の吉田新一さんとか清泉（保育女子専門学校）の松峯隆三さんなど、みんな私より年季の入った本格的な研究をなさっているはずです。私などただ好きだから一般に分かり易く解説しているだけです。専門的な研究とはお義理にも言えません。

ただ専門的な研究となると、方法論的に難しい問題があると思います。たとえば古い童謡集の刊行史を調べるというのも一つのアプローチだと思いますが、日本においては1次資料の入手が難しく、ちょっと手が出ないという気がします。ですから、たとえば英文科の学生が卒論に Mother Goose をやってみたくと言っても、指導する側で困惑するのではないかと思います。第1、研究書とか参考文献が予想外に少ないのです。Opie 夫妻の例の *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes* などは汲めども尽きない深みがあり、内容も豊かですが、それ1冊だけで研究をまとめろといわれても無理かもしれません。だから、結局日本における Mother Goose の翻訳史とか紹介史、あるいはイギリスの伝承童謡と日本の伝承童謡（わらべ唄）の文化的・社会的比較といったようなテーマに限定されるのは今のところ止むをえないことかもしれません。

### 英語文化の理解のために

——先生のご本でマザー・グースの知識が英文学や英語の理解にいかにか大切かということを教えられたのですが、大学の英文科で講義題目にしているところが最近ふえているのでしょうか。

平野 大学の英文科なら初年度あたりで必修にしてもいいとは思っていますが、現実に講義しているところは少ないのではないのでしょうか。あんな幼稚な初歩的なものはバカバカしくて、という気持が大学側にあるのかもしれませんね。だからマザー・グースが講義題目になっているという話は、私自身関係したところ以外では聞いたことがありませんね。もちろん詳しく調べたわけがありませんから断定はできませんが、大学の英文科では相変わらず Mother Goose は無視され、黙殺されているというのが現状でないかと思います。マザー・グースだけでないのです。民謡とか伝承バラッドあるいは民話といった伝承文化は、すべて授業科目として市民権をえていないのです。

### 最近の「ブーム」について

——最近マザー・グースが流行している、とかブームになっているとかいうことを聞くのですが…

平野 そうね、たとえば谷川俊太郎さんの翻訳『マザー・グースのうた』（草思社）が何万部も売れたという点だけをとらえたら、ブームに近いと言えるかもしれませんね。それに、絵本や詩の雑誌に特集も出ますし。

しかし、谷川俊太郎のマザー・グースが売れるのは、谷川氏の翻訳がすぐれているからなので、マザー・グースなら誰が訳しても読者が飛びつくというものではないでしょう。日本の詩人や一般の読者の間にマザー・グースに対する関心が高まったのは事実だと思います。しかし私のように大学や英文学界だけからながめていると、流行っているという実感はまったくしませんね。たとえば、日本英文学会で研究発表の対象になったり、東大の英文科の講義題目になったり、さらに卒論の題目に盛んに取りあげられるといったような事態になったら、少しはマザー・グースが浸透したなという実感がするのでしょうか。

——つまり、一般の読書界でマザー・グースが受け入れられているほど英語関係者では問題にされていないということでしょうか。

平野 傾向としてはそういえると思いますね。私はマザー・グースのことでいろいろの方からお便りをもらいますが、その中で目立つのはかなり年配の人ですね。

——年配の人といいますと…

平野 昔、子供のころマザー・グースに親しんだという人たちですね。私の書いたものを読んでつい懐しくなって便りをよこすという人たちですね。戦争前に家庭でマザー・グースに親しんだという人たちが日本の社会にかなりいるんですよ。

——昔の日本の上流社会の人たちですか。

平野 いや、必ずしも「上流」の人たちというわけではないのです。ただ比較的西洋の文化に対して開放的だった階層ですね。都会の中流以上の、学校でいえば女性ならミッション系を出たという人たちが多くですね。いまの日本の40代以上の人で子供の頃マザー・グースの絵本なり、翻訳なりに親しんだ経験をもっている人たちというと、戦前のある階層というか social class が浮かびあがってきますね。大正教養派というのとつながってきますが、ちょっとうまく表現できません。ただし日本の英文学者でその階層出身者というのは比較的少ないようです。むしろ詩人の方に多いみたいです。

## 現代英語と Mother Goose

——先生の著書を読めばわかることだと思いますが、Mother Goose 効用——つまり Mother Goose に親しんでいるとどういふプラスがあるかということ——について具体的に例をあげてもらえないでしょうか。

平野 そうですね、前に本誌で引用したような気がしますが、*New York Times*に“Nixon's Money Problems/They Wonder How his Garden Grew”という見出しがついていたことがありました。Watergate裁判のまっさい中に Nixon の不動産の不正取得が問題になっていたところのことです。このままでも Nixon の不動産の増大に言及しているらしいということは分かるのですが、これは明らかに童謡の“Mary, Mary, quite contrary/How does your garden grow?”（メアリー、メアリー、つむじ曲がりのメアリーちゃん。お庭の具合はいかがです）をふまえたものなんです。ということは読者はこの見出しから自然に“Mary, Mary...”の童謡を連想し、つい“Nixon, Nixon, quite contrary...”と口ずさんでみたくなるというわけです。何でもない見出しのようですが「かたくなな Nixon」というイメージがそれから喚起されるのです。

もっと新しい例ですと、2週間ほど前に出たイギリスの *Economist* 誌 (Oct. 11, 1975) の表紙ですね。Harold Wilson 首相と野党党首の Thatcher 女史の似顔が前景にあって、その背景が山になっていてそのてっぺんに井戸がある、そういう表紙なんです。それに“Up the Hill”という caption がついているんです。野党党首と首相が協力していっしょに苦難の道を歩めるかどうか、という問いをこめているようですが、この表紙も明らかに“Jack and Jill went up the hill to fetch a pail of water...”という例の童謡を下敷きにしているのです。表紙をみただけでほぼ見当がつかますが、同誌の巻頭エッセイをみると、ウィルソンとサッチャーが手を組むとは思われない。もしそういうことをすれば、それぞれの党にヒビが入るだろう、というふうに解説されているんです。この後半のところは原文では“*They would break their party crowns if they did any such thing*”となっているが、これが *Jack and Jill* の童謡の後半部“*Jack fell down and broke his crown/And Jill came tumbling after*”をふまえていることはいうまでもありません。こういう時事文も *Jack and Jill* の童謡を知らなかったら、意味が非常にとりにくくなるのではないのでしょうか。特に“*break their party crowns*”など。気をつけてみると

こういう例は非常に多いんです。

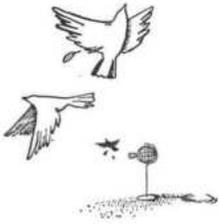
新聞・雑誌に限らず、ほかにもいろいろあります。たとえば反戦歌手が歌う protest song でもその訴える力の多くを、伝承童謡に負っているものが多いのです。たとえば Sidney Carter の名作 *Crow on the Cradle* など、あるいは Simon & Garfunkel が有名にした例の *Scarborough Fair* にしても伝承童謡をふまえているからこそ人々の心をとらえたのだと思います。Mother Goose の一応の知識がなかったら現代の folk song など、そうビートルズにしてもそうですが、その本当の味わいが分かるはずがない、といいたくなりますね。

——英語教育と関連しますが日本で子供のときから Mother Goose に親しませることの意味といったものについて何か一言…

平野 そう、純粹に英語教育の立場からということでしたら子供のうちに与えた方がよくおぼえますし、記憶の底に残るというプラスがあると思います。ずっと大人になってからの英語の勉強に役に立つことは確かです。これは私自身の体験からいっても断言できます。ただ、日本の伝承のもの、たとえばわらべ唄などを一切排除して英語圏に伝承されてきた Mother Goose だけを聞かせて育てる、という考え方でしたら賛成できませんね。マザー・グースに関心をもっていながら自国の伝承文化が全く気にならないとしたら、おかしいと思います。私は自分の子なら、むしろ日本の伝承文化の中で育ててほしいと思いますね。英語教育の観点から、すべてに優先するわけでないんですから。しかし、Mother Goose に親しんでおくこと英語のリズムとか、英詩の韻律をつかむ基本が自然に身につくとは言えそうです。調子が良く、憶えやすい——だからこそ伝承されてきたんですけど。

——最後になりましたが、先生とマザー・グースとの出会いについてお聞かせいただけませんか。

平野 ええ、Mother Goose と一番つき合いのあったのはカナダで小学生だったころだと思います。当時のカナダの国語——つまり英語ですが——の教科書なども、Mother Goose 中心に編纂されていたことを憶えています。だから私の英語の勉強は Mother Goose から始まったと言えます。中学生になって日本に帰り、あらためて英語を教わり、大学の英文科に進んだわけですが、どうも自分自身の英語の母体となっているものと日本で受ける英語教育とが違うような気がしてきたのです。何かが日本の英語教育—それ以上に英文学教育—から抜けているのではないかという感じが漠然とあったのです。それを意識的に探っているうちに Mother Goose にもどったという事でしょうか。(東京大学教授)



## マザー・グースのイラストレーション

YOSHIDA SHIN-ICHI

吉田新一

アリスがお姉さんの読んでいる〈絵のない本〉をのぞきこんで、眠気をさそわれたように、小さい子どもは活字の海だけのページには少しも興味をそそられない。ところが絵をみつけるとすぐに「読んで！」とせがみはじめる。そのことをジョン・ニューベリ以来すべての児童図書出版者は知っていたから、有能なイラストレーターを獲得することは彼らの営業の必要条件であった。彼らはまた、伝承童謡が昔話とならんでつねに子どもの興味を強くひく宝であることも知っていた。というわけで、子ども向きにイラストレーションをつけた伝承童謡の本が、それこそ無数といえるほどたくさん出版されてきたし、今もされている。

しかし、根本的なことをここで言うと、伝承童謡（わらべ唄）は純粹に〈言語体験〉、すなわち耳と口による経験であって、視覚は本来全く関与しないものである。英語のわらべ唄の性質と魅力はまさにそこにある。響きとリズムが直接「空想を解放し、舌と耳を魅惑し、心の目をたのしませる」（デ・ラ・メア）。それは口伝えで十分であり、それ以外では十全に魅力を発揮しえない。それは単純で、リズムカルで、自然に舌にのり、だれにでも記憶しやすい。舌もじり唄や意表外のイメージの連続する唄などは、となえにくさ、覚えにくさがかえって面白いのである。だから、英語のわらべ唄は本来〈本〉を必要としない。むしろ活字に組まれて固定されると、流動性が奪われて死んでしまう危険すらある。くりかえして言うと、英語のわらべ唄はことばだけで成り立っていて、それだけで十分なのである。従ってイラストレーションに依存しなければならない部分は、わらべ唄には本来ないという点を認識しておかないと、わらべ唄の本に付けられたイラストレーションの正しい評価はおこなえないことになる。

さて、子ども向けの〈わらべ唄の本〉には大別して二種類がある。ひとつは特に物語性のある唄を、主的一篇一冊の型で絵本にしたてた、いわゆる〈わらべ唄絵本〉。もうひとつは、多数のわらべ唄を一冊に集めて、主一篇にひとつずつさし絵をそえた〈さし絵入りわらべ

唄の本〉である。また、イラストレーターの状態にも大別して2つがある。ひとつは唄のことばが表面であらわしていることがらをそのまま忠実に絵にあらわすタイプで〈消極型〉。もうひとつは、想像力を大いに働かせて唄の行間を読み、唄の意味を拡大する〈積極型〉である。

〈わらべ唄絵本〉はほとんど〈積極型〉で製作されている。

〈わらべ唄絵本〉の伝統はランドルフ・コルディコットによって確立され、レズリー・ブルックを経て、現代のモーリス・センダックに至る。今日、ポール・ギャルドン、パーバラ・クニー、ピーター・スピア、エド・エムバリなどが「ロンドン橋がおこちる」「ジャックの建てた家」「こま鳥を殺したのは誰」などで個性豊かな絵本を作っているが、コルディコットのしるぐ人はまだ現われていないように思う。コルディコットは単に〈わらべ唄絵本〉という枠の中だけでなく、広く〈絵本〉そのものについて強力な規範を確立した作家であるが、彼はわらべ唄の雰囲気を実に適確につかんだ。コルディコットの師と仰ぎ、讃嘆のことばを惜しまないセンダックは、コルディコットの絵本を〈音楽と踊り〉であると要約しているが、それこそまさに英語のわらべ唄の世界である。コルディコットのわらべ唄絵本のもうひとつの特徴は明るいユーモアに満ちあふれていることだ。同時代のケート・グリナウェイやウォルター・クレーン、少し遅れてアーサー・ラッカムなどのものとくらべると、コルディコットのユーモアは一段と光彩をはなち、笑いが彼の生命であることがわかる。（もっとも、英語のわらべ唄は明るい笑いばかりでなく、おどろおどろしい世界の笑いもあって、それらはむしろラッカムの絵がふさわしく、さらに辛辣な笑いとなると現代のチャールズ・アダムズを待たなければならない。英語のわらべ唄は実に多様な接近を可能にするものだ！）たとえば「とうさんは子どもにうさぎの毛皮を着せようと狩りに出かけた」という4行の唄は、コルディコットによって〈とうさんは獲物がなくて毛皮屋で買って帰った〉とユーモラスに読まれ、12頁の絵物語に仕上げられる。父の勇んで出かける姿も、

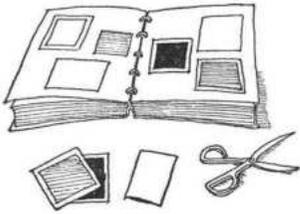
帰り道毛皮屋の前で毛皮を買うことを思いつく姿も実に滑稽であり、それに無心な子どもの姿が配されるのである。さらに最後には、子どもがうさぎの毛皮を着て乳母と野原に散歩に出かけ、うさぎたちがいっせいに巣穴からのび上ってその子を見ている一枚の絵が加えられる。これは、鉄砲をもたない人間の前には動物たちも安心して姿をあらわすとも、子どもが自分の着ている毛皮のものをはじめて発見する場面ともとれるが、いずれにせよその一枚の絵によって絵本は、少し大げさだが、思想的深みを一段と加えたことになる。「ヘイ、ディドル、ディドル、ねこにバイオリン」でも、お皿がスプーンと駆け落ちした後でもう一枚絵が加えられている。それはお皿が床にたおれて十片にくだけ、スプーンは怒ったナイフとフォークの両親に引き立てられていく図であるが、そういう悲劇をおわせることばは唄の中には全くない。純粹にコルディコットの独創である。センダックはその点を指摘して、「悲劇的なもの」と〈よろこばしいもの〉の共存する人生の真実に対してコルディコットはつねに正直なヴィジョンを読者に提供したと言う。人生についてのそういう釣り合いある感覚は、子どもたちにとって大きなおくりものである。上に述べた〈積極型〉はコルディコットのように、わらべ唄に積極的に光りをあて、内に隠されているものを輝やかすのを最上の模範とする。

わらべ唄は実にさまざまなイメージを喚起する。英語のわらべ唄はイメージの宝庫と言ってもいい。だからこそ画家たちは進んで、あるいは競ってわらべ唄のイラストレーションを試みるのであろう。しかし、〈さし絵入りわらべ唄の本〉は読者がめいめい自由に自分のイメージをつくるのを、さし絵が助ける、あるいはさし絵を見る者に新たなイメージをよびおこす、そういうさし絵であるべきだろう。画家が自分の絵を見せることのみによけるのはもってのほかで、そうなるともはや〈わらべ唄の本〉ではなくなってしまふ。よく知られているブライアン・ワイルドスミスの『マザー・グース』はそのたぐいではないか。むしろことばの語ることを文字通り素直にイメージにあらわす〈消極型〉が、かえって〈わらべ唄の本〉にはふさわしい。ソフィスティケートしない、単純で卒直で美しい絵は子どもに、より受け入れやすいだろう。ブロンシュ・F・ライトの『リアル・マザー・グース』がアメリカで半世紀以上も人気を博しつつづけたことは、その意味で理解できる。ただ、ライトの絵はいかにもユーモアにとぼしい。

さて、以上のような判断の結果、現在次の3冊がすぐれた〈さし絵入りわらべ唄の本〉としてまずあげられる

だろう。①キャスリン・ライズ編ハロルド・ジョーンズ絵『ラベンダーは青い』(オクスフォード) ②レイモンド・ブリッグズ絵『マザー・グース・トレジャー』(ハミッシュ・ハミルトン) ③ブライアン・オルダーソン編ヘレン・オクセンベリ絵『ケーキとカスタード』(ハイネマン)。①のジョーンズの絵は、グリナウエイの優美さ、クレーンの装飾的趣好、コルディコットの踊りと音楽を総合したような絵である。落ちついた色調で背景につねにイギリスの田舎の風景が描かれていて、見ていると田舎の音や香りや空気が実感されてくる。(アメリカのマーガリート・ドゥ・アーンジュリの『わらべ唄の本』もイギリスの田舎の風景が描きこまれている。)画面はどれも出来事や動作や感情の動きのさなか、ちょうど映画のフィルムのコマを突然とめたように静止してみえる。が、見ているうちにいつのまにかこちらの脳裏でそれらが動きだしているというふしぎな魅力をもった絵である。②③はいずれもユーモアと個性に富んだ絵で、それぞれ『ファーザー・クリスマス』『ファンブル・ワンダルのぼうし』の作者の面目躍如たるものがある。

英語のわらべ唄の研究者、あるいはイラストレーターにとって尽きぬ魅力をもつのは④オービー夫妻編『オクスフォードわらべ唄の本』⑤レオナード・ドゥ・ヴリース編『よろこびの花かずら』⑥ドーヴァ出版社の復刻版『(マンロー=フランシス 1833年版) マザー・グース・メロディーズ』にみられる木版画のイラストレーションである。④は編者が1744年以降19世紀末までの各種わらべ唄の本から苦心の末集めた木版さし絵を再録しておりビュウィックのものなど特に興味深い。⑤はカナダのトロント市の有名な〈オズボーン文庫〉の所蔵本から選んだ各種児童文学古典作品の復刻集であるが、その中に〈チャップブック〉によるわらべ唄の本など多数収録されている(その中に1813年ジョン・ハリス出版の〈ピーター・パイパーの舌もじり唄ABC仕立て〉が含まれているが、1974年チャット=ウィンドラス社からフェイス・ジュイクスの絵により、そのリバイバル版が出版された。ジュイクスの絵は1813年版の絵をいちいちふまえたもので両者をあわせ見ると興味つきない)。⑥はアメリカで出版された最初期の〈わらべ唄の本〉であるが、もとはイギリスから渡ったもの。以上の木版さし絵は多くが見るものにイメージを強くかきたてるもので、それらにふれて、あらためて現代人の想像力の貧弱さを嘆きたくなるのはわたくしひとりであろうか。(立教大学教授)



## 雨の降る日は・・・

TAKAHASHI YASUNARI  
高橋 康也

「事物には先天的秩序は存在しない」と言ったのは、ウィトゲンシュタインである（『論理哲学論考』5. 634）。もちろん「初めにカオス（混沌）ありき」とは、すべての天地開闢神話の大前提であって、なにも20世紀の論理哲学者をまつまでもない。そして、人間の文化とは、このカオスをコスモスたらしめるための、つまり秩序と意味の存在しないところに秩序と意味を作り出すための、努力の総体にほかならない。

この秩序づけ、意味づけの体系としての文化が、17世紀以降の近代ヨーロッパにおいて、いちじるしく「合理主義的」になってきたことの危険は、繰り返し指摘されてきた。ロマン派や象徴派の運動も、そのような近代合理主義と、それを踏まえた近代ブルジョア社会への、熱心な異議申し立てであったのは、周知のとおりであり、今世紀にいたっては、芸術と思想のすべてが「近代の超克」の試みであると言えよう。とりわけ、「近代」がいつのまにか安易にも当然の前提のごとくみなすにいたった「事物の先天的〔合理的〕秩序」を否定して、最も根底的な批判を行なった一人がウィトゲンシュタインであった。しかも、「前提」をゼロに還元した上で、そこから純粋に論理的構造としての世界を改めて構築してゆくその厳密な方法において、彼はまさしくヨーロッパ的である。彼の思想は、近代西欧がみずから生んだ最高の知性を通して行なったラディカルな自己批判なのである。

たかが童謡の話をするのに、なんと大仰な前置きかと言われそうである。しかし、イギリス最初の童謡集『マザー・グース・メロディーズ』が編集刊行されたのが18世紀中葉だったという事実は、以上のような文脈で考えると、必ずしも偶然ではない意味をもってくるように思われてならない。合理主義＝プロテスタンティズム＝資本主義の近代的三位一体が17世紀後半以降ようやく形成され始めたとき、思いがけぬ形で提出された異議申し立てがこの童謡集ではないのか。ちょうど1世紀のち、合理性＝有用性＝日常性の現実原則がますます支配権を強めるにいたったヴィクトリア朝のまっただなかに、やは

り思いがけぬ異議申し立てとして、『不思議の国のアリス』なる童話が発表されるだろう。

もちろん、『マザー・グース』の発行者ジョン・ニューベリーがそんな大それた時代批判の意識をもっていたというのではない。むしろ彼自身は商才にたけた出版業者にすぎなかったらしい。とすれば、彼の意図を超えた深い何物かが彼を動かしたのではないか。ともあれ、童謡とは、集会的にはセンス（合理性）以前の民族的意識の古層から生まれ、個体的にはセンス（分別）以前の幼年期によって継承されるものであってみれば、そこにはおのずから「近代」と「大人」の「センス」への批判が含まれずにはおかぬはずである。

\* \* \*

「マザー・グース」の多様な豊かさには圧倒されながらも、ぼくはこの世界のいわば「原点」として、一つの「混沌」を仮りに想定したいと思う。この原初的な混沌を示す「原風景」は、次の唄である――

Hey diddle-diddle,  
The cat and the fiddle,  
The cow jumped over the moon,  
The little dog laughed  
To see such sport,  
And the dish ran away with the spoon.

これはまことにウィトゲンシュタイン的な「先天的秩序の不在」を思わせる図である。あるいは、ハムレットふうに「世界の関節がはずれた」光景といってもいい。

ただ、この宇宙的テンヤワンヤは、デンマークの王子の蒼ざめた苦悩とも、またウィーン生まれの哲学者の論理的努力とも、無縁である。関節のはずれた世界を直すべき使命を負ったわが身を呪いつつ、狂おしい苦闘に瘦せ細ってゆく2人のヒーローとは打って変わって、この唄の動物たちは「愚者の楽園」で嬉々と戯れている。これは「喜ばしき混沌」なのである。知的ヒーローが身をさらす狂気の危険は、これらのフル（道化）たちの知らぬところである。正気と狂気の近代的区別の及ばぬ世界に、彼らは生きているのだから。ここには、いかなる

抑圧もない。

むろん、ある意味では、これは全くの混沌ではない。「牝牛が月を跳びこえるのを見たために小犬は笑った」という因果関係は少なくとも一つの論理的秩序であろう。また *diddle* と *fiddle*, *moon* と *spoon* の押韻も言語的秩序を意味しよう。いやこの混沌が言語で表現されているという事実そのものが秩序のしるしとも言える。言語とはすでに一つの秩序なのだから。最後に、これは歌われる唄であって、そのリズムとメロディーという音楽的形式が、何よりも混沌を秩序づけているわけである。しかし、以上の留保をつけた上で、なおここには原初的な混沌が提示されていることを確認していただろう。

\* \* \*

だが、たとえ「喜ばしき」種類のものにせよ、「混沌」は混沌である。そして「マザー・グース」の世界といえども、これを秩序へともたらす努力なしには世界として成り立つことはできない。数え唄やアルファベット唄は、この角度から見れば、数字と文字という最も基本的な秩序の要素を、混沌の上に課してゆく試みと言えよう。

個体的には「大人」が、歴史的には「近代」が、行なってきたところの「合理化」も、根本は同じ試みにほかならない。この「合理性」を「有用性」へと応用し、さらにこれを「慣習」「約束」「道徳」へと水増しして行きわたらせたところに、われわれがふつう生きている「日常性」の世界が成り立つわけである。

「マザー・グース」がこの日常性の諸原則をひっくり返すのを得意としていることは、よく知られている。この逆転のあの手この手をいちいち紹介する余裕はないが、思いつくままにいくつか挙げれば——ハバードお婆さんのあらゆる心遣いが犬によって次々と不条理にはぐらかされる絶妙なドタバタ喜劇、週の曜日によって一生の運命を決定されるソロモン・グランディの話、靴の中に住む極小のお婆さん、またその理不尽な子供への仕打ちなどなど。しかしとりわけここで重視したいのは「論理的」逆転において最も徹底した次の唄である——

Three children sliding on the ice  
Upon a summer's day,  
As it fell out they all fell in,  
The rest they ran away.  
Oh! had those children been at school,  
Or sliding on dry ground,  
Ten thousand pounds to one penny,  
They had not then been drowned.  
Ye parents who have children dear,  
And eke ye that have none,  
If you would keep them safe abroad  
Pray keep them all at home.

このポーカークェイスによる論理的背理の連発は、のちのキャロルのノンセンスやシュルレアリストたちの幻想に劣らぬ痛快な、日常性への攻撃になっている。痛快さとは、もちろん、われわれを縛っている論理の桎梏からの解放の快感に由来している。

\* \* \*

だが、逆転だけが「マザー・グース」の戦略ではない。全く逆の手を使うこともあるのである。逆転の逆——つまり日常的論理を全くありのままに受けいれてみせることによって、紛れもないノンセンスを生ぜしめる方法である。言いかえれば、相手の方法を相手以上に馬鹿正直につきつめることによって相手を葬るという、古典的「帰謬法」(*reductio ad absurdum*)の手口の応用である。論理的因果関係を金科玉条とする近代的・大人の思考への風刺として、次の唄ほど単純かつ有効なものはないとあるまい——

There was an old woman  
Liv'd under a hill,  
And if she isn't gone,  
She lives there still.

ゴールドスミスとおぼしき18世紀の注釈者はこの唄に「まことにこれこそ真理の本質をなすところの自明の命題である。これにあえて反論をなすものはあるまい」と短評を加えているが、このおとぼけはなかなか利いている。命題を論理的に厳密化することによって命題そのものの消滅を企んだウィトゲンシュタインは「論理の諸命題は、同語反復命題(トートロジー)である。それゆえ論理の諸命題はなにごとくも語らぬ」(『論理哲学論考』6. 1; 6. 11)と書いているが、このとき彼はこの童謡を引用してもよかったはずである。ほかに、'When nobody's with m/I'm all alone' とか 'when they were up, they were up,/And when they were down, they were down,/And when they were only half-way up,/They were neither up nor down' など、同系のノンセンスは「マザー・グース」に少なからず見出される。

1925年のこと、アメリカの W.S. ストナー夫人という、その昔3歳でタイプライターを使ったといわれる天才児の成れの果てのご婦人が、「マザー・グース」のノンセンスに立腹し、もっと「事実」を教える有用な童謡を作って発表した。たとえば——

Every perfect person owns  
Just two hundred and six bones.

彼女は自分がどんなに「丘の麓のお婆さん」的ノンセンスを書いてしまったか、ご存知なかった。まして、極東の島国で同種のノンセンスが諺になっていることも、——「雨の降る日は天気が悪い。」 (東京大学助教)



## アメリカで聞いたマザー・グース

WAKIYAMA REI

脇山 怜

編集部から、アメリカでのマザー・グースについて書け、との注文である。マザー・グースの研究では、大家の平野敬一先生がいらっしゃるので、私は、幼児2人かかえて主婦として滞米した間に、暮らしの中で実際に耳にした、あるいは目にしたマザー・グースについて、いささかぬかみそ臭い(?) 印象記的レポートを書いてみたい。そこで思い出されるのは、次のような光景である。

風景1: ある日、隣の主婦がバターを借りに来てこんなことをいった。Our refrigerator is as bare as Old Mother Hubbard's cupboard. I guess I have to go to the supermarket.

風景2: ウォーターゲート事件で国中が騒然としていた頃、新聞や雑誌が、ある定型化した発想の漫画時評をたびたび掲載していた。ニクソンもアグニューも特別補佐官たちも、卵に戯画化して描かれ、塀とかホワイトハウスの上に辛うじて乗っている構図である。私の手許に、当時の副大統領アグニューが今にも落っこちそうな不安定なバランスで議事堂に腰かけている漫画を表紙にした *Newsweek* (1973年10月8日号) があるので、お目にかけよう。



*Newsweek*  
10月8日号の  
表紙

風景3: 私の友人に、ご主人はおとなしいが、奥さんは婦人会にボランティア活動にと外を飛びまわっている夫婦がいた。あるパーティーの席上で、私をご主人に向

かって奥さんの活躍ぶりを賞めたら、彼はウィンクしていった。I feel like putting her in a pumpkin shell, you know. すると、そばにいた紳士が、So you're another Peter, aren't you? と、同情のまなざしを向けた。

風景4: ある時2歳の坊やのベビーシッターをしたが、途中で泣き出してしまった。おもちゃを与えても、抱いてもだめ。「むすんでひらいて」を初め知っている限りの日本のお遊戯をしても、なじみがないからだろう、全然泣きやまない。やがて、隣の主婦が助けに来てくれ、坊やをひざに乗せて、こんな詩を recite した。

This little pig went to market;  
This little pig stayed at home.  
This little pig had roast beef;  
This little pig had none.  
This little pig said, "Wee, wee, wee!  
I can't find my way home."

最初の This little pig...で子供の足の親指をつまみ、次々に小指まで行く。Wee, wee...以下で身体をあちこちくすぐる。坊やはここでキャッキョッと笑い出し、私は無事にベビーシッターを勤めることができたのだが、アメリカ人の子供を預かる時には童謡の一つも覚えておかないと...とその必要性を痛感したのだった。

上に挙げた1から3までのシチュエーションの会話や漫画は、いずれもマザー・グースが下地になっていることに読者はお気づきだろうか。もとの歌を知らないと何のことやわからないものもある。知らなくても何となくわかるものもある。しかし後者の場合でも、もとの歌を知っていた方が会話や漫画に含まれている意味や風刺がより深く理解でき、それによって誘われる笑いも一層楽しさを増すのではなからうか。

たとえば、風景1では、下の歌を知っていれば、なぜ突如として Old Mother Hubbard という名前が出て来るのかと、ポカンとしないでもすむ。

Old Mother Hubbard  
Went to the cupboard,  
To give her poor dog a bone;  
But when she got there

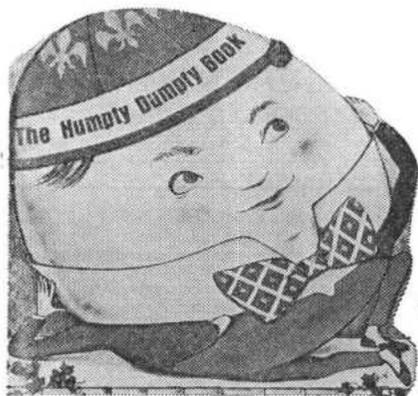
The cupboard was bare,  
And so the poor dog had none.

自分の家の冷蔵庫を指して as bare as Old Mother Hubbard's cupboard といった奥さんは、高校を出ただけの平凡な母親である。しかし、幼時から親しみ、今は自分の子供たちに繰返し聞かせてやっているマザー・グースである。ふと口をついて上のような比喩が出たのだろう。聞く側にしても、この歌が生活感覚の一部になるほど身体にしみ込んでいる英語国民なら、彼女の冷蔵庫がスッカランである様子が、実感を持って目に浮かぶのだろう。

こうして新大陸でも生き続けている Mother Goose が、イギリスの伝承童謡の総称であって、nursery rhymes と呼ばれていることは、周知の通りである。Mother Goose と呼ばれるようになったのは、1760年に John Newbery という人が、それまで口から口へと歌い継がれて来たわらべ歌を本にまとめ、*Mother Goose's Melody* という題をつけたからだといわれている。Mother Goose とは一体誰かという推測もなされたようだが、架空の人物と見るのが一般的である。絵本の表紙によく描かれているのは、トンガリ帽をかぶりガチョウにまたがって空を飛ぶおばあさんだ。このおばあさんが童謡を運んで来てくれる、と子供たちは信じているのだろう。

さて、風景2に出て来る政治漫画は、その本当の「ところ」は次のようなマザー・グースにうかがわれるのだ。

Humpty Dumpty sat on a wall,  
Humpty Dumpty had a great fall;  
All the King's horses and all the King's men  
Couldn't put Humpty together again.



絵本 *Humpty Dumpty* の表紙

マザー・グースの中には riddle (謎々遊び) もいくつかあって、これは本来は「一度こわれたら元通りになら

ないものなみに」という謎々で、答えが卵であることは周知の通りである。ニクソンやその周辺の人々がハンブプティ・ダンブプティに戯画化された時、歌になじんでいる人にとっては、やがては栄光の座から落ち、こなごなに砕けるという、これから起こる無残な姿まで生き生きとしたイメージで喚起され、風刺の辛さもよけいビリッとするのはなかろうか。

平野敬一先生は、「マザー・グースの世界—伝承童謡の周辺」(ELEC 選書)の中で、いみじくもマザー・グースを英語国民の「知的共有財産」と呼び、さらに浸透度の大きいハンブプティ・ダンブプティなどは「最少限の英語の常識」と指摘しておられるが、私も実際にアメリカで暮らしてみてその感を深くした。

ハンブプティ・ダンブプティなどは、漫画だけでなく、新聞や雑誌を読んでも、テレビのニュース解説を聞いていても、しばしば比喩的な表現の中に登場するが、そんな時、アメリカ人なら特に教養が高くなくてもピーンと来るらしい。ところが、英文科出身の私はいえ、成生変形文法やアイアンピック・ベンタミターなどの難しいことは勉強したが、マザー・グースについては、特に有名な“London Bridge”とか“Mary Had a Little Lamb”を除いては、恥ずかしながら全く知らなかった。そこで、息子が幼稚園で習って来る歌を家で歌いたがっても母親が教えてやれない、という事態を避けるため、そしてもう一つは、平野先生のおっしゃる「最少限の英語の常識」を身につけるため、私はマザー・グースの絵本やレコードを買い込んだのだ。

次に風景3の、ちょっと謎めいた会話の「ところ」をさぐってみよう。この哀れなご亭主は、その心境を下のような童謡に託して語ったものと見える。

Peter, Peter, pumpkin-eater,  
Had a wife and couldn't keep her;  
He put her in a pumpkin shell,  
And there he kept her very well.

この歌を知っていれば、もう一人の紳士が「すると、あなたもまた一人ピーターと同類のご亭主というわけですね」と同情した理由も、容易にわかるのである。こういったジョークを英語国民と同じレベルで楽しむには、学校英語の域を越え、童謡にまで及ぶ、余裕ある英語力が必要とされるようだ。

ところで、Peter, Peter, pumpkin-eater の歌は、女性侮辱の歌としてウーマン・リブの闘士達から攻撃を受けている。妻をカボチャをくり抜いた中に閉じ込め、その行動を束縛するという発想はけしからんというのだ。女性とは家にいて家事をする人、女の職業は看護婦、スチュワーデス、小学校の先生というような、性別によ

る役割や職業の定型化を、ウーマン・リブは sex-roll stereotyping と呼んで攻撃し、教科書や絵本からそういった類のさし絵や表現を一掃することを活動の一環としているが、マザー・グースの歌としてその対象にされることがあるのだ。

マザー・グースの歌をモチーフにしたおもちゃは、私の見た限りではあまりないが、カリフォルニアの友人宅で、カボチャを型どった家の中に小さな椅子が並んだ Peter's House という人形の家を見た。また、はめ絵をして絵を完成させる jigsaw puzzle にも、マザー・グースの歌でおなじみのシーンを描いたものが、8~10種類売り出されていた。

おもちゃはさておき、マザー・グースはレコード界ではどんな位置を占めているのだろうか。マザー・グース=童謡という概念から、アメリカの子供が聞くレコードはマザー・グースばかりかという、決してそうではない。おもちゃ屋やドラッグストアに行くと、マザー・グースだけを集めたレコード、それ以外のポピュラーな童謡やアメリカ民謡 (“Oh Susanna”, “Home on the Range”, “I've Been Workin' on the Railroad”などもよく子供のレコードに入っている)を集めたもの、マザー・グースも民謡もクリスマスの歌もいっしょにしたレコードなど、いろいろある。

遊戯用の activity songs を集めたレコード、お誕生パーティーの時に歌う歌を集めた party-time songs のレコードもある。アメリカの子供用レコードの中で大きな比重を占めるものに、“The Three Little Pigs”とか“Snow White”のようなお話のレコードもある。

これらのさまざまなレコードと並んで人気があるのは、「セサミ・ストリート」の中に出て来る歌のレコードである。こちらの方は、何といてもテレビという強力な媒体があるし(ワシントン地方では、月曜から金曜まで午前中と午後と夕方と1日3回「セサミ・ストリート」を放映していた)、その中で歌われる歌も、農耕社会の産物で動物や農村の少年少女が主人公になることの多い、いとも牧歌的なマザー・グースと違って、現代の生活感覚によりよくマッチしている。

それに第一、ビートの効いた歌が多い。ロック調というか、聞いたらゴーゴーを踊り出したくなるようなリズムの歌が、現代っ子、特にアメリカの子供たちにはアピールするようだ。そういう意味で、大変素朴なメロディーを持ったマザー・グースは、刺激が足りないのだろうか、ごく幼い頃には親しんでいても、ある年齢になるとマザー・グースを卒業して「セサミ・ストリート」の歌がよくなったり、特に男の子の場合は、もう4歳にもな

れば、テレビの「バットマン」や「スパイダーマン」の主題歌を威勢よく歌うようになる子が多い。

したがって、風景4のように play rhyme と呼ばれる、遊戯に伴うマザー・グースに子供が触れるのは、極めて幼い時である。This little pig... は toe rhyme であるが、これと同じくらいポピュラーで手を使ってする「赤ちゃんあやし歌」に、Pat-a-cake, pat-a-cake...がある。子供は大人のひざの上に乗せてもらい両手を握ってもらって、Pat-a-cake, pat-a-cake, baker's man./Bake me a cake as fast as you can./Roll it and pat it and mark it with “B,”/And put it in the oven for Baby and me. と手のひら遊びをしてもらいながら、人生の極めて初期にマザー・グースに引き合わされる。この歌はメロディーを付けても歌われるようだが、私の会ったお母さんたちは皆詩を調子よく recite していた。

やがて幼稚園に行き始めると、日本で「通りゃんせ」の遊びをする時のように2人の子供がトンネルを作り、その下を他の子供がくぐる遊びを覚えて来る。これは London Bridge is falling down... というマザー・グースをうたいながらするのだ。また、Ring around rosies/A pocket full of posies/Hush-a, hush-a,/we all fall down. という歌を歌いながら、初めの2行では手をつないでグルグルまわり、あとの2行で地面に倒れる遊戯も習って来る。

家に帰れば、オルゴールを仕掛けたおもちゃで遊ぶこともある。うちの子供たちは滞米中に、そういう類のおもちゃを3度プレゼントされたが、いずれもマザー・グースの歌を奏で、伝承童謡が如何に生活の中に定着しているかを見せつけられた。ブタの貯金箱は、Hickory, dickory dock/The mouse ran up the clock./The clock struck one, the mouse ran down./Hickory, dickory dock. という歌のメロディーを奏でたし、縫いぐるみのリスは“Mary had a Little Lamb”(イギリスの伝承童謡が大部分を占めるマザー・グースの中では、これは珍しく、ボストンの Sarah Hale という婦人が作ったといわれる)を奏でた。トランジスター・ラジオの形をしたおもちゃは、“Little Bo-peep”, “Jack and Jill”, “Mistress Mary”などのマザー・グースを3曲と、そして“Twinkle, Twinkle, Little Star”を奏でるといふ具合だった。

絵本ともなれば18世紀風のクラシックなさし絵の入った6ドルぐらゐの高価なものから(これはお母さんたちが自分で見て楽しむために買うことが多い)、ドラッグストアやスーパーマーケットで売っている29セントぐらゐの安いものまで、何十種類ものマザー・グースが出て

(p. 38 へつづく)

## 2, 3 の

## nursery rhymes について

ASHIKAWA CHŪZABURŌ

芦川 長三郎

Lewis Carroll の *Alice's Adventures in Wonderland* の中で、Alice が Mouse に “You promised to tell me your history, you know, and why it is you hate—C and D.” という個所がある。この “C and D” に次のような注釈がついている。『「C and D」ここでは無論 Cats and Dogs ですが、学校だと Conversation and Dictation で生徒の嫌がるものかも知れませんね。日本語で、「すし」を「おすじも」、「かみ」を「かもじ」などと略するのはこの流儀です。私の処で「おかあさん」のことを「かの女(♀)」と言ったら、6つになる子供が「おとうさん」を「との女」と言ったので大笑いでした。』

これは、謹厳をもって知られた故岩崎民平先生の注釈である。ふざけちらしたこの fantasy の原作者——牧師の子に生まれ謹厳な数学者であった Lewis Carroll——の霊が、まるで岩崎先生に乗り移ったかのようである。

この *Wonderland* には、マザー・グースの歌とその替え歌がいくつか使われている。たとえば、Hatter が (p. 120) “Twinkle, twinkle, little bats!” と歌い始めるが、これが有名な “Twinkle, twinkle, little star!” の替え歌であることは、日本人でも少し英語の素養のある人なら、たいていは知っている。すなわち、元歌を想起しながら、この passage にこめられた humor を味わうことができるのである。

ところが、次の歌になると、どうであろうか。Court of justice の場面で (p. 200), The King and Queen of Hearts の前に、The Knave of Hearts が鎖につながれて引き出されてくる。White Rabbit が parchment scroll を次のように読みあげる。

“The Queen of Hearts, she made some tarts,  
All on a summer day,  
The Knave of Hearts, he stole those tarts  
And took them quite away!”

これには、もちろん注がついていて、読者はこれが nursery rhymes の一つであることを知る。また、英米

の引用句辞典でも手許にあり、それが利用できる人なら同様のことを知ることができるだろう。しかし、それが分かったとしても、“Twinkle, twinkle...” のような訳にはいかない。あーそうか、と思うだけで、あまり面白くは感じない。落語のおちを説明してもらったような味気無さがある。そういう意味では、“Twinkle, twinkle...” は、いわば日本の nursery rhyme になった例外的な英語の童謡とっていいだろう。この ‘The Queen of Hearts’ などはまだいい方で、大多数の nursery rhymes は辞書にも引用句辞典にもものっていないらしいのである。そうすると、日本で英語の教育を受けた人間には、悲しいかな、この種の楽しさを味わうことはできないことになる。せめて、意味のとり違えだけはしないように、せいぜいこの分野の勉強もしなくてはならないと思う。

*Wonderland* は、作者の同僚 Liddell 教授の娘さん達に語って聞かせた話に基いたものであるから、その中で用いられた nursery rhymes や替え歌が、彼女達の熟知したものであったことは間違いない。しかし、nursery rhymes も幾百とあれば、時代により、場所により、階級により、人口に膾炙した度合いに差があるのではないだろうか。Shaw の *Pygmalion* の中で、次のような nursery rhyme が使われている。花売り娘が、英語を教えてくれとって、Higgins 教授の家へやって来る。

Higgins. Whats your name?

The Flower Girl. Liza Doolittle.

Higgins. [*declaiming gravely*]

Eliza, Elizabeth, Betsy and Bess,

They went to the woods to get a bird's nes';  
Pickering. They found a nest with four eggs in it:  
Higgins. They took one apiece and left three in it.

*They laugh heartily at their own fun.*

Liza. Oh, dont be silly.

Mrs Pearce. ...

Liza. Well, why wont he speak sensible to me?

この rhyme は、なぜなぞにもなっていて、4つの卵のうち3つ残ったのは、4人が同一人物だったから、というのが答えになる。そして Elizabeth の別称の数が多いことを笑うのがねらいである。ここではそれが、Higgins と Pickering の2人にしか分からず Liza には通じていない様子なのである。Shaw は ‘at their own fun’ とって、2人の冗談から Liza をわざと除者にしている。それとも、Liza も知ってはいるのだが、大人の大人が童謡なんてばからしい、という意味で ‘dont be silly’ とிட்டののだろうか。どうも、この辺り、nursery rhyme にも階級識別の働きがあるように思えるのであるが、どうであろうか。

(成蹊大学教授)

## 無駄ばなし・

### マザー・グースと私

TANIKAWA SHUNTARŌ

谷川 俊太郎

翻訳をするようになってから、かえてマザー・グースという言葉に対する感受性がぶくなったみたいだな。以前はこの言葉になにか特別な感情をよび起されていたような気がする。やはり一種のエグゾティシズムなのかな、英語圏の伝承わらべうたと呼ぶほうが正確なんだろうけど、そういう言葉では決してよび起されない雰囲気、マザー・グースという言葉はもってるんだ。やるせないような、甘ったるいような、それでいてちょっと無気味なような——たとえばラファエル前派の絵に象徴されるような西洋へのあこがれを、少なくともぼくは感じていたと思います。

いまの若い人たちには、そんな感情はないのかと思ってたら、これがそうでもないらしい。西洋骨董を部屋の中に飾るなんてのがけっこうはやってるし、マザー・グースというのもそんな舶来品のひとつなんだな、きっと。ただこの舶来品には一種の倒錯したノスタルジアのおいがつきまどって。日本人なんだから日本の古いもの、昔のものにノスタルジアを感じるのならよく分かるよ、でも西洋の古いものにそれを感じるとしたら、これは何なんだろう。そこまでわれわれはどっぷり西洋文明に浸ってきたということなのかな、それともこれもいまだに続いている西洋と一体化したいというわれわれの昔からの無意識の欲望のあらわれなのかな。

英語の伝承わらべうたみたいなものには、ぼくは比較的幼いころから親しんでました。母が同志社の出で、ピアノも弾いたもんだからたとえば、“Twinkle, Twinkle, little star”なんかをよく英語で歌ってくれたのを憶えている。白秋や夢二の訳にはっきりした記憶はないけれど、揃えて買ってもらったアルスの児童文庫なんかに少しは入ってたんじゃないかな。とにかく自分でも気づかないうちにマザー・グースという言葉覚えて、それがどんなものかもおぼろげながら分かってたと思う。詩を書き始めて数年したころから、それを少々自覚的に考えるようになったかな。

1959年の初め、そのころのいわゆる鍋底景気と皇太子御成婚をひっかけてぼくはこんなパロディを書いている。

一万円札の歌を歌いましょ  
ポケットはからっぽ  
二十四人の友だちお鍋の底で火の車  
お鍋あけたらみんな不能になってた  
王子さまお祝いするには  
ちと貧弱すぎる御馳走だな

この詩をのせてくれた雑誌を当時編集していたのが、今度堀内誠一とぼくの〈マザー・グースのうた〉を出版してくれた草思社の加瀬昌男氏だったというのも何かの縁のような気がするけど、縁という偶然だけじゃなくて、一部の詩人や編集者の中に、マザー・グースへの関心が一貫してくすぶってたのは事実です。日本のわらべうたとちがってひどく人間くさいところとか、口承でしか伝わらないだろうノンセンスな音のおもしろさとか、よみびとしらずであるが故の詩のひろがりの大きさとか、いろいろな面で魅きつけられていた。

でもマザー・グースを翻訳するってことには特に積極的な興味はもってなかった。むしろマザー・グース的なものの等価物を、日本語で書き下すことのほうに興味があった。それでも1970年だったかな、中央公論社からリチャード・スカーリーのマザー・グース絵本を訳してみないかって話のあったときは、多少ためらったけど結局ひきうけちゃった。あの仕事が曲がりなりにもできたのは、平野敬一さんのおかげです。そしてその後も、ぼくのマザー・グースの翻訳で公表されたものはほとんど平野さんに目を通していただいています。平野さんがいらっしやらなければ、きっといろいろ恥をかいたと思う。

たとえば“Come, butter, come”っていうのがありますね、読んで反射的にぼくは空飛ぶバターがこっちへ飛んでくるってイメージをもっちゃった。オービーのコメントを読めばこの come が、ミルクがバターになるってことだとすぐ分かるし、ぼくの使ってる辞書にもその文例はのってるのにね。そんなこっけいな間ちがいの、平野さんは辛抱強く正してくださる。

マザー・グースのテキストに決定版というのがないように、マザー・グースの翻訳にも決定版はあってはならないと思うな。マザー・グースに触発されてぼくの書いた〈ことばあそびうた〉を DO-IT-YOURSELF POETRY と言ってくれた人がいたけど、詩や歌ってのは本来そういうものなんです。みんなが読者であると同時に訳者であり作者になれるといいと思うんです。(詩人)

## マザー・グースとわたし

YAGAWA SUMIKO

矢川 澄子

いわゆるマザー・グースなるものを、わたしという子供はいつ、どのようにしておぼえこんだのだったろう。目からか、それとも耳からか。おそらく目からではなかったかと思うのだが、そのあたりがどうもはっきりしない。そしてその、どうにも見極められない漠とした境目あたりに、おそらくわたしとマザー・グースとのなつかしい、断ち切りがたい縁えにしのようなものがあるのだろう。

もちろんこれは、記憶力の良し悪しとはほとんどかわりのないことで、人間だれしもいわゆるものごころつくまえからその環境に具わっていた諸要素にたいしては、ある意味でおそろしく鈍感なのにながらいいない。ものにせよ、ことばにせよ、それが記憶にあざやかであり、印象あらたかであるためには、少なくともそのもの、そのことばとの出会いにあたって何らかのおどろきが必要とされるからだ。

具体的にいえば、わたしの生まれるまえから生家の一隅にならんでいた世界童話大系なるものが、よくも悪しくもこの子の詩体験を決定してしまった。竹友藻風訳のマザー・グース諸篇に関するかぎり、彼らの方がわたしよりまえからのこの家の先住人だったのだ。そして、わたしがわからずややいじめっ子だらけの子供たちの社会にひそかに見切りをつけて、孤独な活字の世界に出入りするようになったのは、ものごころついていくらもたたない頃だったから、出会いの感激などというものはいまさら思い出すこともできないのが当りまえなのだった。

とはいえ、わたしにとってのマザー・グースとは、はたしてそれだけのものにとどまるのであろうか。その辺になると、やはり、明治以来の女子教育に英米圏のミッションリーの果たした役割をあらためて考えずにはいられない。故国をあとに、おおむねオールド・ミスのの運命を覚悟ではるばる海をわたってきたそれらの人々は、維新の激動を経て多かれ少なかれ世のはかなさを味わい知ったあとのこの国の少女たちと、心情的にきわめて近いところがあり、短時日のうちに両者のあいだにはごく打ちとけた関係が成立していたのだった。

それらの人々は、みずから母となつてわが子に唄いき

かせるはずであった数々の故国の唄を、極東の少女たちの耳に口伝えて吹きこんでくれた。おそらくアリスも唄ったであろうそれらの調べは、年代的にはほほおなじ、ヴィクトリア朝エドワード朝の少女であったにちがいないそれらの人々の口を経て、わたしたちの環境にもひそやかにしのびこんできていたのだった。

じつはわたしの母方にも、そのような英語の洗礼をうけた少女たちが大ぜいいた。母自身が、幼いわたしたちを育てながら、娘時代に「マクさん」という先生に教わった唄を、次から次へたえず口ずさんでいた。さんねんながら母のレパートリーには、マザー・グースそのものはほとんどなくて、その代りに Sweet and low とか Daf-fodils とかいった類のロマン派詩人のものが多かったし、またおなじ節が日によっては “Oh, where, tell me where is your highland laddie gone?” であったり、べつの日には “美しきわが子やいずこ” になったりもした。“植生の宿は…” と “...there's no place like home” などもおなじことだったが、いずれにせよ、きかされている子供たちにとっては、唄の意味などはまだよくわからないことにおいてたいして変わりはなく、ただその英詩とひらがな調の大和言葉との相方の、あくまでも耳に好ましく快よいひびき、なめらかでよどみないその流れだけが、かぎりなく甘美なものとして、その後の生涯につきまとうことになってしまったのだ。

この、耳からのマザー・グースならぬマイ・マザーにながしのさえずりと、はじめにのべた活字としてのマザー・グースの読書体験とが、いつの日かどこかで結びつこうなどとは、わたし自身、迂闊にもついぞ考えてみもせず長年過してきた。その2つが知らず知らずのうちにふしぎな婚姻をとげて、わたしにもどうやらわたしなりのグースの唄を唄いだす資格があるらしいと思ひ知るにいたったのは、ごく最近のことだ。思えばまことに遅い巣立ちではある。ついでながら、童話大系にせよその他の読物にせよ、おしなべて本とか書とかいったものは、この巣にはぐくまれたひな鳥たちにとってはむしろ父からの賜物で、ファーザー・グースだかガンダーだかのせせと運んできてくれた餌にほかならないのだった。

それにしても藻風訳の収められている世界童話大系の童謡篇上巻はまことにをかきな構成で、ここではマザー・グースもロゼッティも、さらに日本古来の童唄も白秋や晶子の創作童謡も、肩肘はらずに仲よく同居させられている。この土着と外来とのゆかいな混淆あたりにも、つつきだせば色々問題がひそんでいるにちがいないが、その辺はまたあらためて別の機会にゆずろう。(詩人)

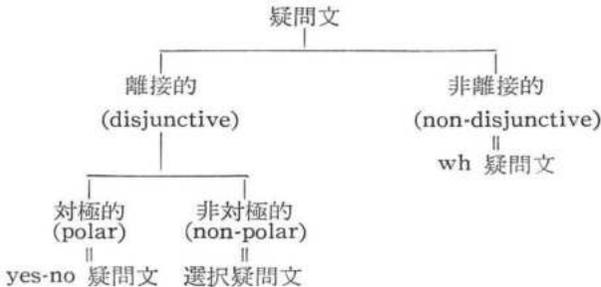
# 疑問文 (I)



ŌTA AKIRA  
太田 朗

## 1. 文形の分類

疑問文には、yes-no 疑問文、選択疑問文、WH 疑問文、付加疑問文があるとされる。これはいわば平面的にリストアップしただけの分類であるが、それをいわば立体的に分類すると、付加疑問文を別として、残りの3つは、次のような二項対立の形で分類できる。



この分類の特徴は、yes-no 疑問文（対極的と呼ばれる）と選択疑問文（非対極的と呼ばれる）とが離接的と呼ばれるより大きな類の下位類をなし、離接的が全体として、非離接的とよばれるWH疑問文から区別されているということである。この分類の根拠および名称については後述するが、各々の疑問文がどのような形をそなえているかは、読者周知のことと思うのでここではとりあげず、以下では、重点をこれら各種の疑問文形のあらわす意味におきたい。

## 2. 疑問をあらわさない疑問文形

本題に入る前に、一見疑問文のような形をもっているが、疑問の意味をあらわすとはいえないような、あるいは疑問の意味が稀薄ないくつかのケースを片付けておこう。次の(a)から(d)まではそうしたケースである。

### (a) 依頼をあらわす場合。

Will you, Would you, Won't you, Can you, などではじまる文が、疑問だけでなく、依頼の意味もあらわすことはよく知られている。特に Will you please take out the garbage? のように please がつければ、疑問ではなく、疑いもなく依頼の意味をあらわす。しかし、助動詞と主語が倒置しているという形の点だけから見れば、yes-no 疑問文形である。何故上述のような疑問文形が依頼の意味をあらわすかという議論はさておいて、上述の文が依頼の意味をもつ場合、それに対する応答も依頼

にふさわしい応答にしないとおかしい。Will you give me a hand? といわれて、Yes, I will といってしまうのはおかしいし、Can I ask you to turn down the radio? といわれて、Yes, you can とか No, you can't とか答えるのは、故意に相手の依頼をはぐらかしているとしか受けとれない。もし依頼に応ずるなら、OK とか Sure とか All right とか Yes, ma'am とかいう応答がふさわしいであろうし、応じ(られ)ないなら、No とにべもなくつぶやきより、(I'm sorry) I can't とか、更に (I am sorry) I'm too busy とかいったような応じられない理由をいう方が丁寧であろう。この場合 No, ma'am のように敬称をつけても、丁寧にいったことにはならない。

上述のような依頼文は、意味の面だけでなく、統語的にも普通の疑問文と異なっている。使われる助動詞が限られていること、please がつけられることなどは特に説明を要しないが、それ以外に、依頼文の場合の Won't you... の n't は否定の意味を有せず、かつ必ず縮約形で用いられる。

依頼の won't you の n't が否定の意味を有しないということは、次のような統語的事実が示している。until 表現は、その時点までの動作、状態の継続を示すので、単一の瞬間的動作、出来事を示す表現とは共起できない（例文(1)。\*は非文法的ということを示す）。しかしそれが否定になると until 表現と共起できる。例文(2)参照。

(1) \*John left until 4.

(2) John didn't leave until 4.

until 表現が、yet, any, ever などとともに、否定対極表現 (negative polarity expression, 否定文で特徴的に使われる表現) の中に加えられているのは、そのためである。所でもし依頼の Won't you の n't が否定の働き

1) Yes, I will, but I don't want to ならおかしくない。それは波々ながらもかく依頼に応ずる構えをあらわしている。Can/Could you give me a hand? に対し、Yes, I can/could とだけいってすましているのはおかしいが、Yes, I can/could, but I don't want to ならおかしくない。しかしこの場合は依頼に応ずるのか否かははっきりしない。cf. G. M. Green, "How to get people to do things with words," *Syntax and Semantics* Vol. 3 (edited by P. Cole and J.L. Morgan. 1975), p. 112, note 3.

をしているなら、それは until 表現とともに用いられ、(3)はよい文になる筈であるが、(3)は非文法的であるとされる。従ってこの場合の n't には否定の働きはないものと見なければならぬ。

(3) \*Won't you (please) leave until 4?

(cf. Don't please leave until 4. —この n't には勿論否定の働きがある。)

更に(4)では、Won't you ではじまる文中に別の not があり、従って until 表現が可能になっている。(もっとも(4)の容認可能性については個人差があるが。)これは Won't の n't に否定の働きのない証拠と考える。(4)は(5)とほぼ同意である。

(4) Won't you (please) not leave until 4?

(=Won't you (please) stay until 4?)

(5) Will you (please) not leave until 4?

(b) 提案 (suggestion), 勧誘 (invitation) をあらわす場合。

(6)のような文は、理由を聞く疑問文でなく、「～したらどうでしょう」という提案、勧誘の意味で用いられることがよくある。

(6) Why don't  $\left\{ \begin{array}{l} \text{you} \\ \text{we} \end{array} \right\}$  have a sandwich for lunch?

(7) I'm sure the last thing I want to do is have you stay here when you'd rather be some place else. Why don't you go some place where you won't be bored? Why don't you go up to Florence Leaming's?—Parker<sup>2)</sup>

(6)はまた省略されて(8)のようにもいえる。

(8) Why not have a sandwich for lunch?

(6)のような提案、勧誘の文の否定辞 not も必ず縮約形が用いられ、また否定の意味はなく、かつ助動詞は do 動詞に限られる。下記(9)の A, B の対話において、B は「カルタゴをやっつけようではないか」と提案しているのに対し、(10)は A の発言に対し、B はその理由を聞いている。(10)は普通の疑問文である。

(9) A: We should destroy Carthage.

B: We  $\left\{ \begin{array}{l} \text{not} \\ \text{don't we} \\ \text{*shouldn't we} \end{array} \right\}$  destroy Carthage?

(10) A: Why shouldn't destroy Carthage?

B: Why  $\left\{ \begin{array}{l} \text{not} \\ \text{shouldn't we} \end{array} \right\}$  destroy Carthage?

(6)のように省略されない形の提案の時は、主語は三人称や一人称単数でもよいが、(8)のように省略された形の提案の時には、主語に二人称が、たとえ暗黙の中にも、含まれていないといけない。下記(11), (12)の A, B の

対話はそのことを示す。

(11) A: What are you going to do to celebrate?

B: Why  $\left\{ \begin{array}{l} \text{don't I} \\ \text{*not} \end{array} \right\}$  give myself a present?

(自分で自分に贈物をするというのはどうだい)

(12) A: John is having an awful problem washing his windows.

B: Why  $\left\{ \begin{array}{l} \text{doesn't he} \\ \text{*not} \end{array} \right\}$  get himself a ladder?

(はしごをもって来たらいいじゃないか)

(11)では myself, (12)では himself があるから、(暗黙の)主語に二人称が含まれていないことは明らかで、従って Why not...の方は非文法的になる。

(13), (14)のように、提案の Why don't you/Why doesn't he などの表現は be 動詞や完了形とともに用いられる。

(13) why  $\left\{ \begin{array}{l} \text{don't you} \\ \text{doesn't she} \end{array} \right\}$  be a doctor?

(14) why don't you have given her the ring before I get there?

(c) 感嘆の意味をあらわす場合。

yes-no 疑問文と同じ形だが、疑問でなく感嘆の意味をあらわす場合がある。音調は下降調で、書かれた場合には ! を用い、否定辞は縮約形 n't を用い、それは否定の意味を有しないといつてよい。否定の感嘆文はないからである。(cf. \*What a marvellous concert it wasn't!) 否定疑問、肯定疑問どちらの形もほぼ同じ意味で用いられるが<sup>3)</sup>、肯定疑問の形の方は、くだけた口語体に限られるようである。(16)–(22)はいずれもそうした材料からとったものである。

(15) Wasn't it a marvellous concert!

(16) Are we glad to see you!

(17) "...Remember, Hat?" "Do I remember!" said Mrs. Whittaker. (覚えてるともさ)

(18) I know that voice. Oh, do I know that voice!  
(あの声を知らなくてさ)

(19) Oh God, was I happy!

2) 以不 Parker とあるのは、Dorothy Parker, *The Sexes* という短篇からの引用文で、この短篇は拙著「米語音楽論」[研究社, 1959]に、音調記号つきで全文掲載してある。この短篇は、若い男女2人の痴話喧嘩を軽妙なタッチで活々と描いたもので、全篇ほとんど2人の対話からなり、女がすねているのを男が一生懸命機嫌をとっている所からはじまり、すったもんだしたあげく男がうまく女のご機嫌をとり結ぶという所でおわる。女のすねている原因は、男が Florence Leaming という別の女にちやほやし過ぎたということで、(7)は女がすねていう文句。

3) Quirk et al. *A Grammar of Contemporary English*, p. 401 によると、否定疑問形の方は、聴者の同意を求める意味合いがあり、従って Am I hungry! のように聴者の関与できない経験をいう場合には否定疑問形は不相当であるという。

- ㉔ God, was that a day! (全くたいした日だったよ)  
 ㉕ Have I got news for you! (=I've got big news for you) FEN 'Comedy Theater' April 25, 1959.  
 ㉖ ...My ideal woman. Wow!" He slapped the table. "Was that a mistake, was that a disillusionment!"—*New Yorker*, Nov. 9, 1957. (俳優 Marlon Brando との会見記で, He は Brando, “ ” の中は Brando の言で, 理想の女性について尋ねられての発言)  
 (d) 修辞疑問 (rhetorical question)

形は疑問文だが, 別に答えを求めているわけではなく, 強意の平叙文と同じ働きをするのを修辞疑問文という。これと普通の疑問文とは, 大体文脈, 音調などにより区別される。yes-no 修辞疑問の場合, 肯定の修辞疑問文は否定の平叙文, 否定の修辞疑問文は肯定の平叙文に相当する。

- ㉗ Hasn't he gone a long way? (=Surely he has gone a long way)  
 ㉘ Does this look like instant coffee? But it is. (=It doesn't look like instant coffee. ... テレビのインスタントコーヒーのコマーシャルの文句。But というので, 前半が修辞疑問であることははっきりしている)  
 修辞疑問はWH疑問文にもある。WH修辞疑問は2つの種類がある。本誌 No. 45 に「前提」について述べたが, その際WH疑問文の前提は, WH疑問詞を some 代用詞でおきかえた文であらわされることであるといった。たとえば Who did you see yesterday? という問いの前提は You saw somebody yesterday というので, この前提が満たされないと, (すなわち昨日誰にも会っていないと), この問いにはまともに答えられない。WH修辞疑問の第一のケースは, この前提が満たされない場合, すなわち some 代用詞でおきかえられるべき部分が否定される場合である。㉕—㉗参照。

- ㉙ Who has ever done such a thing? (=Nobody has ever done such a thing)  
 ㉚ When have you done anything nice? (=You have never done anything nice)  
 ㉛ A: You seem to be sore at me.  
 B: I'm sore at you? I can't understand what put that idea in your head. Why should I be sore at you? (=There is no reason why I should be sore at you)—Parker

WH疑問文は, 以上の前提が満たされた上で, 前提にある some 代用詞であらわされているものが何であるかの情報を聴者に求めることになるのだが, ノーマルな場合には, 聴者の方が少なくとも話者よりもその情報をよ

く知っていると話者は考えて問いを発するわけである。(これはWH疑問文に限らず, 他の疑問文についても同様である。)しかし時には, 話者は some 代用詞であらわされているものが何であるかをよく知っており, かつ聴者もそれを知っているということを知りながら, 形だけWH疑問文を用いることがある。この場合は別に答えを要求しているわけではない。ただ, 平叙文の意味を強調する働きをし, WH修辞疑問の第2のケースとなる。㉘はその例である。

- ㉜ A: Who's got the prettiest hands in the world? Who's the sweetest girl in the world?  
 B: I don't know. Who?  
 A: You don't know! You do so, too, know—Parker.

㉜は注2で述べた Parker の短篇からの引用で, Aは男, Bは女のせりふである。これは話のおわりに近く, 男が女の容姿などをほめそやして, 遂にご機嫌をとり結ぶのに成功するあたりに出てくるのだが, この場合 who が誰であるかは, 男も女も熟知している。それが証拠に, 女が調子を合せて「分からないわ。どなた?」と空とぼけると, 男は「分からないって!ちゃんと分かっているくせに」という。要するに “You've got the prettiest hands in the world. You're the sweetest girl in the world.” といったのでは, 身も蓋もないので, 修辞的に疑問の形をとったわけである。

### 3. 諸種の疑問

§2では, 疑問をあらわさないか, 疑問の意味の稀薄な疑問文形をとりあげたが, いよいよ本題に入って, §3および §4では, 相手になんらかの返答を求めているという点で疑問の意味をあらわす疑問文をとりあげる。これにも色々の種類があるが, §3ではまず周辺的なタイプをとりあげ, §4で中核的なタイプをとりあげる。

#### (a) 問い返し疑問 (echo question)

相手のいったことが, よく聞きとれなかったとか, 余りに意外なので自分の耳が信じられないとかいった時に, 相手のいったことを繰り返してその内容を確認するタイプの疑問文である。一番簡単なのは, ㉛, ㉜のように相手のいったことをほぼそのまま, 上昇調で繰り返すタイプであるが, 聞きとれなかった部分をWH疑問詞でおきかえて, 残りは相手のいったことを繰り返して問い直すタイプ(㉞—㉟)もある。音調は上昇調で, その中核はおきかえたWH疑問詞にある。WH疑問詞は㉞のように文頭に移動する場合もあるが, ㉟—㉟のようにもとの位置にそのまま留まることもある。相手の発言は平叙文であろうと(27, 29, 30, 32), 疑問文であろうと(㉞), 命令

文であろうと(33), 何であってもよい。

(27) A: You seem to be sore at me.

B: I'm sore at you? —Parker

(29) A: I didn't like that meal.

B: You didn't like it?

(30) A: It cost five dollars.

B: How much did it cost?

(31) A: Where did Michael go?

B: Where did who go?

A: Michael. Where did he go?

(32) A: Rita married David.

B: Rita married who?

(33) A: Wash John.

B: Wash who?

Did you say というのを WH 疑問詞の後に入れることもある。(34)

(34) A: That's the way you were talking over the phone today. You were so snotty when I called you up, I was afraid to talk to you.

B: I beg your pardon.

What did you say I was? —Parker

(b) 指示疑問 (reference question)

(35)の例文は、一見上述(a)のケースに似ているが、BはAのいったことが聞きとれなくて、問い返しているのではなく、ちゃんと聞きとれているのだが、Aの 'he' というのが誰であるか分からないので、問い返したわけである。このようなタイプを指示疑問とといい、上述(a)の問い返し疑問が上昇調なのに対しこちらは下降調である。

(35) A: Where did he go?

B: Where did who go?

A: Michael. Where did he go.

(c) クイズ的疑問 (quiz-type question)

前述 § 2(d)で、WH 修辭疑問の第2のケースを述べた際ふれたように、ノーマルな場合、話者は聴者が少なくとも自分より問題の情報についてよく知っていると考え

て、疑問を発するわけである。しかし場合によっては、話者は、自分の方が聴者よりもよく知っていると感じていながら、なおかつ問いを発することがある。典型的な場合は、教室で先生が生徒に質問する場合、たとえば歴史の先生が、生徒に "Who discovered America?" と聞くような場合である。試験の問題などは、出題者が受験者よりもよく知っているという前提がなければ意味をなさない。同じようなケースは、テレビ、ラジオなどのクイズ番組の司会者の出す問いである。この場合も司会者は解答者よりもよく知っているという前提がある。あるいは法廷で、検事や弁護士が証人に証言を求めて発する問いもこれに類する。多くの場合、検事は既に調べて知っている事について、証人の裏付けを求めているわけである。従って、これらはいずれも、ノーマルな場合とは異なっている。しかし修辭疑問が返答を求めているのに対し、これらの場合は相手に返答を求めているという点で、疑問の意味をもっているといえる。これらの場合の疑問を総称してクイズ的疑問と呼ぶことにする。クイズ的疑問は、典型的には下降調でいわれる。

普通の疑問文の場合、疑問詞を先行詞とする代名詞が、疑問詞移動規則に先立つ構造で疑問詞より前にある場合は非文となる。(36)で who と his とは同一指示で、who と his とにうけられた下付きの i はそのことを示すために慣例的に使われる道具である。(36a)では、who は  $\wedge$  で示された位置から、疑問詞移動規則により文頭に移動したもので、疑問詞移動規則のかかる前でも who は his に先立っているからよい文となるが、(36b)では、who は  $\wedge$  で示された位置から移動したもので、疑問詞移動規則のかかる前の構造では、his は who に先立っているから非文となる。(37)も同様。

(36) a. Who<sub>i</sub> do you think  $\wedge$  said Mary yelled at his<sub>i</sub> mother?

b. \*Who<sub>i</sub> did Mary say his<sub>i</sub> mother yelled at  $\wedge$ ?

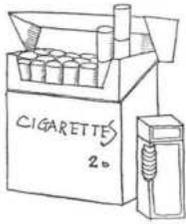
(37) a. Who<sub>i</sub> did the police say  $\wedge$  persuaded her to meet his<sub>i</sub> sister?

b. \*Who<sub>i</sub> did the police say his<sub>i</sub> sister persuaded her to meet  $\wedge$ ?

ところが(38)のクイズ的疑問文の場合、一見上述の規則の反例と見えるようである。(38)では him<sub>i</sub> が what secretary<sub>i</sub> に先立っているからである。

(38) Mr. Jones, for \$100,000, the man who appointed him<sub>i</sub> later said {which} secretary<sub>i</sub> of state {what}

(p. 36 へつづく)



## 戦争中の外国人教師

TOYAMA SHIGEHICO  
外山 滋比古

### 1

私が旧制の中学校を出た昭和16年の3月はすでに戦時色が濃く、英語は敵性語と呼ばれていた。英語好きな中学生も敵性語に一生をかけるのには二の足を踏んだのであろう。英語をやるといっていた連中がいつの間にか宗旨変えをしていく。同じ外国語でもドイツ語の方が将来性があると思われていたから、ドイツ語を選んだものもあった。生意気なことを言っているが、若ものは大人の思惑に実によく反応する。英語などやるのは「賢明ではない」というのが大人の常識であったとき、賢明でないコースをぼんやり選んだひとりが、私であった。草深い田舎の中学にいたから、いわゆるご時世なるものもだいぶ間の抜けた形で伝わっていたのかもしれない。

片田舎に育ったからこそ身のほども知らずに外国語にあこがれたのであろう。都会に生まれたら決してこうはならなかったと思う。あこがれは文化的落差の大きさに比例する。そう言えば、外国語外国文学をしている人に地方出身、しかも、文化的に恵まれない地方の出身者が多いのは偶然ではあるまい。開けていない土地に生まれるのも悪くないものだ。田舎のおよそ文化というものと縁のない周囲の中で大きくなったおかげで、すばらしい青い鳥がこの奇妙な文字の向うに飛んでいるに違いないと思ひ込んだのである。

その青い鳥の飛んでいる国と戦争になるかもしれない。そういう現実よりもあこがれの青い鳥の幻の方が強かったのであろう。好意ある忠告をして下さる先生もあつたが、とにかく英語をやりたいと思った。

昭和16年4月から東京高等師範学校文科第3部の学生になった。文科第3部というのが英語科である。ほぼ30名が入学したが、昭和19年9月、卒業時には13名に減っていた。いくらのんびりした連中でも、「始まるかも知れない」であった戦争がいよいよ始まってみれば、冬来たりなば春遠からじ、と遠観ばかりもしてられない。ほかの学校に移るものがあとを断たない。省線電車の中で、下調べをしていたら、人品いやしからざる中年紳士からぶんなぐられたという級友もあらわれる。やはり、

足もとの明るい間に、と考えるものがいてもそれを責めることはできない。

卒業までこぎつけた13名にしても、別に、志操堅固であらゆる困苦にたえてゴールへ入ったというわけでもない。決断がつかなくて、出るタイミングを失ってぐずぐずしているうちに卒業となってしまったから、フラフラしながら卒業したというのが実際だったかもしれない。

戦争がすむと、この間までのことは忘れて、これからは英語だと世の中が浮かれ出した。戦争は悪夢のようなもので、もうそれを問題にする人もなくなった。しかし、夢にしてはあまりにも長かったような気がする。そのまどかでない夢の間の外人教師のことを少し書いておきたいと思う。

### 2

入学早々、教室へふたりのイギリス人の先生があらわれた。外国人の授業など見当もつかない。それまで、生身の外人を見たことすらなかったから、1時間中そういう人間が目の前に立ちふさがっていると考えるだけでも恐怖に近いものを感じた。

最初の時間のことは何も記憶していないから、興奮して何が何だかわからなかったのであろう。白髪長身の紳士が泳ぐように教壇へ上って行った。下駄民族とは歩き方がちがうのだということを納得する。調子にはずみがついていかにもさっそうとしている。先生のまわりには外国がただよっていた。

たいへんな早口で出席をとられるのだが、それがまたリズムカルである。Mr. Iijima, Mr. Itami, Mr. Ogura, ... とライジング・イントロネーションでどんどん呼び上げられる。やがて、Mr. Mori and Mr. Yanaharaでおしまいになる。日本人の名前はさすがに言いにくそうであったが、Mr. Mori へ来ると水を得た魚のようになだらかになる。おそらく Molly とか Morley とかに近いものと思われるのであろう。(この Mori が、先年来、全国の高校生から入試の神様のようにあがめられている森一郎君だ。)

出席をとりおわると、すぐ Questions and Answers

がはじまる。特別教材で、大版のハトロンの封筒に入っているルースリーフの一枚一枚に20~30の問がある。それを先生が読み上げられると、すかさず生徒が答える。ものすごいスピードである(と感じられた)。機関銃で掃射をするみたいで、一度すませてほっとする間もなく次の答えの番が廻ってくる。50分の時間がこれほど長いと思ったこともなければ、また、これほど短かいと思ったこともない。全身緊張して夢我夢中なのである。後年、drill master という語を覚えて、ああいう先生のことだなど、すぐ合点した。

ドリルの目標は24 anomalous finites の用法に習熟することであった。つまり、助動詞である。一枚のシートにひとつの anomalous finite を徹底的に教えるようになっていた。たいへんよく出来た教材だから、もう一度見たい、なんなら、新しく出版してもらうことはできないかと戦後になってから考えたこともある。しかし、考えてみると、あの先生がやられたから、よかったのかもしれない。日本人の教師が真似ても妙なことになるのが落ちだろうと思ひ直すようになった。

この drill master が A.S. Hornby 先生。東京外語の方が専任で、われわれのところへは非常勤講師として出講されていたらしい。およそ、冗談とか無駄口をきかれるということがない。時間いっぱい、ぎゅうぎゅうやられる。Anomalous finites 以外のことは眼中にないかのようであった。ときに立って黒板に向かわれることがあるかと思うと、countable, uncountable の説明だったりした。例の *Idiomatic and Syntactic English Dictionary* が出版になる直前で、あとで考えると、校正などに忙しかったであろうと思われるが、いっさい、そういうことは口にされなかった。おそらく、ストイックなドリル・マスターである。

ストイックと言え、われわれが入学した年の12月8日に英米に対しての戦争が始った。そのすぐ後にホーンビー先生のクラスがあったが、いつもとすこしも変わるところがなかった。おそらく、先生は最後の授業であることを知っておられたはずである。それなのに、'business as usual' で、機関銃のような質問を1時間浴びせると、いつもと同じように "So much for this morning." と言って教室を出られた。そして、それが最後だったのである。

いくら何でも、もうすこし、何とか愛想があってもよいではないか。幼い当時のわれわれの頭でそんなことを思ったりしたが、いまにして思えば、あんな気のきいたフィナーレはないのである。何を言ってもしかたがない、言えは愚痴になる、英語を教えるのが務めだと思

から、英語を教える、それでいいではないか。たとえ最後の時間であろうと、余計なことには費さない。

戦後伝わって来る先生の活躍や消息はかつての学生を喜ばせた。すぐれた教師はどこにあっても鋭鋒をあらわさずにはいないのであろう。

### 3

*Idiomatic and Syntactic English Dictionary* の共編者、A.H. Wakefield 先生がわれわれが最初に教わったもうひとりのイギリス人であった。Hornby 先生よりも年も若かったが、とにかく、たいへんな情熱家である。*Tales from Shakespeare* の retold ものがテキストであったが、何かきっかけがあると、たちまち、脱線してしまう。そうすると、時間の終わりまで、テキストへ戻らないことが多いから、みんな、脱線が始まると、ホッと膝を乗り出す。

Wakefield 先生はしばしばヒットラーの『マイン・キャンプ』を攻撃した。われわれも翻訳で読んでわかっているつもりでいたところ、君たちの読まない、つまり、訳されていない部分に、これこれの危険な箇所がある。それを知らされないで、日本人がこの本をありがたがっているのはおかしいではないかという。これはわれわれに衝撃を与えた。また、ものの見方、評価には、ときとして正反対なものがどちらも正当性を主張するということがありうるのだという実地教育を受けたのはいい経験であった。

Hornby 先生がいっさい余計なことを言われぬのに引きかえ Wakefield 先生は、何か生々しい問題について訴えないではいられないといったところがあった。すこし足が悪かったが、その足をひきずるようにしながら、教壇の上をあちこち歩いて、しゃべられる。なかなかのダンディで、初夏のある日、まっ白のセーラー服のようなものを身にまとった教室にあらわれて、われわれの息をのませたこともある。テキストについては、ほとんど覚えていないが、雑談の方はわりとよく記憶している。まだ、ろくにヒヤリングもできない新入生であることも忘れたように、早口に話される。それが一人前に扱ってもらったような気がしてうれしかった。Hornby 先生の冷い声よりもよくわかるような気もした。

こういう言動がおそらく、その筋からは目をつけられていたと思われる。Hornby 先生より前に教室から姿を消されたようである。開戦より少し前のことであった。たしか、もと大分高商の先生だったのだが、さきの辞書編集のこともあって、東京へ出てこられたのであろう。東京高師のほかには学習院でも教えておられたはず

である。

#### 4

われわれのクラスにも愛国者がいたから、Wakefield先生の言われることを、みんながみんな、受け入れたわけではない。時間のあとで、はっきりと不平を洩らすものもいた。しかし、その当時において国際情勢について、われわれの知っているところと、まったく違ったことを知っており、全然別の角度からものを考えている人間がいることを目のあたり見ることができたのは幸いであった。

これは、Wakefield先生に教わっていたころから2、3年後のことになるが、すでに、戦争が容易でない状況になっていた。学生も必勝の信念をもつようにというので研修会が催されたときのことである。夕方、大広間に各科の学生が集まって時局懇談会になった。司会は教育学の教授である。日独伊防共協定を強化してとか何とかというようなことを言う学生がいて、それを教育の教授がとりあげて、大いに論じ、いかにも英文科を目のかたきにするようなことをのべた。英文の学生を挑発するように、将来、日、独、伊が戦勝国になったら、イギリス、アメリカはどうなると思うか、といて、愚にもつかない質問を英文科の学生に向けてきた。一同まずいことになったと思いながら、目を伏せて畳の目をかぞえていると、飯島康夫が立ち上って、「ドイツはまけます、英米が勝ちます」と言っていた。これには、われわれの方がおどろいた。いかに学生の発言であっても、たいへん勇気のいる言葉であった。ほかの科の学生も耳を疑った。飯島ははっきり二度、そう言った。

果たして、これが教授間で問題になったらしい。練成会に来ていた教育の教授は、英文科の学生は「思想が悪い」といって英文科の教授を困らせたという話も伝わったが、われわれの間で飯島は英雄であった。しかし、考えてみると、彼はWakefield先生の言われたことをもとにして、そういう「暴言」を吐いたのではなかったかと思う。彼ほどの勇気はなかったにしても、われわれのクラスはおしなべてリベラルではあった。それは当時において、なかなか珍重すべきことだったのである。(おもしろいのは、くだんの教育学教授である。戦争中はがくがくの愛国者で、ヒットラー・ユーゲントがどうしたというようなことばかり言っていたくせに、戦争がすむと、手の平を返したように、民主主義教育学者になった。そして、コーア・カリキュラムに凝って、というか、それを食いものにしてというべきか知らないが、たちまち、その方面

の権威になったようである。もちろん英語の文献などがろくに読めるわけがない。そこで、かつて「思想が悪かった」はずの学生のひねたのをつかまえて訳をつくらせ、それを勉強して権威づらをしていたという話だ。教育学という学問は、こんな手合いばかりでもあるまいが、かなりいい加減なものだということを思い知らされたものだ。)

#### 5

戦争が始まったから、外人教師はもうないものとあらかじめと、あるとき、Father Wardという神父さんがあらわれた。イギリス人ということだった。(ちなみに、当時この学校の外国人教師はイギリス人にかぎられていた。英語を教える学科である、アメリカ英語は使ってはいけない。アメリカから引き揚げてきた二世の友人がクラスにいて、だれだったか忘れたが、先生からそう言って注意されたのを覚えている。)ウォード神父は学期の途中であらわれ、しばらくすると、また途中で消えたが、どうしてか、学生にはわかるわけもなかった。ろくに授業をされなかったように思う。

しばらくすると、こんどはClarke先生が来られた。先生の授業はわりに長く続いた。浦和高校の先生であったか、あるいは前に先生であったかである。奥さんが日本人だという話であったが、先生のはだの色がわれわれに近い黄色であった。

Clarke先生でおどろいたのは、日本のことをよく知っておられることで、あるときは熱をこめて、味噌汁がいかにすぐれたスープであるかとのべられて、われわれを面くらわせた。また、よくビタミンの話もされた。自然科学にくわしかったようである。先生の顔が黄色いのは味噌汁のせいではないかとわれわれは陰口をたたいたりした。たしかにイギリス人教師ではあったが、こんなに日本的ではかえって恐縮する。やはり、外人教師というのは、抵抗感がなくてはいけないようだ。親切すぎるラフカディオ・ハーン・タイプも感心しないし、クラーク先生のように日本人に近くなってしまっても、このごろの言葉で言えば文化ショックが起らない。ウェイクフィールド先生やホーンビー先生のような外人らしい外人のタイプがすぐれた効果をあげるような気がする。

もっとも、クラーク先生、ビタミンと味噌汁の話ばかりされたのではない。At what time did you...?というセンテンスは冒頭のところが「トオッタイ」のようにきこえるから注意せよ、などといったありがたい注意などはいまでも覚えている。

また、ひとりひとりを教卓のところへ呼んで、小声

で、いま何を勉強しているかなどということを書き下さったりもした。級友の手前気はずかしくて言いにくいようなことでも、相手がイギリス人で、ほかの人にはきこえないと思うと、気が楽になって、何でも言ってしまうという心理になるのがおもしろかった。会話のクラスのある方としてこういう方法もある。

しかし、Clarke 先生でいちばん印象に残っているのはクリケットについて教わったことである。本にクリケットのことが出てくるがさっぱりわからない。いつか先生がクリケットを知っているかと言われた。もちろん、だれも知らない。すると、それでは次の時間に、ユニフォームとバット、ボールをもってくと約束され、その次の時間になった。はじめから英語の授業はやめて教室の机を片付けて、広い空間をこしらえ、ユニフォームをきた先生がバットでボールを打つ真似をされる。投げるのはこうだといってフォームを見せて下さる。その合間合間にルールを説明されるのだが、よくは呑みこめない。本で読むよりはさすがに実感はあるが、それでも全体を想像するのは困難である。かえって、本ものが見たいという気持ちがつよくなった。

しかし、考えてみるに、学校の中はのんびりしたものだったと思う。もう戦争になって一年は経っていた。勝ち戦に気をよくしていたから寛大であったということもあろうが、教室でクリケットの実演が行なわれて、だれも文句を言わなかったのである。私は昭和20年3月まで学校にいて英語と英文学を勉強したが、個人的には周囲からの圧迫を感じたことはなかった。むしろ、街の人たちが言う勝手な言葉が耳に入って悲壮な気持ちになったらしい人々の被害妄想の言わせることの方がうるさかった。それと学校の自己規制やさきの教育学者のような便乗家の雑音が不愉快であったのである。そういう経験もあって、学問の自由はめったに侵されるものではないという楽天的な考え方もつよくなった。弾圧を受けた学問があるのではないかと言えば、その通りだが、それは、政治や社会の現実に影響を与えるような学問の受ける社会的反応ともいべきものではないかと思う。純粋な知的活動であれば世間はそれにあまり関心を示さない。政治や経済、社会のあり方に挑戦するような学問が反作用を受ける。言葉とか文学とかいったものは、その程度にまで生々しい影響力をもつことは、不幸か幸かあり得ないのではあるまいか。学生などが二口目には学問の自由がおびやかされる、などと言うのをきくと、そういうせりふは本当に勉強してからにしてみたいと思ったりする。

Clarke 先生はまたかなりデリケートなことを話題に

されたものだといまにして思うことがあるのは、肉親との気まずさなどについても話されたことである。クリケットを何とかして、日本に紹介しようと兄と努力したが、とうとうだめだった。フットボールやラグビーは根をおろしたのに…とたいへん残念そうであった。

そのお兄さんというのが、永年、京都大学で英文科を主宰した E.B. Clarke である。1934年の歿で、当時すでに亡くなって8年たっていたが、先生はこのお兄さんとの微妙な気持の喰い違いなどを語られるのである。こちらの聞き取りの能力があやしいものだから肝心なところがわかっていかどうか心もとないが、こういう話というのは案外よくわかるものだ。お兄さんと不和になったのは兄嫁が原因であるというようなことも話された。

とにかく、Clarke 先生はわれわれに距離を感じさせない外人教師であった。その先生もやがて姿を見せなくなってしまった。

\*

戦争がすんで、アメリカからたくさんの英語教師がやってきた。イギリスからも新しい先生がおとずれた。しかし、戦争を境にして外人教師というものが変わってしまったように思われる。ひとつは戦後の外人教師の待遇が戦前に比べてお話にならないくらい悪くなったことも関係するだろう。詳しいことは知らないが、いま国立大学へ来ている外国人教師は専任の場合でも、同年齢の日本人教師に比べてすこし良いくらいの俸給を受けているにすぎない。かつてのように日本人の何倍もの高給を受けるというのはとうてい考えられない。

待遇が悪くはすぐれた才能がやって来るはずがない。平凡な人間が来れば、何だ、その程度の国かということになる。わが国で英語に対するあこがれのようなものが薄れてきた理由はいろいろあろうが、ひとつにはすぐれた英語の外人教師がすくなくなったことと無関係ではないように思われる。(お茶の水女子大学教授)

## THE OLD PAIR

by Tsutomu Fukuda

Once I talked a great deal,  
And she was mostly a listener.

Now she talks a great deal,  
And I am mostly a listener.

Once she had much to think over,  
And I had many things to talk about.

Now she has many things to talk about,  
And I have much to think over.

# Challenge & Response



## 「国際英語」と学校教育の英語

前々号で、日本人が英語で自己主張する際の identity crisis に関連して國弘正雄先生は、「英米人の真似をやめて、日本人の英語を活かしていくことが肝要である。」という引用文で結んでおられます。また鈴木孝夫教授も『閉ざれた言語・日本語の世界』で同様の趣旨の Englic 論を展開しておられます。これは英語の国際化と日本人の国際社会への進出とともに当然起るべき問題だと思えますが、従来の英米志向型の英語教育との関連でどう考えるべきか、ご意見をお伺いします。

(豊島区・伏見素子)

## 「目標」と「結果」の取り違え

中尾清秋

編集部から上記の表題で何か書けといわれて、私はかねてより抱いていた、日本は不思議な国だなあ、という感じをさらに深くした。というのは、実は私はこのことについて、そして特に鈴木氏の Englic 論については、『現代英語教育』(研究社、50・7)に“Confusion in Japan's English Teaching Circles”と題する英語による駄文の中で言いたいことは全部言わせていただいたあとだからである。日本が不思議な国だというのは、日本の英語の先生方は英語で書かれたものは余り読まないらしいからである。私が日本語で書評でも書くと、編集部への投書その他の形で何らかの反響がある。くだらない論文でも、日本語で書いてあれば、誰かがそれを読んで何とか言ったり書いたりしてくれる。語学教育研究所主催の大会会場で、機関誌の Newsletter が配布されると、開会を待ち侘びている人達は、退屈凌ぎに、それを1頁から7頁まで順に目を通して行くと、8頁まで来ると、サッと閉じて鞆の中にしまい込んでしまう。8頁目は私の英文欄なのである。憎まれ口はこの位にして置く。

『英語展望』を読む人が必ずしも全員『現代英語教育』を読む訳ではないだろうから、多少新しいことも織り込んで、前に述べたことを、こんどは日本語で書くことに

## 担当

- 前田 陽一 (国際文化会館専務理事)  
西山 千 (国際コミュニケーター)  
太田 朗 (東京教育大学教授)  
平野 敬一 (東京大学教授)  
國弘 正雄 (国際商科大学教授)  
小林 祐子 (東京女子大学短大教授)  
松下 幸夫 (ELEC 企画部長)

する。

國弘氏と私は数年前、四国で開かれたある英語セミナーの期間中、下品な言い方が「同じ釜の飯を食った仲」なので、敢えて直言させていただいたが、氏の「英米人の真似をやめて、日本人の英語を活かして行くことが肝要である」との発言は、たとえそれが引用文であっても、とんでもないものである。鈴木氏の English はやめて Englic で行け(「English から Englic へ」『ことばと社会』pp. 256—261)という主張にも私はまっごうから反対するものである。憎まれ口を言い出したついでに、平野氏は今から何年も前に長野で開かれたアメリカ文学のセミナー以来お付き合いを願っている方なので言わせていただくが、氏が『英語展望』(1975, No. 51)に、「こういう意味—つまり、英語を母国語としない日本人は native English を到達目標にする必要はない、という意味—の『国際英語』に私も賛成したい」(p. 40)と書いておられるのは、これまた飛んでもないことである。

國弘・鈴木両氏は「目標」と「結果」とを取り違えておられる。そして平野氏は当然目標としなければならないものを、目標とする必要はないといって勘違いをしておられる。このような「取り違え」や「勘違い」を私は冒頭で触れた“Confusion in Japan's English Teaching Circles”の中で“confusion”(混乱)として指摘したのだが、たまたま私の雑文が英語で書かれていたために余り読んでいただけなかったらしい。

Robert Lado 博士の *Language Testing* という本の中に「near native control をテストする云々」(p. 299)という条があるが、英語を外国語として学ぶ者にとって「English などは不要で、Englic で充分」(鈴木氏)であり、non-native speakers は native speakers の「真似をやめるべき」(國弘氏)であり、British English でもなく、American English でもない「国際英語」しか出来ないことに「徒らなる劣等感を抱く必要がない」(平野氏)のなら、何だって language testing の神様とい

われる Lado 博士は near native control をも測定し得るテストを考案しなければならないのか。

教師たる者が目標として English を教えてこそ生徒は辛うじて Englic が話せ、書けるようになるのではないか。百の力のある教師にして初めて生徒にやっと十の力をつけられるのである。初めから Englic など教えられて堪るか、と私は声を大にして叫びたい。

世界的に著名な言語学者 Roman Jakobson 博士の口から出る英語が「彼の母国語であるロシア語の発音、調子が丸だし」の、そして「文法もかなり間違っている」（鈴木孝夫：『ことばと社会』p. 261）Englic であるからといって、日本人の英語は「ザット・イズ・ア・ガール」式のものでいいという論理がどこをどう押せば出て来るのか私には分からない。

この種の問題を論ずる時に、混乱と誤解を避けるためにははっきりさせて置かなければならないことがある。それは日本の英語人口を構成している①「英語を使う人」—実業家、外交官、科学者など—と②「英語を教える人」—中・高・大および私塾・各種学校の英語教師達—を同列に置いてはならないということである。前者の英語は communicability がその最低の線である。ところが後者の英語は near native control がその最低の線であることを忘れてはならない。このことは教員養成の問題と絡んで来るが、そのことについて述べるスペースはもうない。（早稲田大学教授）

### Sense of Proportion

國弘正雄

あるいは直接のお答えにならないことを承知の上で、2つの例を引かせていただきます。間接的なお返事でもなれば、望外のしあわせです。

一つは、この5月に京都で開かれた日米欧委員会 (The Trilateral Commission) の会議のときのことです。西欧民主主義の governability (統治可能性と仮訳しておきます) の消退現象について、2人の出席者が英語で報告を行ないました。一人はもと欧州共同体 (The European Community) の委員長で、いまは名門ロンドン・スクール・オブ・エコノミックスの学長をつとめるダーレンドルフ博士、いま一人はハーヴァードの小社政治社会学者のハンティントン教授でした。前者は元来がドイツ生まれで、国籍もドイツ、外国籍の学者を、たとえ碩学であるとはいえ自国の有力大学の学長に迎えるイギリスの懐ろの深さも驚きですが、それほどの大家なのです。現に彼の *Society and Democracy in Germany* は社会政治史として名著中の名著といわれます。

後者は生粋のアメリカ人、いくつかの著作があり、そ

の一冊は『変革期社会の政治秩序』上下として邦訳すらされています。何しろハーヴァードの正教授なのですから、一流の学者にはちがひありません。

ところがです。この2人の講演を聞いていて、私にはどうしても前者、つまりはドイツ人の講演の方が秀れていると思われてならなかったのです。もし私が弁論大会の審査員なら、ためらうことなくダーレンドルフ博士の方に軍配をあげるだろうに、と失礼なことを考えていました。第一、内容の濃密さという点において、私には優劣が明らかないように思われました。彼の発言には、なにか年ふりたウイスキーの芳醇さにも似たこくがありました。他方、ハンティントン教授は、若さの故の青臭さが目立ちました。熟成度が足りないという感が否めませんでした。

第二はことばの次元でした。措辞の点についていうなら、ダーレンドルフ博士の英語には、やや古拙な趣きがありました。年齢のせいもありましょうし、外国語として身につけたというハンディもありましたろう。英語にいう quaint な面持ちは拭えませんでした。ところがその古拙さは、むしろ風格と私には受けとれました。それにひきかえハンティントン教授の英語は、自然ではあっても平板で、面白味にかけました。母国語であるという狎れが、彼の英語を無気力な倦怠に誘っているともいえるのか、前者にみられるような、外国語であるが故のはりつめた緊張と、その故の爽快さはついぞ感じられなかった。とにかく、前者の措辞はゲルマニックな重苦しきにもかかわらず、いやその故にというべきでしょうか、却ってさわやかでした。彼が前述のドイツ社会政治史を、はじめから英語で認めた理由がわかった気がしました。

一方、音声の面においても前者の方が聞きやすかった。たしかにドイツ人一流の訛は耳につきました。w音がvに近く聞こえましたし、t音がd音も強くひびきました。でも、さくさくとした歯ごたえのよさのようなものがあり、耳に快かったことは事実です。それに比べ、後者の発声は南部訛に近い物憂さがあり、メリハリの点でも前者に一籌を輪していました。個々の発音の大切さが、二義的なものでしかないという思いが私にはしきりでした。

ところで、2人の話が終わってからのコーヒー・ブレイクで私は何人かの出席者と話しをしました。2人の講演が当然のことながら話題になりました。その中にはむしろ英語を母国語とする人もいました。カナダの前商工大臣、アメリカの前農務次官、ニューズウィーク誌の副社長、など錚々たる顔ぶれでしたが、その何れもがダー

レンドルフ博士の講演を口をきわめて激賞するのです。ハンティントン教授の肩をもつ人はただの一人もいませんでした。総合点では、英語を母国語としないドイツ人の得点の方が、やはり高かったのです。私の感じ方はそう突飛でもなかったわけです。区々たる発音の上手下手が、さしたる問題ではないことを痛感しました。しゅせんは内容であり、めりはりと格調の高さが相手を打つので、これには生得の能力ということもありましょうが、帰するところは人間としての修練であり、見識の深さなのでしょう。ことばを単に技術的にのみ考えることの浅はかさをいまさらのように思い知らされたことでした。

その意味で、アメリカ人やイギリス人と同じような音を出し、彼らと同じように「自然な英語」を書き話すことの限界と、同時に愚かしさを感じるのです。その次元のみで勝負をかける限りわれわれはついに本国人の敵ではありませんまい。極端に言えば、ニューヨークの乞食や、ロンドンの巾着切にも及びっこないのです。私は、笑福亭仁鶴師匠や西川きよし氏の一人ならぬファンですが、彼らが東京弁を真似したときは、正直いってゾッとします。母国語においてしかりとするなら、外国語においては尚更といえましょう。

逆に、たとえ音声面で誤解を招かぬ範囲で日本的であり、表現においても同じわくの中で不自然かつ古拙であったとしても、語るべき内実を有し、堂々とした態度を失わなければ、本国人もそれを評価するでしょう。ダーレンドルフ博士への賞賛がそのことを明らかにしてくれています。

むろん、日本式の発音よりは本国人のそれに近い方がよく、表現も不自然かつ古くさいよりは、自然かつ今風であるのに越したことはないのかも知れません。それに十ほど望んで一ほどかなう、のが人の世の常なので、始めからあきらめてかかるのは、敗北主義だというご批判もありましょう。でも私は、そういう枝葉末節にこだわると、とかくそれが自己目的化して、英語でいう tunnel vision、つまりは馬車馬に陥ち入る可能性がある、という危険をも指摘したい。発音や自然さも大切ですが、それは外国人のわれわれにとっては二義的な重要さをしか有さない。その感覚、つまりはなにが一番大切で、二義的三義的に大切なものはなにかを識別できる能力が、英語にいわゆる sense of proportion、つまりは釣り合いの感覚というので、これこそが英語、ないしはアングロサクソンにとって最大の美德である、ということも指摘できましょう。それに、口語的という意味に自然さを解するのなら、私はむしろ自然さを遠ざけます。外国人がやたらに世話にくだけた日本語を「自然に」あやつる

のは、私にはむしろ「不自然」かつ「不快」に思えるからです。英米人もそう思うにちがいない、と私は信じます。現にそういう英米人を何人か知っています。

さいごにキッシンジャー国務長官の英語についてひとこと。彼の英語が、発音の点でも若干は措辞の点においても非英米的であることはよく知られた事実です。私もこの8月に、久しぶりで彼とじかに話しをする折がありました。改めて彼の英語の「すざまじさ」を痛感しました。ワールドがほとんどヴァルトに聞こえるのです。全体の流れは英語のそれですが、個々の発音ときたら音声学の先生には落第点を付けられること必至の物すごさなのです。

にもかかわらず、彼がアメリカ有数の雄弁家であると評価されていることはどう考えたらよいのでしょうか。少なくともいまアメリカでベストセラーになっている *Strictly Speaking* の著者 Edwin Newman はそういう意見のようです。(同書41ページ)

以上、あらかじめお断わりしたように、直接のお答えにはなりませんでしたが、私の意の存するところ、そして前々号で引いた故齋藤藤元駐米大使の発言の趣旨がおくみとりねがえたら、まことに幸いです。中学・高校の英語教育とは無縁な、高踏的なことを述べたとお叱り下さいませぬように。志操においては学校教育とも大いにかかわりがあると、私には思えるからです。

(国際商科大学教授)

## 英語表現のレベル

与えられた英文からどのような感じをうけるか、old fashioned なのか formal なのか informal なのか slang なのかがわからなくて悩んでいます。たとえば「～しないように」をあらわす idiom として lest～should よりも so that～may not を使う方がよいとどこかで読んだことがあります。これもかなり formal ではないでしょうか。この種の、意味や正用法とはやや異質な、表現のレベルの問題とどうとりくんだらいいのかお教え下さいませぬ幸いです。また、推せられる良い本がございましたら、ぜひお知らせいただきたいと思います。

(木更津市・平野靖雄)

「カッコいい英語」は native speakers にまかせよ

西山千

英語の表現をどのレベルで受けとるべきかという問題は、たとえば外人が日本語を勉強していて日本語の表現が formal か informal か、slang なのかなどを決定で

きる法則がないのかときかれる問題に似ていると思います。どういふ表現が旧式か現代的かとか、formal informalの区別を知るためには、長い間いろいろな表現を経験して学ぶ以外に方法はないのではないのでしょうか。外人に日本語のこのような各種レベルや旧式新式のことをそれ以外に教える方法とか規則があるとは考えられないでしょう。

英語の場合も同様と思います。「旧式」と考えられる英語のスタイルは、18世紀、19世紀の文学作品にあることはもちろんです。それはイギリス、アメリカの文学作品および散文にあります。イギリスのDickensとかアメリカのHawthorneは19世紀の表現ですし、イギリスのSamuel Pepys(日記が有名)は17世紀の英語です。

しかし19世紀といっても、作家によってはかなり現代に近い表現を用いている場合があります。たとえばMark Twainなどはアメリカの表現として現代にも通じるものが多いです。短編作家としてアメリカで有名だったFrancis Bret Harteも同様です。

17世紀、18世紀の作品でも、その文章が全部旧式のものしか使っていないなどと思うのは間違いです。昔の作家の英語でも現在なお残っていて、別にそれが古いとか新しいと区別していない表現が多いです。

また昔の作者が使っていたスタイルのなかには、現在の人もそれをまねて使う例もあります。Samuel Pepysの日記には“...and so to bed”(「それから寝ることにした」)という一文で日課の終わりを記しているが、それを多少ふざけたつもりで現代でも“...and so to work”とか“and so to breakfast”などと表現する文章もあります。

英語の書籍、雑誌、新聞などを常に読んでいて段々さまざまな表現に慣れていくと、相当程度いろいろなレベルのものに接してわかるようになります。また英語国民とつき合って日常の事業活動、社交などを通して、formalとかinformalな表現を自然に知ることができます。

たとえば“You must be joking”(「ご冗談でしょう」)という一般的な表現に比べて“You're kiddin'!”は極めてinformalであり“You're pullin' my leg!”もそのようにinformalであってslangに近い表現であることは、英語国民と親しくつき合っていたり出版物を読むことによって見分けがつくようになります。英和辞書でなく、比較的大きな英語の辞書を使うと、最新の流行語は別として、相当数多いinformalな単語が出ています。また単語に“informal”, “colloquial,” “slang”などと、その定義のなかに指定してある場合がよくあります。

現代の英語は、いうまでもなく、現在の新聞雑誌書籍

などを見れば、表現がわかります。毎日のニュースを英語で読んだり、週刊ニュース誌などは参考になります。

以上、極めて常識的な方法で英語表現のレベルがわかるようになるでしょうが、ご質問の趣旨と少し外れる点かもしれません。表現のレベルを知ることと、その各レベルを自ら使いわけられるようになることとは、かなり違った問題だと思います。たとえばslangの単語の意味がわかって、そのslangを自分から使うのはいろいろな危険があります。

自分の母国語で俗語的表現を自由に使えるようになるためには、幼児から大人になるまでの20年近くも毎日その言語の生きた使い方を経験しながら、親に直されたり、人に笑われたり先生にしかられてようやく達成するので。したがって、話しかけている相手だけでなく、周囲にだれが聞いているかとか、話のいきさつ、その他あらゆる条件も合わせて考慮しなければ、俗語をどのレベルに押えるべきかなどがわからないことを、ほとんど自動的にわかるようになります。

英語のslangも同様にあらゆる条件を意識しながら半自動的に決定しなければなりません。そこまで英語を駆使できるようになるためには、英語国民社会と同じく20年程度生活して母国語と同様に使えるようになる必要があるでしょう。

Slangを不適当なところで使うと、大変な異和感を与えます。アメリカに留学して帰ってきた日本人が“Yes”といわず“Yeah”と答える例がよくあります。相手かまわず“Yeah”と反応するくせが、極めてinformalなアメリカの大学生仲間から移ってしまい、相手や周囲の条件によっては“Yes”というのが常識だということを認識していなそうです。

こういう危険がありますから、少しformalであっても、そのレベルの英語を使う方が安全です。「カッコいい英語」はnative speakersにまかせておけばよいと思います。(国際コミュニケーター)

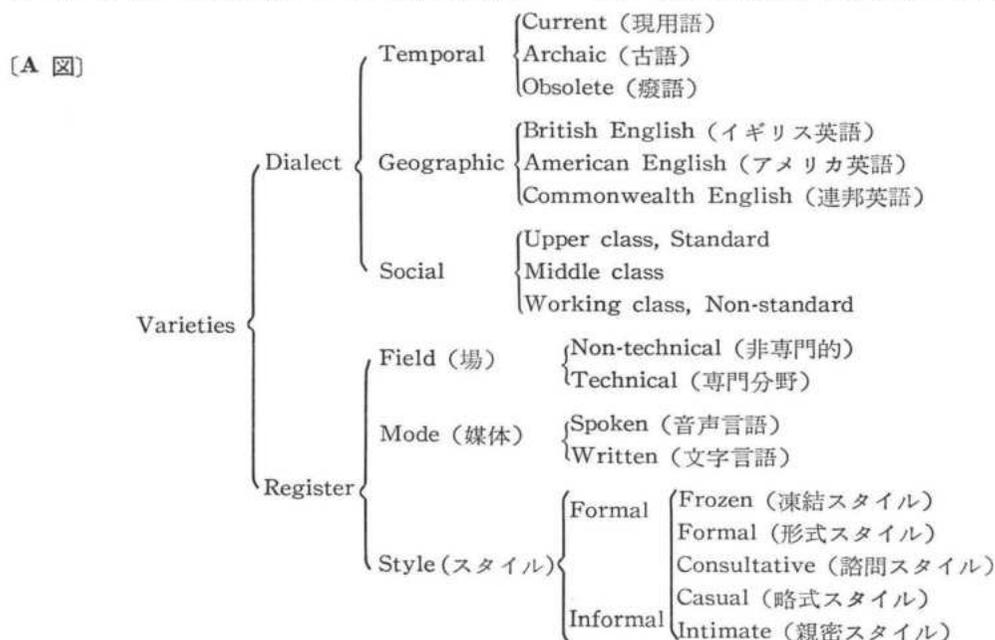
発音、語彙、文構造の3領域で考える 村田勇三郎  
「与えられた英文からどのような感じをうけるか」について発音、語彙、文構造の3つの領域で考える必要があります。I think they're a nice young couple, don't you?を[ai θɪŋk ðei ər ə 'naɪs jʌŋ kʌpl 'daʊnt ju:]と発音すれば形式ばったスタイルですが[a(i) θɪŋk ðeər ə 'naɪs jʌŋ kʌpl 'daʊnt ju:]とさえばくだけたスタイルに響くでしょう。語彙面ではroom, stop, hide, fire, try, congratulateは日常語ですがaccomodation, cease, conceal, conflagration, endeavour, felicitate といえ形式

ばった感じを与えます。文構造についていえば The subject is beyond comprehension. I don't understand this. Hey prof, that doesn't reach me. の3つの文を比べてみると形式ばったスタイル、普通のスタイル、くだけたスタイルに分けられると思います。What are you going to do? と What're ya gonna do? 更にくだけた

Cha doon. を比較してみてください。

次に「old fashioned なのか formal なのか informal なのか slang なのか」の「表現のレベルの問題」についてですが、つぎの〔A図〕をご覧ください。

この〔A図〕からあなたのあげた old-fashioned というレベルの表示は時間的差異の Archaic のことにもスタ



イルの Frozen (凍結スタイル) をも指しておるようで曖昧です。なほ slang は casual style (略式スタイル) の言語的特徴です。

話し手と聞き手間でとりかわされる発話には相関的に言語形式上に差異が生じますが、その差異に着目し英語に5つのスタイルを認めたのは M. Joos (*The Five Clocks*, 1962) です。いま5つのスタイルの言語的特徴を具体例であらわすことにします。

*Frozen*: In my opinion he is not the man whom we want.

*Formal*: I believe he is not the man we are looking for.

*Consultative*: I don't think he's the man we're looking for.

*Casual*: I don't think he's our man.

*Intimate*: 'Fraid you've picked a lemon.

さて In my opinion とか I believe という表現は I don't think より formal でしょうし、whom の使用は that や関係詞の省略した文より formal です。また関係詞節中での末尾の for は informal のあらわれで、He's our man. はかなりくだけており、lemon は slang で

す。'Fraid は I'm afraid の略ですが主語、動詞および afraid の語頭音を略しており親密スタイルの言語的特徴といえます。これらのスタイルを混同すると木に竹をついだようにならぬ文になる一例をあげておきましょう。It is incumbent upon me to humbly submit to your attention the request that you get the hell outta here. 「とっとと消えて失せろという要求を貴下のご注意にうやうやしく託す必要を切に感ずるのであります」これは普通の英語表現でいえば I have to ask you to get out of here. というところです。

ご質問の lest~should は形式ばっていますが、so that~may not は普通のスタイルでしょう。もっとくだけたスタイルでは so~won't (例えば Get up at five so you won't miss the train.) があることはご存知だと思います。

最後に「推薦できる良い本」とのことですが D. Crystal, D. Davy, *Investigating English Style*, Longmans, 1969が適当でしょう。英語表現のレベルと広い意味でかわりがあり、次第に英語の genius が会得できると思われる滋味あるものとして R. Quirk, *The Use of English* (Longmans. 1968<sup>2</sup> enlarged second edition) をお薦め

します。日本の出版物では『文法論I』(英語学大系・第三卷 大修館書店)の「現代英語の諸相」がよいでしょう。先に引用した Joos, *The Five Clocks* など包括的な枠組のなかで紹介解説されています。(立教大学助教授)

### 英語の「種類」を常に意識することが必要 村田聖明

ここに提起された問題は、英語を外国語として学習する、われわれ日本人にとっては、大変むずかしいものです。しかし、この問題のむずかしさは、英語の専門家の間でも、十分に理解されていないのではないと思われる。たとえば、野卑な単語や表現が、「生きた英語」であるかの如く、教えられるような場合があれば、それは、このむずかしさを示していることになりましょう。

英語の種類 (varieties) は(1)時間的、(2)地理的、(3)社会的という3つの範ちゅうによって分類することができます。「時間的」というのは、ことばの「古さ」、「新しさ」です。「地理的」は地域による分類で、アメリカ英語、イギリス英語、その他の地域の英語などが例ですが、一つの国の中でも、一定地方独特の表現や語彙があれば、これは方言 (dialect) として識別されます。

質問の中の old-fashioned ということばは、いうまでもなく、(1)の時間的分類に関するものです。古い単語については、辞書は、古語 (archaic) や廃語 (obsolete) は、それぞれの用語で表示していますが、古語や廃語ではなくても、いささか古くなった単語 (これがいわゆる old-fashioned) は、そのようには示されていません。従って、質問にあるように、古めかしい用語を、知らずに用いることもあり得るわけです。

第三の「社会的」分類については、一般に level (品位) や status (身分) というような単語の概念によって分類が行なわれています。その種類は次のように表わすことができます。

formal English (あらたまった英語)	}	standard English (標準英語)
informal English (くだけた英語)		
vulgate English (卑俗英語)	—	substandard (nonstandard) (亜標準英語)
—slang, dialects, argot, etc.— (単語、方言、通語など)		(または非標準英語)

卑俗英語における単語は、辞書も slang, dialect, などと表示していますが、すべての辞書に共通の基準はないので、不一致が見られます。ある辞書で slang と示されている単語が、別の辞書では、そのような表示がなかったり、あるいは、colloquialism (口語) と示されていたりすることがあります。

これらの英語の種類や、品位の使いわけの一般原則を

述べれば、「それぞれの情況に一番ふさわしい英語を用いる」ということになるのは当然です。たとえば、地理的分類に関していえば、イギリスではイギリス英語を、アメリカではアメリカ英語を用いるのが理想でしょう。

時間的分類について言えば、1970年代においては、1870年代の英語ではなく、現代の英語を用いるべきであることはいうまでもありません。

さらに、たとえば、1975年のイギリスやアメリカにおいても、特定の情況において、それにもっともふさわしい品位の英語を用いるべきであります。ここでいう情況とは、話者とその相手との社会的関係のみならず、相手の個人的背景なども要素となります。極端な例をあげれば、ある、教養ある日本人が、アメリカの教養ある人々の集団に向かって論説を行なう場合と、その同じ日本人が、五歳のアメリカ人の子供に向かって話す場合とでは、英語の「種類」が当然異なります。

さて、このような使いわけをするためには、どんな準備が必要かということになります。当然ながら、辞書に示されている限りの、単語の分類は出来るだけ熟知していなければなりません。しかし、英語の「種類」は、単語のみで決まるのではなく、単語の組み合わせ、すなわち、熟語、成句のみならず、文章そのものの構文によって決まるので、これは大変むずかしいことになります。

このような使いわけが充分に出来るようになるための訓練における一つの心がけは、英語の文例を読む時に、その英語の「種類」を意識することです。文学的作品であれば、いうまでもなく、その作品の書かれた年代、作品中の人物のことばについては、その人物の教養、年齢、社会地位などを念頭において、模倣してよいかどうかを決めなければなりません。この点、和英辞典の用例には「種類」の提示が殆どないので、あまり役に立ちません。英和辞典の用例では、原典が示されていれば、その原典の時代を知る必要があります。

この問題についての参考文献としては、次のようなものがあります。

- ① 村田聖明『現代英語60講』(昭和47年英語教育協議会版)中の「ことばの品位」(pp.7—12)。
- ② Perrin, Porter G. *Writer's Guide and Index to English* (1950) 中の "Varieties of English" (pp. 33—68)。
- ③ *The Random House Dictionary of the English Language* 中の Raven I. McDavid, Jr. による "Usage, Dialects, and Functional Varieties"。
- ④ Watt, William W. *An American Rhetoric* (1952), pp. 16—17. (ジャパントイムズ編集局長)

# 英語の諺 (その1)

—子供と親—



TODA YUTAKA

戸田 豊

英語の諺として英米の諺語辞典に掲載されているものは、その数約2万に達する。どの諺も現在常用されているわけではないにしても、陰に陽に英米人の言語生活の中に生き続けていることはたしかである。諺はそれが用いられる民族、国民の言語と文化を代表している。

諺は人々の口のにせ易い形態をとって、簡潔にそして適確に人生の種々相に批判、助言、激励、慰安を与えてくれる。それは人々の生活からにじみ出た生活の知恵であり、まさに庶民の英知の結集である。英米の諺の持つ形態と意味を通して、英語と英語の背景、英米人のものの見方、考え方を知り、ひいては英米文化一般を垣間見ることができる。

英語の諺はその形態つまり音声、統語上の特徴を調べることが興味深いことであるが、本稿では、ひとつひとつの諺がもつ literal な意味はもちろんのこと、それが表わす figurative な内容を考察しようとするものである。諺が扱う分野は人生、人事万般に及ぶので、具体から抽象へという方針に従って、身近かなものつまり人間そのものから手がけていきたい。

## Boys will be boys.

Boys will be boys. (男の子はやはり男の子) は、男の子の腕白ぶりと反抗的態度を大目に見よう、許してやろうという大人の気持を表わしている諺である。大人は、子供の無軌道ぶりの中に、自らの少年時代の投影を見て、多少とも同情と共感を覚える。男の子のいたずらは仕方がない、やむをえないと。そして、小ざっぱりして小ぎれいな子供よりも、鼻水でも垂らして走りまわり転げまわる子供に頼もしさを感じる。Better a snotty child than his nose wiped off. (鼻をふいてもらうより鼻垂れ小僧でいるほうがまし)と言われる所以である。

子供のいたずらは、When children stand quiet, they have done some ill. (子供たちが静かにしている時は何か悪いことをしている) で表わされる。静かにしているように思われる時には、たしかに人目を忍んで一

心不乱に悪さに耽っているものである。静かにしている時の子供のいたずらの代表的なものは、いたずら書きである。A white wall is a fool's paper. (白い壁はばかの紙) には、英語の諺に多く登場する fool が早くも出ているが、子供もばかもあたり構わず、四圍の思惑などを考えずにわが道を行く点では同じである。

## A growing youth has a wolf in his belly.

子供は食い意地が張っている。Children and chicken must be always picking. (子供とひな鳥は絶えず何かついばんでいる) は、子供の食欲の旺盛なさまを表わしている。子供も鳥もその胃は小さいから、少しずつ何回も食べなければいけない、という意味もある。A growing youth has a wolf in his belly. (育ち盛りの若者はおなかにおおかみを宿している) という諺になると、貪欲なおおかみも顔負けである。have a wolf in one's belly という句は、常に飢えている、猛烈な食欲がある、という意味を持つようになる。さんざん食べた後でも食べたくなる。からだが求めているのではなく気が求めている。The eye is bigger than the belly. または Your eyes are bigger than your belly. (目は腹より大きい) は、食べきれないくせに欲張って食べるということである。胃袋の収容能力を過大に評価している。この諺は、食べることに限らず、他の物欲についても過度に貪欲な場合に適用される。いざ食べるとなると、子供はなりふりを構わない。Fingers were made before forks. (指はフォークより前に作られた) という諺がある。この後に、and hands before knives. (そして手はナイフより前に作られた) がついている時もある。正確に言えば、フォークがイギリスに入ったのは1620年頃とされている。それ以前には、言うまでもなくフォークの働きをしたのは指である。食事中に食べ物をこぼしたりする時にとっさに子供は——時にはおとなでも——指でつまもうとする。その無作法ぶりを許してやろうというのがこの諺である。さらには、食事中はあまり儀式ばることはないという、寛大な思いやりのある諺

でもある。

### Children should be seen, and not heard.

大人どおしで話をしている最中に、小さな口ばしを入れてくる子供がいる。子供の自己主張であり、関心を払ってもらいたいという欲求の現われでもある。Children should be seen, and not heard. (子供は見られるべきで聞かれるべきでない) は、子供は大人と同席してもよいが、ものを言っははいけない、ということである。Speak when you are spoken to. (話しかけられたら話さない) とも言われる。さらに、Speak when you are spoken to; come when you are called. (話しかけられたら話し、呼ばれたら来なさい) という長い表現の場合もある。Maidens should be seen, and not heard. とも言われる。女の子はでしゃばりたがるものらしい。Silence is the best ornament of a woman. (沈黙は女性の最上の飾り) を悟るにはもうしばらくの時間が必要である。おしゃべりを封ずる諺には、さらに、Empty vessels make most sound. (からの器がもっとも大きな音を出す) とか、A loud laugh shows an empty mind. (高笑いは空虚な心の現われ) などがある。

しつこくものをたずねるのも子供の特性である。Ask no questions and you will be told no lies. (たずねなければうそをつかれることもない) と言いたくなる。この諺は、Charles Dickens (1812—70) の *Great Expectations* の中に出てくるが、さらにさかのぼること100年ほど前に、Oliver Goldsmith (1728—74) が、*She Stoops to Conquer* の中で、Ask me no questions and I'll tell you no fibs. と書いたのが最初である。Ask a silly question and you'll get a silly answer. (愚問には愚答が返ってくる) も質問を撃退する答えになる。

子供が口ばしをさしはさんできたり、いやな問いを發したりするのはたしかに困りものだが、子供に肩を持ってくれるのは『聖書』の *Matthew* 21. 16, *Psalms* 8, 2 のことばである。それは、Out of the mouths of babes and sucklings. (乳飲み子の口から) であり、子供や無知、無教育の者からも学べ、という意味である。かれらが気のきいたことを言ったり、暗示を与えてくれたりした時に用いられる。

### Little pitchers have long ears.

子供は大人どおしの話に無関心のようにいて、実は耳は動かしている。Walls have ears. (壁に耳あり), Hedges have eyes. (垣に目あり), Fields have eyes and woods have ears. (野原に目、森に耳あり) と言う

が、子供の場合は、Little pitchers have long ears. (小さな水差しには長い取手がついている) である。little が small になり、long は wide, big, great に代わることもある。pitcher は jug (水差し) のことであり、音が“注がれる”つぼ状の器官を表わしている。ear は jug の handle (取手) と耳の外形を表わしている。聞かせたくないこと、聞かれると困ることを不思議と小耳にはさむのが子供である。子供に限らず、一般的に、秘密の話し合いの内容はとかく広く知れ渡るようになる、という意味もこの諺にはある。大きな耳があるのは水差しだけではない。ろばにも大きな耳がついている。Asses as well as pitchers have ears. (ろばにも水差しと同様耳がある) の中の asses で表わされているものは子供であり、ばかである。

聞きかじったことを口外しなければまだいいものを、とかく聞き知ったことは話したがるのは、子供といわず人間すべての哀れな性(♂)である。ついさらけ出し、ひけらかす。Children and fools cannot lie [speak truth]. (子供とばかはうそがつけない [本当のことを言う]) は、まさにかれらの心のうちを全部さらけ出すことを意味している。この諺の children は drunkards に変わることがある。そうすれば、In wine there is truth. (酒の中に真実がある) や A full heart lied never. (酔っぱらいがうそを言ったためしがない) と同じく、酒に酔えば本当のことを言うものだ、酔っぱらいは思っていること、知っていることを酒の勢いで吐いてしまうものだ、ということになる。

### Nurture is above nature.

氏(♂)も育ちも良いのが理想である。庶民にとっての救いは、「氏より育ち」を頼りにして生きることである。英語には、Nature passes nurture. (造化はしつけにまさる) という諺がある。それに対して、Nurture is above [passes] nature. (養育は造化をしのぐ), It is breeding and not birth that makes a man. (氏より育ちが人を作る) というのがある。この両端の間をとるかの如くに、Birth is much, but breeding is more.

(生まれも大切だが育ちはもっと大切) がある。氏素性は良いに越したことはないが、大人になるまでの環境と教育が人間形成にとってさらに一層重要であると言える。生後の養育は家柄の良さにままして大切である。

人間形成にとってもっとも大切なのは幼い頃の正しい養育であることを表わしている諺に、Train up a child in the way he should go. (子供を当然進むべき方向に育て上げよ) がある。さらに、これには、and when he

is old he will not depart from it. (そうすれば年をとってもそれからそれることはない)が続いている。大人に成長してから悔やんでもしょうがない。It is hard to teach an old dog tricks. (老犬に芸を仕込むのは難しい)という言い方もあるように、老いてからものを覚えさせることだって難しいのだから、いわんや性格や生活習慣の形成は大きくなってから変えようとしてもむだである。人間づくりは若いうちである。A tree must be bent while it is young. (木は若いうちに曲げなければいけない)は、人を矯正するなら若いうちのほうが良いということを見せてくれる。

### Spare the rod and spoil the child.

イギリスの学校では今でも体罰が加えられるらしいが、昔は when I was at school の代わりに when I was under the rod と言ったくらいである。この under the rod という句の由来は、Spare the rod and spoil the child. (笞を惜しんで子供をだめにせよ)にある。体罰の是非はイギリスといわず日本でも時に議論を呼ぶが、ある程度の体罰は野放図に気ままに育ちがちな子供にとっては良き成長への刺激ともなる。18世紀の文学者、辞書編纂家である Dr. Johnson こと Samuel Johnson (1709—84) がラテン語の学殖をほめられた時に、先生がよく叩いてくれたからです、笞のおかげです、と答えたという。さて、この諺の原形は『聖書』の Proverbs 13. 24にあり、He that spareth his rod hateth his son: but he that loveth him chasteneth him betimes. (むちを加えない者はその子を憎むのである、子を愛する者はつとめてこれを懲(ち)らしめる)となっている。現在用いられている諺は、命令文2つが and でつながれ、逆説的に、笞を惜しめそして子供をだめにせよ、という形をとって、しつけと罰は子供の成長には不可欠であることを強く表わしている。同じ内容を持つ諺に、Sometimes severity is better than gentleness.

(やさしくするよりも厳しいほうが良い時もある)、Bit a young man and ride him on the curb. (若者にははみをふくませ、止めぐつわで抑えて走らせよ)、Give a bairn his will, and a whelp his fill, and none of these two will thrive. (子供を気ままにさせ、子犬に腹一杯食べさせてみる、そうすれば子供も子犬もともに育つわけがない)があるが、日本でも、子供の将来のためを思って、世間へ出しているいろいろの苦勞を経験させよ、という意味で、「かわいい子には旅をさせよ」とか、貼(4)ると張るつまり打つにかけて、小僧は励まして使えの意味で、「小僧と障子ははるほどよい」がある。

### The child is father of the man.

The child is father of [to] the man. (子供は成人の父)という William Wordsworth (1770—1850) の “My Heart Leaps Up When I Behold” とか “The Rainbow” として知られている短詩に起源をもつ諺がある。次のワーズワスの原詩からわかることであるが、この一句の意味は、虹を見て子供の時と同じように胸躍らせる人間であれ、子供がもっとも純粋で自然に対して敬虔な気持を持っている、おとなは子供の心を鑑(5)として生きていかなければいけない、ということである。

My heart leaps up when I behold  
A rainbow in the sky:  
So was it when my life began;  
So is it now I am a man;  
So be it when I shall grow old,  
Or let me die!  
The Child is father of the Man;  
And I could wish my days to be  
Bound each to each by natural piety.

(空の虹を見る時、私の心は躍る、幼い時もそうであったし、おとなになった今もそうである、老いてからもそうであろう、そうでなければ死んでしまいたい！ こどもはおとなの父、願わくば私の毎日毎日が敬虔の心でつながれてほしい)

ワーズワスの意味するものは、人間が成長するにつれて心にかげりが生じ、幼児の栄光から遠ざかっていくことに対する嘆きである。詩人の幼児崇拜の思想がこの短詩にこめられていると言える。ところが、諺としてこの一句が独立すると、子供が大人のもとになっている、つまり、子供時代の性格が大人になってからの性格を示す、というふうにまったく異質の意味が生じてきた。An old dog cannot alter his way of barking. (老犬はほえ方を変えることができない)、What is learnt in the cradle lasts till the tomb. (ゆりかごの中で学んだことは墓場まで続く)という諺と同じ内容である。日本にも、「三つ子の魂百まで」というこれに類似した諺があるが、さらに「すずめ百まで踊り忘れず」もまたこの部類に属すると言えよう。ただし、「三つ子の魂百まで」には、幼児期の性質といっても悪い癖などの意味合いがこめられているが、The child is father of [to] the man. にはそれがないことに注意しなければいけない。

**What is bred in the bone will come out in the flesh.**

人間形成にとって子供時代の養育がいかに重大な意味

を持つかについて眺めてきたのであるが、見落としてはならないものは生来の性質、本性である。後天的にはどうにもならない、良くも悪くも運命的ともいえる遺伝的特質についても諺は扱っている。(1) What is bred in the bone will not out of the flesh./What is bred in the bone will never come out of the flesh. (2) What is bred in the bone will come out in the flesh. という2つの諺を考えてみたい。(1)の英語世界への出現は1470年で、用例は Harde hit ys to take oute off the fleysse that ys bredde in the boone. という形である。(2)の形は(1)から作られたもじりの諺である。 what is bred in the bone とは遺伝形質つまり天性を表わしている。(1)の意味は、根深く植えつけられているものだから離れないものである、ということから、遺伝的特質はかならず子孫に伝わるということである。そして、(2)の意味は、生来の性質、性癖は抑えることはできず、常に現われているということである。(1)の部類に属する諺は多い。Like father, like son. (この父にしてこの子あり), Like mother, like daughter. (この母にしてこの娘あり)は、それぞれ、子供が容貌、性格を父親および母親から遺伝として受けついでいることを示している。Like begets like. (似たものが似たものを生む), Vipers breed vipers. (まむしはまむしを生む)は、「蛙の子は蛙」に似ている。An onion will not produce a rose. (たまねぎはばらを生まぬ)は、「瓜(か)の蔓(つる)には茄子(かぶ)は成らぬ」に対応する。さらに日本では、親子が違いすぎる場合に、「親に似ぬ子は鬼子」、「鳶(とび)が鷹(たか)を生む」と言う。遺伝の果たす大きな力を逆に表現したものと考えられよう。なお、外見、性格、気質が親にそっくりの子のことを a chip of the (same) old block と言い、男の子が父親に似ている場合に特に用いられる。また、父親にそっくりとか両親にそっくりの子供のことを He is a carbon copy of his father [parents]. のように現代的な表現で表わすこともできる。

(2)の生得のものかならず現われるという意味では、ローマの詩人 Horace (65—8 B. C.) に由来する Though you cast out nature with a fork, it will still return.

(天性は熊手で投げ棄てても戻ってくる)が似ている。生まれつきの性質は力づくでは取り去ることはできないということである。本性を変えたり隠したりはできないという意味を表わす諺で『聖書』Jeremiah 13. 23に起源をもつものがある。それは、Can the Ethiopian change his skin, or the leopard his spots? (エチオピアびとはその皮膚を変えることができようか。ひょうはその

点を変えることができようか)である。諺としては、The leopard cannot change his spots. (豹はその斑点を変えることができない)という形で用いられ、好ましくない性質について言われる。

遺伝といい、生後のしつけといい、いずれも子供の成長には重要な働きをするものだが、なんといっても親は子の範ともなり、親の言動は子供に大きな影響を与える。As the old cock crows, so crows the young./As the old cock crows, the young one learns./The young cock crows as he the old hears. (親どりがとくときをつくれれば若どりはこれにならう)は、見よう見まねを表わしたもので、悪い親から良い子は育たないことを意味している。ひいては、年輩の者がよこしまなら若輩もけっして良くなれないということをも表わす。先に、Like father, like son. Like mother, like daughter. を出したが、後天的にも、この父にしてこの息子、この母にしてこの娘あり、は生きている。The young pig grunts like the old sow. (子豚のなき声親豚に似る)もまた同じ趣旨である。

#### All work and no play makes Jack a dull boy.

17世紀中葉に用例が初めて現われる All work and no play makes Jack a dull boy (and Jill a dull girl). (勉強ばかりして遊ばせないと男の子も女の子も愚鈍になる)という諺の意味を観念的には知っていても、子供が遊びほうけているのを目にすると不安と焦燥が心の中に生ずるのは親である。Samuel Smiles (1812—1904) は *Self-Help* の中で、“All work and no play makes Jack a dull boy”; but all play and no work makes him something greatly worse. (しかし勉強をしないで遊んでばかりいるのはそれ以上にはるかに悪いものにする)と but 以下を付け加えている。文字どおり「よく学びよく遊べ」が賢明な策である。Extremes are dangerous. (極端は危険), Moderation in all things./There is a measure [mean] in all things. (何事にも適度がある)という諺があるが、子供の養育はまさに work と play の適正なまぜ合わせが肝要である。A bow long bent at last waxes weak. (長い間張りつめている弓もついには張りが弱くなる), He that never eases himself faints. (気を休めることのない人は元気を失う)なども All work and no play... に類似している。大人にも子供にも、Variety is the spice of life. (変化は人生の薬味), Variety takes away satiety. (変化は飽きを取り去る)が重要な意味を帯びてくる。

実際生活で見受けられる青白いひよろひよろのもやし

っ子には, *Ill weeds grow apace* [fast]. (悪草は成長が速い)がよくあてはまる. この諺は, 悪い事は速く広まる, 悪人は栄える, という意味のほかにひょろひょろと成長の速い子供をあざける意味がある. 速い成長は有用ならざる人間になるきざしでもある. *Soon ripe, soon rotten.* (熟すのがはやいものは腐るのもはやい)は, 早熟は大成せずとか早熟な者は長生きしないという意味を持っている. *Too soon wise to live long.* (あまり幼くして賢くて長生きできない)とも言う. *Slow and steady wins the race.* (ゆっくり着実なのが競争に勝つ)をモットーに「大器晩成」をこそ目指すように子供を見守るべきではなからうか.

#### Happy is he that is happy in his children.

『聖書』の *Psalms* 127. 5に *Happy is the man that hath his quiver full of them.* (矢の満ちた矢筒を持つ人はさいわいである)という子沢山を賛美する一句がある. 子供は家庭を明るく賑やかにし, 将来に希望と光明を与えてくれるものである. とりわけ良い子に恵まれた親はまさに *Happy is he that is happy in his children.* (子供のことで幸せな人は幸せである)という諺があてはまる. しかし, 親の目は子供を前にしてとかくもりがちである. 自己本位にわが子がかわいさの思いがつのり, 「子を見ること親に如(く)かず」とはいかない. 「親ぼかちゃんりん」になりがちである. *It is a wise father that knows his own child.* (自分の子を知っている父親は賢い父親である)は, 自分の子供のことをよく知っている父親はいない, ということを表わしている. ただし, この諺には, 自分の子が本当に自分の子であることを知っている父親は少ない(知っているのは母親だけ)という意味もあり, シェイクスピアは, *The Merchant of Venice* II. ii. 80 ではこの意味で用いている. また, この諺は, *It is a wise child that knows its own father.* (自分の父親を知っている子は賢い子である——自分の父親が本当に自分の父親であるかどうかを知っている子供は少ない)という諺のもじりであることに注意したい.

「親の欲目」ということばがある. 人情として親は子を買いかぶる. それが親の悩みともなっていく. *The crow thinks her own bird(s) fairest* [whitest]. (からすは自分の子をもっとも美しい[白い]と思う)は, よそ目にはとうてい美しいとは言えないまっ黒なからすでも自分の子はこの上なくきれいだと思ひ込んでしまう. 親は子に対して盲目的に愛情を注ぐために自分の子を極端に身びいきしがちである. さらに, この諺は, 人

は自分の子供だけでなく, 自分の持物, 親類縁者, 自国を過大に評価しがちであるという意味までも持つにいたる. このようなひとよりがりの誤った価値判断を下しがちな傾向に対する警告の諺は多くある. *Every ape thinks his puppy the fairest.* (猿は自分の子をもっともきれいだと思う), *Every creature thinks her own fair.* (生き物はどれもわが子はりっぱだと思う), *Every man likes his own thing best.* (だれでもわが子がもっとも気に入っている), *Every peddler thinks well of his pack.* (行商人はだれでも自分の荷は良い物ばかりだと思っている), *All (his) geese are swans.* (自分のものならがちょうもみな白鳥)などである. 日本語の世界にも, 「親の欲目」, 「手前味噌」, 「わが仏尊し」といった言い方がある. ところで, 見込みのなさそうなできの悪い子でも, 将来どんなに成功するかわからない. だからこそ子供は親にとって生き甲斐ともなる. *No one knows the luck of a lousy calf.* (しらみのたかった子牛の幸運を知る者はいない)という諺は親たる者にとって大きな救いである. ふと *ugly duckling* を思い起こしたくなる.

子供に関する諺をしめくくるにあたって, *Love makes the world go round.* (愛が世界を回転させる)を記しておきたい. この諺は, 愛によって子供が生まれ, 育かれ, 人間が永遠に栄えることを表わしている.

(静岡県立韮山高教諭)

(p. 21 よりつづき)

*was an inbecile?* (Jones さん, 賞金10万ドルですよ, 自分を任命してくれた人から後になって低能呼ばわりされたのは, どの国務長官でしょうか)

この場合例の話者(クイズ番組の司会者)は, *what secretary of state* が誰であるか既に知っている. 従って *him* の先行詞は *what secretary of state* ではなくて, 話者の頭の中にあるこの人物なのである. この頭の中にある先行詞を後で話者は疑問詞でおきかえたので, これは疑問詞の指すのが何であるか話者には分からない普通の疑問文では起らない現象である. この事実は Postal が指摘したものだが, 上述の解釈は, K. Yamamoto, "A note on backward pronominalization involving WH", *Studies in English Linguistics* No. 2 (1973, Asahi Press), pp. 123-5 による. 同じような現象は, §3(a)で述べた WH 問い返し疑問についても見られる. (次号につづく)

(東京教育大学教授)

## 要求される 英語の2つのレベル

—会議の英語とあいさつの英語—

Saitō Eiji  
齋藤 栄二

平泉試案をめぐる英語教育論争の始まった最初の頃から、ずっと気になっている問題がある。そのことをはっきりさせなければ、英語教育をめぐる議論の台風の目が、かたよった1か所にだけ集中しがちにおもわれる。議論をバランスのとれた、全体にいきわたったものとするために、やや軌道修正をする必要があるのではないか。そのことに、ここでふれたい。

まず平泉氏が、英語教育界に対して、要求しておられるものは、次のように要約できよう。それは、国政レベルにおいて、あるいは外交交渉の国際的レベルの場において、重みのある内容をきっちりと相手に主張する、あるいは対立点・論争点をはっきりさせ、相手の質疑に自在に対応する、そういうことを通訳をまじえずに、自らの英語を駆使して第一線に立てる人間の養成ということであろう。（『英語展望』No. 49, 「英語教育の現状と改革の方向(2)」, p. 7 参照）私は、英語教育に要求される2つのレベルを考えたい。まず第1のレベルを、仮に「会議の英語」と呼んでみたい。これは、まさに、平泉氏の要求されている英語の力をさす。ただし別に会議にだけ使われる英語というような「場」を限定するものではない。日本の学者がアメリカに招かれて、大学で講義や講演をするのも会議の英語であり、民間会社がアメリカの会社を相手に、複雑な商取引きでやりあうのも会議の英語である。要するにそれは、要求される英語の高度なレベルに対してつけられる呼称である。

さて、2つめのレベルを、ひとまず「あいさつの英語」と呼んでみたい。「会議の英語」が少数精鋭主義の英語の秀才コースであるのに対して、「あいさつの英語」は、文字通り、“Good morning”と言える英語であり、カトコトの英語であり、観光旅行の英語である。

さて、昨今の英語教育の論争は、おおむね次のような主張を中心として展開している。現在のシステムで英語教育を続行する限り、「会議の英語」を身につけた人間が育ってくるのは、ほぼ不可能である。そういう現状認識のうえにたって、いくつかの具体的な提案がなされている。そのこと自体に、反対意見をのべようという気持は、今ここではない。それどころか、現状改革の提案としては、うなずける要素もかなり多い。ここで、私が問題としたいのは、英語教育をめぐる改革論争の中で、「あいさつの英語」の持っている意味が、ほぼ完全に無視されているということである。今までの議論の中では、そういう低いレベルの英語に対する配慮というものは、全然念頭にあげられてきていないと言ってよい。それどころか逆に、そういうレベルの英語は、否定されなければならない対象として、すでに決められて議論がスタートしているようにみえる。果たしてこれでいいのだろうか。このまま、「会議の英語」志向型の議論ばかりしていて、そのプロセスの中で何か大事なものを見失ってしまっていないだろうか。

私の考えを述べる前に、私の経験の具体的な事例を幾つか述べたい。

まずその1. 高校生、大学生、一般大衆の海外旅行にでかける数が飛躍的に増大していること。夏休み終了後の最初の英語の時間、「どうだ、何かかわったことはなかったか」と声をかけると、「ずっとハワイにいました」などという返事がかえってくる。「英語はしゃべれたか」と聞くと、「むこうの人は、よくしゃべりました」などと人を笑わす。サンフランシスコに行ったもの、ディズニーランドを訪ねたもの、その数は毎年増加している。彼らの英語は「あいさつの英語」である。

その2. 英語に直接ふれた体験は、外国にでかけた者だけに限らない。外人宣教師等の主催する地元でおこなわれたサマー・キャンプで、たどたどしい英語で自己紹介をし、とにかくも意思の疏通をしてきた生徒のふえていること。

その3. 機会があつてある所で成人に英会話を教えた。対象もまったく多種多様。年齢は20歳前後から60歳まで、職業はスーパー勤務、主婦、警官にいたるまで。その中の一人は次のように書いている。「私はスーパーマーケットの会社の企画関係の仕事をしており、米国に3回、ヨーロッパに1回、業界視察に出ておりますが、英語を話せないために苦しい体験をしいられ、勇気だけで英会話学校に入りました。なんとか続けていきたい。」

その4. 今年もまた私の学校では同僚の教師が夏休みに何人か海外にでかけた。帰ってきての彼らの感想の一

つは、いつも同じで「ちょっとでもよいから英語が話せたら」である。

その5. アメリカ人が、私のクラスに来たことがある。簡単な questions and answers で彼に自分の英語が通じたと興奮する生徒達。あんなよろこびの姿を授業の中ではめったにみせない。

その6. 学校の文化祭ともなれば、訪れる2, 3の外人に、ろくすっぽ英語が話せなくても勇敢に案内を買ってでる生徒達のふえていること。

その7. 昨年3人のアメリカ人高校生が私たちの学校を訪れた。彼らと生徒達の間には、むつかしい議論も、対立点の議論もない。ガールフレンドはいるかという問いに対して、yes とかえてきた返事に全体がどっと沸く。そこに同時代に生きる若者達の共感がひろがる。

具体例をあげるのはこの辺でやめたい。こういう例をあげだしたら枚挙にいとまがないからである。しかもこういう状況は、私の勤務校にだけ起こった特殊現象ではなく、大なり小なりどこの学校でも起りつつある。そしてそういう傾向はますますさかんになるであろう。たしかにそこで使われている英語のレベルは低い。数も間違いだらけだし、時には時制もめちゃくちゃで相手のアメリカ人の目を白黒させる。しかし、そんな間違いにおかまもなく、英語という言葉が人と人とを結びつけていく。こうしてカタコト英語による小さな親善の輪があたりこちでひろがっていく。それは疑えない事実である。

かつての小田実氏と石原慎太郎氏の討論からことばを借りれば、「会議の英語」は鳥瞰図の英語であり、「あいさつの英語」は虫瞰図の英語であろうか。そしてそれぞれに重要な意味を持っている。虫瞰図の英語を通り越して、直接鳥瞰図の英語が育つということはありません。しかも、虫瞰図の英語は、ただ通り越される宿命にあるというだけではなく、それ自体、鳥瞰図の英語と、対等の、あるいはそれ以上の重要性を持っていることを心に留め置かなければならない。高きにつくだけが教育ではない。現在の英語教育が役に立たないというのは、いわば鳥瞰図からみた、「会議の英語」という視点からの議論であり、「あいさつの英語」の立場から考えるならば、議論の内容はやや違った色彩を帯びてくる筈である。しかも「あいさつの英語」は、一般大衆の、直接相手国民との肌のふれあいという土台の上になりたっている。そして、実はこういう体験的レベルにおける接触こそが、国と国との結びつきをバック・アップする時代に今は入りつつある。この国民的な力が、国と国の関係を規制し、世の中の動きの根本をかたちづかっていくことになる。この力をみくびってはいけぬ。トップレベル

における会談だけが、国と国とを結びつけるものではない。そのことは、過去の私達の体験から痛い程の教訓を得ているはずだ。このことを考える時、私たちは、単なる技術論を展開するだけでなく、根本的な私たちの姿勢を踏まえた議論を展開すべきである

こう考えてくると、「会議の英語」に対応する英語教育を考えるだけではなく、あいさつのレベルにおける英語教育の持っている意味にも目をむけなければならないことが、かなりはっきりしてくる。高度な国際コミュニケーションのための英語の方に重点の行きがちで、現今の英語教育論争の、視点の軌道修正をおねがしたい。

「会議英語」志向型の英語の力に対応できるだけのシステムを「別枠」のコースとして持つと同時に、もっと幅の広い、人々の多様な要求に応じ得る英語教育でなければならないのではなからうか。そういう観点から英語の教育を考える時、現在義務教育的にひろがっている英語も、一概に否定し去ってしまう訳にもいかないのである。

(福島県立福島女子高校教諭)

(p. 14 よりつづき)

おり幼い子供は大抵少なくとも1冊や2冊持っている。

そうした絵本があっても、テレビ時代の現代っ子たちは、時として、テレビに映るイメージからの連想でマザー・グースを現代風に(?)理解していることがある。“Rock-a-bye, Baby”といえ、おそらく英語国では一番よく知られた子守歌である。ところが、アメリカの子供はこれをコアラベアの歌と思っている子が案外多いのだ。歌詞は、Rock-a-bye, baby, on the tree top./When the wind blows, the cradle will rock;/When the bough breaks, the cradle will fall./And down will come baby, cradle and all. というもので、どこにもコアラは登場しない。絵本には、必ず木の枝につり下げた揺りかごの中で赤ちゃんが眠っている絵が描いてある。

どうしてそんな新解釈が生まれたかということ、「セサミ・ストリート」である。お母さんコアラが子熊をおんぶしてヨチヨチ木の上を這っている場面で、もの悲しい日本の子守歌とは異質の、清明な美しいメロディーが流れて来るので、ご存知の方も多いだろう。アメリカの母親は、子供が泣いても別室のベッドに入れておき子守歌をうたって寝かしつけるというようなきめ細かい育児をしなくなって来ているが、彼女らに代わってコアラのお母さんが、たとえ多少の誤解は生じるにせよ、一生懸命マザー・グースの普及に努めているように見えて、私はいつも微笑を誘われるのだった。

(主婦、『女性のアメリカ生活英会話』著者)

# FORUM



## 「英語教育改善策を探る」

を読んで

### Vocabulary について

「中学高校では、ほんとうに普通の少数の vocabulary に限って…」  
「むづかしい単語をやたらに教え込むために基礎的学力ができないということになる。」  
「ごく普通に使われている日常の vocabulary だけを問題にしていく」には賛成です。動詞でいえば人間の基本的動作である、put, take, give, go, come, get, etc. を現在形、現在進行形、過去形で教えたらいかがだろうか。have, need, like, want のような状態を表わすコトバは個人的感情が入って来るし、日本語に直してもむづかしい。前記の動詞なら日本語に直さなくても動作で理解出来る。現在使用している教科書では little, young, big, old がまず最初に出て来るが、どうも contrast のしかたがおかしいと思う。形容詞を出す前に in, on, off, over, under, between, at, to, etc. を効果的に教えることが必要だ。名詞にしても最初に hat, cap, pen, pencil, table, desk のような似たものを無理に区別して教えるよりも、hat, pencil, table を知っていれば充分で、それよりも教室内で使える具体的なものや head, finger, hand, arm, leg, foot, etc. の体の

名称を利用すればよい。教科書では1年で hand が出て来て、2年で face, nose, eye が出て来る。これ程身近かなコトバはない筈だが。

### 文法と作文について

現在の中学1年の教科書ではQ—Aの会話体が殆んどだが、この形式よりも肯定文の文型を自分の立場から実感を持って言えるようになってから疑問文を出した方がよい。中学生は be 動詞と一般動詞の疑問文でまずつまづくことが多い。そしてすくなくとも1年間授業中はいっさい日本語を使わず文型を頭に入れさせることが必要だ。2年になってから作文を中心とした文法の説明を帰納的にする方が効果がある。また文法のための文法にしないためには日本語との関連づけをする必要がある。例えば単数、複数、前置詞と助詞、形容詞の位置等の問題は日本語との比較を中心にやった方がよい。文法はあくまでも文を作るための手段と考えるべきであり、文法中心主義が現在の英語教育を毒している。作文については1つの日本語に1つの英文と固定することはさげ、いろいろな角度から、いくつかの文を作る練習も必要である。

### 英文の内容について

現在の教科書の内容では中学生の興味をおこさせるのに程遠いと思う。指導要領の制約はあるにしても、話の筋のアジケナサは毎時間感じている。その上文学的傾向が強い。もっと社会科、数学、理科等生徒の習っている他教科との関連を考えるべきだ。英語は暗記の記号体系で、数学は思考方式を訓練する知的訓練であるというようにパラレルに考えるのは言語の本質を無視していると思う。コトバはすべての教科の基礎になっているし、中学生は9教科のどれかに興味を持っている。そ

れを大いに英語に利用すべきだ。  
(東京都大田区立蓮沼中学校教諭  
箕田兵衛)

## 外からみた日本の英語教育 批判

アメリカにおける大学院生活も3年半が過ぎた。この間日本の留学生をみて私が思ったことは、日本人の英語力の低さと、日本人のアメリカの諸事情とアメリカ人に関する無知である。

まず英語能力の低さであるが、the University of Kansas の大学院生か大学生になるにはミシガンテストで最低80点が要求されているが、日本から初めて渡米してきて80点以上取れた人はほんの数人で、他の200名近くの人々は英語のトレーニングを受けさせられた。その中には大学で英米文学を専攻していた人々や英語の先生も含まれているのだから驚く。その上その英語のトレーニングから1学期(4か月)で抜け出せる人々が少なく、この春学期に Intensive English Center に登録した日本人の2/3は昨年からのくりこし生であった。英語のトレーニングを受けなかった人々は、よほど英語が好きで、自分でがんばって勉強した人々か、英会話学校等で集中的に勉強した人々で、6—10年にわたる中・高・大学の英語教育だけでは不十分なことは明白である。

アメリカの諸事情や、アメリカ人を知らない点においてもひどすぎる。アメリカ人の考え方、価値観、礼儀、社交、エチケット、日常生活等何も知らずにアメリカに来る。留学生のほとんどがアメリカの教育制度や大学の組織内容を全然知らずに来る。またアメリカ人の話題になり

そんなことも全然知らない。これでは多少英語力があってもアメリカ人とよいコミュニケーションが行なわれる筈がない。多少英語の上手な人々でも自己紹介をするのが精一杯である。

以上の2点から日本の英語教育の弱点を観ると、まず英語力については、英語そのものをあまり教えていないのではないかと思われる。聞き、話し、読み、書く能力が平均して教えらるべきであるにもかかわらず、文法と翻訳が中心で、アメリカ人も知らない難しい文法の問題をいじくり回していたり、翻訳技術のみがいたりしている。これは受験英語の害であると思うが、そのような末端のテクニックをみがく前にコミュニケーションとして必要な英語の本筋を十分にやる必要がある。

例え完全でなくとも日常生活が何とかやれる、アメリカを一人で旅行できる、日本にいるアメリカ人の手助けが少しはできる程度の英語力を身につけるべきであろう。さらに各分野で英語に精通した人々を養成して、国際社会に役立つ国際人を養成すべきであると思う。

中・高校の外国語教育の目標の一つに「外国語を通して、外国の人々の生活やものの見方について基礎的な理解を得させる」とあるが、英語の教科書を見ても英米の文化の紹介はあまりないし、授業でもあまり触れられない。アメリカの外国語教育ではもっと日常生活、風俗、習慣その他色々なことに関して教えられ、視聴覚教材もよく使われている。その上外国語教師になる者の60%位が相手国に行ったことがあり、2~3年位教師の経験のある者の90%以上が相手国に行っている。

以上の点から日本の英語教育向上

のためには、1. 英語教師の再教育、2. クラスサイズの縮小、3. 知識詰め込み主義から実践的英語教育への転換、4. 弾力性のある英語教育の実施が必要と考えられる。以上私の述べてきた英語力は最底基準で、それ以上の英語力を身につけたい人々のための道は開くべきであり、これらの改革は今すぐに行なっていかなければならない。そのみが国際化が速く進んでいる現在において、日本のような海外依存度の高い国の唯一の生き伸びる方法であると思う。

(カンサス大学大学院博士課程終了  
英語教育専攻 北尾謙治)

### ELEC に期待する

月日の流れは早いもので、私が第1回ELEC夏期講習会に参加してから18年もたつ。以来、縁あって毎年行なわれる講習会には assistant として、advisor として参加し、役立たぬことを自ら知りながらも、自己の研修、現場を離れた研究の場としての魅力にひかれるようになった。

これらのセミナーは、英語の運用能力を伸ばすことと指導理論の根底をなす言語観から具体的な指導技術を体得することを目的とするものであり、受講生の誰もが oral approach の指導方法に驚異の目を見張り、自分たちの日常の指導にそれぞれ反省を加えはするものの、あれ程上手に pattern practice が果してできるものだろうかという不安をかくすことはできなかった。何はともあれ、教育とは常にスムーズにいくものではない。この会に出席して現場では感じなかった意外な副産物も得られたのであるから誠に意義あることだと思う。

次にELECおよびわが国に於ける英語研究団体に対する期待や抱負を述べてみたい。

#### ① 研究資料の収集

全国で行なわれてきた研究集録を一定の場所で保管し、必要に応じて利用できるようにする。

#### ② 現場と密着した研究の推進

ELECの講習会を経験した受講生同士がお互いに親密度を保ち、ELECを中心とした、より充実した研究態勢を確立する。

③ ELECは今や東京だけの研究組織ではなく、全国的規模の組織に発展している以上、ELECに協力的な地方の活動家をより多く投入されることを強く要望したい。

(群馬県立富岡東高校教諭

青木富太郎)

(Continued from p. 46)

wasn't there! He went further to say that he had particularly enjoyed John's jokes and felt that humour was lacking in the classroom this year.

*English You Can Use* has inherited the Authors' sense of humour. It's felt that these books could fill the gap between bookish English and English spoken by Native English Speakers. Lastly, the books do contain a wealth of interesting topics that will surely keep class participation level high. (ELEC, Book 1, 2, ¥980)

(Instructor, the ELEC Institute  
Alan R. Hooker)

★ ★ ★

『新コンサイス英和辞典』

佐々木 達編

三省堂, 1,376 pp., ¥2,200

KOJIMA YOSHIR

小島 義郎

新版は旧版(10版)よりひとまわり大きく、表紙の色も明るくてモダンな装丁となった。中を開くと今までのコンサイスよりゆったりとしたレイアウトで、見やすい感じである。活字も特別に作ったものさそうであるが、なんといっても天地・横幅ともに大きくなったので、ゆったりとした感じに組めたのであろう。

1. 見出し語

見出し語は9万語だそうであるから、旧版より1万語の増加である。ただし、単純に加えただけでなく、古語・廃語の類を削除してあらたに加えたのであるから、入れかえたものはおそらく15,000~20,000語ぐらいであろうか。旧版が出たのが昭和41年であるから、約10年ぶりの改訂版である。新版では、とくに科学・政治・経済・社会問題などの新語や新しい語義を中心に見出しの入れかえを行なったそうで、たとえば *Apollo* には「アポロ宇宙船」がはいり、*docking, moon car [buggy, crawler, rover]* (月面車) などの見出しが加わり、*rendevous* にも「[宇宙船の] 結合」の意味が加わった。*software, hardware* などのコンピューター用語、*Black Muslim, Black Panther* などの人種問題関係の固有名詞、*women's lib* などの社会問題用語も加わった。それにかなりの数のカナダ・オーストラリア・ニュージーランド関係の語義・見出し語が加えられたのも、この新版の大きな特徴である。今まで、りっぱな英語国でありながら、資料不足のせいもあってほとんど無視されてきたこれらの国々の英語をとりあげたことはたいへん意義のあることである。

見出し語についての編集上の著しい変化は、まず第一にハイフンのない複合語(2語・3語見出し)をほとんどすべて第一要素の項目の追いきみ見出しとしたことである。これは使用者側から見れば、かなりの数の複合語(ハイフンのついたものも複合語だから全部ではない)が1か所に集められたので、引きやすくなったという利点があり、また編集側からいえば、かなりスペースの節約になるという利点がある。しかし、どちらかというところスペースの節約の方に重点があるように思う。引きやす

いという点はたしかにあるが、しかし、ハイフンでつながるか *solid* にするか、あるいは分かち書きにするかについてはかなりの *variants* があり、結局両方引いてみないと分からないケースも相当あると思う。

第二の著しい特徴は、発音の問題とも関連するが、複合語の見出しにアクセント符号がつけられたことである。これは使用者の立場からいうとたいへんありがたいことだと思う。実は筆者は10年前旧版が出た折に、ある雑誌にその書評を書かせていただいたのだが、その折に、その前の昭和34年版で発音表記のついていたハイフンでつないだ見出し語が、ハイフンがとれて2語見出しとなったため、発音表記がとれてしまったことをなげいて、せめてアクセントだけでもつけて欲しかったと述べた記憶があるが、今回はそれがたまたま実現されてたいへん嬉しく思っている。

2. 発音表記

次に発音表記で、もっとも特色のある変化は第一に旧版の英主米従が米主英従に変えられたこと。第二に *hooked schwa* (ə) をやめて、代りに (ɚ) を用いたことである。とくに米音の二重母音の第二要素としてイタリアックの *r* を用いているのは特徴がある。たとえば、*ear* [ɪr], *pair* [pɛr], *far* [fɑr], *start* [stɑrt], *door* [dɔr], *horse* [hɔrs], *poor* [pɔr] のように表記されている。いまこれらを、現在市販のいくつかの辞書(かりにA, B, Cとしておく)、およびある検定教科書(Tとする)、それにKenyonの発音辞典の表記とくらべて表にしてみよう。(Kenyonは略記する。)

次頁[A図]で分かるように、『新コンサイス』の表記法はKenyonに近い。なおWebster第3版、Webster's *New World* などのアメリカ辞書もほぼ同様の表記をしている。したがってアメリカの辞書ではごく普通に受けとられる表記法かもしれないが、ジョーンズ式およびその修正方式になれている日本の使用者には少し抵抗が感じられるかもしれない。筆者はかえって旧版のまま [ə] を使った方がよかったのではないかと思う。

[A図]

	新コンサイス	A	B	C	T	Kenyon
<i>ear</i>	ir	iər	iə	iə	iər	ir
<i>pair</i>	pɛr	pɛər	pɛə	pɛə	pɛər	pɛr
<i>far</i>	far	fáər	fəə	fai	fɑ:ɹ	far
<i>start</i>	start	stáɑrt	stɑət	stɑ:t	stɑ:ɹt	start
<i>door</i>	dɔr	dóər	dɔə	dɔ:ɹ	dɔ:ɹ	dɔr, dɔr
<i>horse</i>	hɔrs	hóərs	hɔəs	hɔ:ɹs	hɔ:ɹs	hɔrs
<i>poor</i>	pur	púər	puə	puə	puər	pur

3. 語義

次に語義の記述についてであるが、旧版とくらべてみると、至るところに加筆が施されていて、ひじょうにきめの細かい改訂がなされたことが分かる。さすがに10年の歳月をかけた改訂であると敬服する。とくに、たとえば旧版では、単に *implicate* ①関係させる、まきこむ、連座させる。とあったところを、1. を〔…に〕関係させる、まきこむ、連座させる、(in). とするような改訂が全般にわたって行なわれており、動詞と目的語、あるいは主語と動詞の間の結合関係をあらわすいわゆる選択制限、あるいは collocation についての情報がかなり盛り込まれている。さらに *resume* 1. [中断したあと]を再び始める。 *simmer* 1. ぐつぐつ煮える [静かに、沸騰点ぎりぎり]のように、訳のみでなく、〔 〕を使って語義の説明を与える努力がかなりなされている点もよい。

ところで、一般論としてであるが、このような語義の記述方法をめぐる問題点という観点から見れば、現存するすべての英和辞典が、まだまだ不備と言わざるを得ない状態であって、たとえば *bare* と *naked*, *solitary* と *lonesome* の区別など、いわゆる類義語の意味の区別についてももっと充実されなくてはならないし、語義の記述そのものも、もっと説明的にしていく必要がある。このような理想論の立場からいえば、本辞典も他のすべての辞典同様不足のあることはまぬがれない。

なお、語義の区分を①②③などの記号から改めて、1, 2, 3, (II), (;), (,) というような記号を用いて細かくし、しかも〔 〕, [ ], ( ) の使い分け、およびカッコのかかりぐあいを厳密に規定したことは大きな進歩であると思う。

ところで語義の配列を「可能な限り頻度数の高い順に従った」と「使用上の注意」にあるが、この点については筆者に多少の疑問がある。もともと、頻度数の高低、つまり semantic count なるものは、学習者の環境や使用教材などによって、相当変化することがあるから、はっきりした基準はたてにくい。よく知られたよりどころ

といえば、たとえば Lorge-Thorndike の semantic count などであろう。これとても日本の実情に合わないところが多々あろうし、さらにはたして頻度数に従う配列がよいのか、意味の流れを作る配列がよいのかという根本的な問題もあろう。しかし、外国語の学習という観点から見れば、頻度による語義の配列が望ましいということは言えるであろう。かつて *ACD* もこの方式で語義を配列した。その際 *ACD* がよりどころとしたのも Lorge-Thorndike の count である。そこで、ごく少数であるが『新コンサイス』の中から例を拾って調べてみた。(記述は紙面の都合上略記させてもらう。)たとえば、*common* では1. 普通の。2. 共通の。3. 公衆の。となっている。これは旧版では①共通の。②公衆の。③普通の。となっていた。しかし、Michael West の *General Service List* (Lorge-Thorndike をもとにしたもの。GSL と略す)では「共通の」30%、「よくある」27%、「普通の」22%となっており、*ACD* では(1)共通の。(2)共同の。(3)公衆の。(4)よく知られた。5. 普通の。となっている。*stock* を見ると『新コンサイス』では1. 幹。2. 《古》切り株。3. でくのぼう。4. くい、柱。5. 先祖。6. 株式。7. 貯蔵。8. 家畜。となっている。(旧版もだいたい同じ。)これは *GSL* では「在庫」23%、「株式」35%、「家畜」15%となっており、*ACD* は1. 在庫。(2. *in stock*, 3. *out of stock* のフレーズ)。4. 貯蔵。5. 家畜。6. (つぎ木の) 台木。7. 幹。(8以下省略)となっている。このほかにももっと見てみたが、所詮一部のデータであって、これで全体をおしはかるのはまったく危険なことではあるけれども、とにかく Lorge-Thorndike や *ACD* とかなりの食い違いがあることが分かった。もちろん注意書きにあるように「可能な限り」ということであろうし、それに Lorge-Thorndike や *GSL* が日本の実情に合わないところも多いからはっきりした結論は何も言えないけれども、意味の頻度数ということにはそれほど編集上の注意が払われなかったのではないかと推測する。

(p. 47 へつづく)

## 『人間のための鏡』

クライド・クラックホーン著，光延明洋訳  
サイマル出版会，B 6判，272 pp.，¥850

KUNIHIRO MASAO  
國弘正雄

文化人類学に対する関心が目にみえて高まりつつある。異質な人種，民族や，言語・文化集団とのかかわりが増大していることの端的なあらわれであろう。世界に命をあずけた日本としては，異質な人間集団とのかかわりの成否に，民族の運命をかけているといっても決して過言ではない。であるとすれば，異質なものへの知的関心，とくにそれを根源において理解しようという衝動が深化し伸張しつつあることを心から喜びたい。日本の将来を想うときに，わが田に水をひくそしりをあえてこう言わずにはおられないのである。

考えてみれば，日本における文化人類学の歴史は比較的新しい。日本の版図に少数民族をほとんどもたなかったことがその一因であろう。いや，そのものいいは正確さを欠く。現に異民族や異文化をかかえてきたし，少数民族問題はむしろ近年にいたり政治社会問題化の度を深めつつあるからである。しかし他の諸国と比べてときに，日本が高度の単一性，人類学でいう族内婚性をもつことはまぎれもない事実である。相対的にいうかぎり，日本を単一人種・単一民族・単一言語の，世界でも稀れな存在と呼ぶのは決して過言ではない。

この単一性に加え，戦前の皇国史観は，文化人類学的な発想や方法の進化をさらにおくらせた。日本民族の起源や日本語の発生への科学的な攻究は，一部の在野の研究者，たとえば白柳秀湖氏らを除き，少なくとも官府の学においてはほとんどタブー視されてきた。元来は異質なものの馴化の結果としての日本民族であり日本語であったにもかかわらず，その馴化——アメリカの人類学者スチュワートの造語 *make the strange familiar* の訳語である——のプロセスを科学的に跡づけることを禁止されるに至っては，人間をその異質の相において捉え，文化という次元で理解するという方法や気質はいかにも育ちにくかったのである。社会学者や行動科学者ですら，たえず文化の实在の証明を求めてやまないことがこの点を裏書きしている。

文化人類学が一つの方法として導入されたのは，戦後アメリカを経由してのことであった。それまでは民族学

や地理学，先史学や宗教学，などさまざまな分野で業績をあげてきた研究者が，文化人類学の大旗のもとに網集した。この間，当時東京大学の教養学部長の職に在った矢内原忠雄教授がはたした役割は大きい。石田英一郎教授や泉靖一教授らを招聘，従来の理学部の人類学科とは独立の文化人類学教室を設けたのは，矢内原氏の強引ともいえる尽力に負うところが多大だったのである。（いずれもいまは故人となられたこれらの先達に対するわれわれ後学の徒の感謝は，いつまでも尽きることがない。）

京都大学からは今西錦司博士を中心に，主として動物学や生態学出身の碩学俊才が次々にこの動きに参加合流した。彼らは自然科学の素養と，各地の探険踏査旅行で得た野外調査的な手法とを縦横にもちこんだ。それは在来の静体的な形質人類学——いまも理学部にある——から一歩も二歩も踏み出し，生物の種としてのヒトが，生態素の一環としてどのような動態を文化・社会という次元で示すかを，他の生物との関連において明らかにしようとする。梅棹忠夫，米山俊直，石毛直道，岩田静治，多田道太郎らの，諸教授はいずれも今西博士の学統に属し，ユニークな業績を次々にあげていった。彼らの手がけた霊長類学は日本の社会科学が真に世界に誇ることのできる一大金字塔である。

柳田國男や折口信夫の名とともに知られる日本民俗学はこの間，文化人類学とは一線を画そうと努めたがごとくである。しかし文化人類学の側からの誘いはたえず行なわれ，石田英一郎教授はとくに一人人類学としての日本民俗学を高く評価し，それへの接近を絶やさなかった。柳田，折口という文字どおりの二大巨峰の歿後，両者の行きかいは徐々ではあるが濃密の度を加えつつあるやに評者には映ずる。

以上のような錯雑した事情と，日本のもつユニークさの故に，文化人類学がアカデミズムの中で定着するのは，日本の場合かなりの年月を要した。今日なお，文化人類学の正規の学部をもつ大学は日本ではまだまだ少数で，数校を数えるにすぎない。イギリス流の社会人類学を伝

える中根千枝女史を擁する東京大学や独逸流の民族学の伝統の上に立つ南山大学を加えても、おそらくは十指に満たぬであろう。

それだけに、文化人類学という、いわば知的弥次馬精神に支えられ、諸学の新しい総合を目指すマクロ的な新分野を、その各方面にわたって鳥かんし、手ぎわよくまとめた書物は日本ではまだ刊行されてはいない。この種の総論は長い年月をかけ、すべてに通じた真の碩学によってのみ物されうるので、比較的若年でも手がけうる各論やモノグラフのたぐいとは異なる厄介さがともなう。日本における文化人類学はまだ弱冠20歳になるやならずの年少き分野なのである。あわせてとかく専門意識が濃厚で、タコソポにおち入りやすく、小さな穴を深く掘っていくことのみをもってアカデミックとみなしがちな日本の学問風土においては、多くの大家俊英をもってしても全体的な総論を、しかも一般読者向けに展開することは至難事に属する。個人としての年輪の厚さもさることながら、一国の学問的土壌の広がりや深さがあわせ求められるからである。

適当な文化人類学の入門書をと訊ねられ、私どもがいつも途方に暮れていたのも、実はこのような背景があったことだった。私どもは、とてもその全般について通じることなどできはしない。北アフリカとかミクロネシアとかいう地理的領域、パントゥーとかナバホとかいう民族集団、宗教とか言語とかいう専門分野、その一つをだにマスターすることすら容易でないのに、全貌などにはとても通曉しえぬばかりか、次々に出されるモノグラフの質的な可否すら判じがたい。ましてや昨今のように、中国とかアメリカとかいう高文明社会が文化人類学の視野に入ってくるはこびとなり、既存の文献や研究の数も汗牛充棟という段になると、もはやお手上げといつてよい。

故クラックホーン教授の *Mirror for Man* の訳出が俟たれたのは、このような事情からであった。この本こそは、英文で書かれた入門書のまさにピカーであり、多岐にわたる諸領域を過不足なく、平易な筆致で解説した類書中第一等のものだからであり、豊潤なブランデーにも似て、長年風雪を凌いできた大家碩学のみがよくしうる傑作中の傑作だからである。私などもこの原本——ポケット版がかなり自由に入手できる——にはずい分とお世話になり、引用も恥ずかしげもなく自在にさせてもらった。出版後、20数年を経ていまだに版を重ね、少しも古さを感じさせないのである。ついにこの訳書を世に問われた光延明洋教授に、心からの感謝をささげるのもそのためである。

読者は説明の理論的かつ具体的であるのに一驚されるにちがいない。ここには大家にのみ可能な、理論と実際とのほどよい調和がみられる。原著者は、各地域でのフィールド・ワークによっても知られたが、同時にアメリカ人類学きっての理論家でもあった。同学のクローバー教授と組んで、文化という概念とその定義について大冊を公刊したこともある程で、文化概念の理論づけとその実証にその学問の後半世をかけた人であった。個別論の中に埋没することなく、しかも理くつ倒れに終わっていないところに、彼の学者さらには教師としての偉大さがあったのである。

本誌の読者はまた、この本が随所でことばに言及している点に嬉しい驚ろきを感じられるに相違ない。すでに日本でも知られてきたように、アメリカ版の文化人類学にとって言語はその知的関心の重要な一部分を成し、現に言語と文化とか、言語人類学とかいう副次的な専門分野も定着している。一つの文化をうつす鏡として、言語は恰好な役目をはたす。かつて日本で流行したアメリカ版の構造言語学のごときも、インディアンの探査をきっかけに、いわば文化人類学的アプローチを母胎として誕生、大を成すにいたったものであり、構造言語学も大学制度の中では、広義の人類学の一環を形成している程である。その意味で、言語の社会的文化的背景に漸くにして目を向けつつある日本の英語教育にとっても、本書の訳出刊行は少なからぬ意義をもつものといえよう。

訳者に人を得たことも特筆されてよい。訳者まえがきも光延氏の本書にかける並々ならぬ熱情と、豊かな学識とを示している。同氏は元来は英語学専攻の学究であるが、米国留学時に文化人類学、なかんづく言語人類学への傾斜を深め、この分野でいくつかの論考を物したこともあり、最近アメリカに再度留学、カリフォルニア大学のパーリン、ケイ両教授のもとでさらに研鑽をつまえたという。同教授はこの訳書にも若干触れられている色彩語について、秀れた著作をもつ世界的な大家であり、光延氏の共同研究者でもある。同時通訳者としても当代一流で、とくにその和英通訳の英文の莊重かつ華麗なことをもって令名の高い光延氏がこの訳業において米国に渡られたことを心から祝し、その将来に多大の期待を寄せるものである。異文化間コミュニケーションという術語がほぼ日常化し、国際社会とのかかわりの成否に命を託したお互い日本人にとって、この訳書がその基礎づくりにはたす役割は、評価しすぎることができないほど大きく、かつ深い。

(国際商科大学教授)

## 新刊紹介

### ■『オンリー・イエスタデイ』

F.L. アレン著  
藤久ミネ訳

1920年代と70年代との類似点を説く人は少なくない。私もその一人である。日本もアメリカもである。いや、先進社会全体について、かなりこのテーゼは当てはまりそうである。

一例をあげる。ニューヨーク市財政は、いままさにパンク寸前だという。正月が迎えられるかどうか、心もとないともいう。そう聞くと、ぼくなどは例の Black Friday を、背筋が寒くなるような気分で思いおこす。29年の秋のあの日に、ニューヨーク株式市場が瓦解し、世界的大恐慌の幕があいた。大学は出たけれど、の溜め息がきこえたあの時代である。

もう一つ例を引く、ケンブリッジ大学の経済学教授で、ケインズ左派の論客として知られるジョアン・ロビンソン女史は数年前に、「経済学理論の第二の危機」という名演説を行なった。たまたま私は聞く折があったのだが、彼女にとって第二の危機とは、今日の不況の中のインフレであり、第一の危機とは20年代末から30年代にかけての大不況のことであった。いまにして彼女の予言が、現状を描いて間然するところなきを知り、首をすくめる思いの為政者や経済専門家は少数でないはずである。

日本だってそうである。往時を原体験した先輩のだれかれから、なん

ともよく似ている、といううめき声のようなものを私自身しばしば耳にする。それも政治とか経済とかいうような、お互い草莽の手のどとかぬところ、だけの話だけではない。むしろ、日々の暮し向きや生きざまのレベルにおいてであり、趣向や流行というそこはとなき次元においてである。エログロ・ナンセンスという当時のやりこばが、どれほど今日の時代にマッチしているかは、たえず感じさせられる点である。

あの時代の狂躁をアメリカに即して活写してみせたのが、この本である。私はアレンのこの三部作を20年代をほうふつたらしめるものとして、たえず参照し、ふんだんに引用もさせてもらってきた。そしていつも、現代史とはこういう全体的なアプローチで、しかも汗くさいものでなければならぬのではないかと考えてきた。博引旁証は十分にアカデミックでありながら、けっして冷たい考証一点ばりに墮すことなく、人間がデンと腰を据えている感じで、20年代のアメリカ人や、その生活環境、その熱狂や人肌のぬくもりが、そのまま伝わってくる思いなのである。現代史とは、かくあるべきものなのであろう。

その訳がこれである。訳者の藤久ミネ氏の拮据の努力にまずお礼を申し述べたい。本文だけで400ページを越すかなりの大冊なだけに、これだけ読み易い訳文に仕上げられるのは、大へんな作業だったと想像されるからである。索引をきちんと訳出されたことも本書の価値を高めている。この本は、通読してもたのしい

が、一種のアメリカ論事典としても利用できるからである。

いま日本語で読みかえしてみても、日本にもこの種の通史——あえて裨史とはいわぬ——が、こんなに読み易い形で出てほしいとつくづく思った。大宅壯一氏の『炎は流れる』など秀れたものも絶無ではないが、とくに20年代から30年代にかけて、日本がその運命を大きく狂わせ坂おとしに転落していった時代について、同種のものが書かれたら、どれほどかわれわれの目を清澄にし、興奮の時代を静慮の時代に転換していく上に役立ってくれるかわからない、とも思った。ファシズムの再来の可能性が、現状へのいらだちの高まりの中で現実の懸念と化しつつあるだけに、これは重要な点であろう。

ただ、これとても例の「こちたきさかしら」にすぎぬのかも知れぬ。とにかく読んでぜったいに楽しい本だからである。あわせて、70年代をまで同様の筆致で書き及んだ J.M. Manchester の近著 *The Glory and the Dream* を訳者の藤久氏が、いまだ一度勇を鼓して訳出されることを願いつつこの短評の筆をおく。

(研究社、四六判、436pp., ¥1,200)

(国際商科大学教授 國弘正雄)

### ■『言語学の散歩』

千野栄一著

雑誌『言語』を主に、他の数種の雑誌に載った著者の論考を一巻にまとめたものである。23章から成り、内容は多岐にわたり、言語本質論(記号性と非記号性・命名論等)、文法論(文法範疇・生産性等)、比較言語学(印欧語・日本語系統論等)、言語接触・二言語併用・言語政策(ジブシー語・ソルブ語・日本語改良論等)、文字論(スラブ文字の起源)、評

伝 (ヴィトゲンシュタイン・トゥルベツコイ・タルトネ), 一般論評等の諸分野に及ぶ。

著者の修学の地ブラハは、ブラーグ学派のメッカであり、この学派の学理・伝統は、著者の言語観に深く滲透しているのが、本書を通じよく理解される。ブラーグ学派を含め東欧言語学の紹介書が極めて少ない日本の実情を考えると、本書の刊行の意義は大きいと思う。小生は 同学の士と共にトゥルベツコイの『音韻論の基礎』の全訳を10年程前に発行し、ブラーグ学派の学理の一端に触れたつもりでいたが、本書によって同学派の学問的風土と伝統、その後の進展等を概観し得て啓発されるところがあった。体系・構造の伝達機能を根幹としながらも、言語の非記号性・非伝達的機能・曖昧性等をも重視するという健全なブラーグ学派の立場が、本書によって浮彫りにされている。著者の力点もここに置かれているのが読みとれる。

書名・目次・イラストから本書を言語学に関する軽いエッセイ集と速断しない方がよい。ある程度の言語学の予備知識を必要とする章が大部分を占めているからである。著者自身「あとがき」で断わっているが、各章間の調整がなされていないため難易のむらや同一事項の繰り返しが見られるのは惜しい。時に、理解困難な文章表現・言回しや比較的多い誤植で散歩の足を止められるが、散歩とは本来歩き続けるものではないのだからそれはそれでよかろう。

(大修館書店, B6判, 358 pp., ¥1,500)

(生活言語研究所長 青柳精三)

## ■『英文表現演習』

中村 敬 共著  
J. McDonnell

本書は、英作文の力を養成するに

は、まず「書き」、次にそれを「訂正」してもらい最後に正しい文章を「暗記」する方法がよいという考えを持つ鶴見大学の中村敬助教授が、愛知大学講師の Mrs. McDonnell と共に、Creative Writing への「橋渡し」として書かれたもので、構成は手紙の形式をとっており、全部で3章、30の課題から成り立っている。第1章は外国の友人からの質問に答えるもの、第2章は新聞の投書欄に投書するもの、第3章は海外の友人に彼の地の事情を尋ねるものである。各々の課題には Guides (書き込む条件) および Helpful Expression がついている。さらに、課題によっては Notes と Reference がついており、なかなか親切な構成である。特に Notes は簡にして要を得ている。

課題は「東海道新幹線」「小さな親切」など身近かな割合に書きやすいものから、「日本人のユーモア」「英国紳士」など抽象的で書きにくいものに至るまでかなりバラエティに富んでいる。ただ欲をいえば、外国人との会話でよく話題になるスポーツや経済の課題——例えば「テニスブーム」とか「石油危機と日本経済」——なども入れて欲しかった。

今まで我が国で出版されてきた英作文の教科書及び参考書は和文英訳が中心であり、独創的な英作文に重点を置いたものはほとんどなかった。その意味で本書は「考えた英語」を書く訓練に最適である。また時事問題や日本の文化的背景を知らないと書けない問題も多いので、一般的な知識を豊かにするためにも役立つであろう。

残念なのは Helpful Expression と Reference の中に *authories*, *grammer school* などかなりのミスプリがあることである。

なお、最後に、本書には主として

Mrs. McDonnell の書いた教授用資料が付属しており、そのモデル文はディクティションや暗記用にも使えることを付記しておく。

(ELEC 出版部, テキスト, A5判, 54pp., ¥580; 教授用資料, B6判, ¥350)

(東京理科大学助教授 木塚晴夫)

## ■English You Can Use

by ELEC

*English You Can Use* written by John M. Graeler and Albert R. Lewis are books intended for the more advanced student.

Perhaps *English You Can Use* can best be introduced by telling something about the authors.

John M. Graeler was born in New York in 1941 and came to Japan in 1960. He graduated from the International Christian University and now has been teaching at ELEC for about five years. Albert R. Lewis was born in Pittsburgh, Pennsylvania, in 1945 and he taught at ELEC for about four years.

I had the pleasure of meeting John at an ELEC Hachioji Seminar, summer of 1973 as fellow instructors.

I was very impressed with the relaxed, informal though positive way they got things done.

This year I was lucky enough to teach at the same Hachioji Summer Seminar. However I got a surprise when I asked the students for criticisms of the seminar. One student stood and complained that John Graeler

(Continued to p. 40)

ELEC BULLETIN

## 新刊案内

『日米関係を考えなおす——その歴史的反省』松本重治／ジョン・W.ホール監修 福岡ユネスコ協会編 B6判258頁, 1,200円 サイマル出版会

政府間の取りきめを越えた人類の知的・精神的連帯によってこそ真の世界平和が達成できるというユネスコ精神の立場から、日中戦争、真珠湾攻撃、原爆投下、ベトナム戦争を経験してきた歴史的文脈をふまえ、世界のなかの日米関係のあり方を考える日米英ソ、アジア、オーストラリアの知識人の論文と討論。

『通訳になるには』栗田晁穂著 B6判224頁, 780円 ベリかん社

国際化時代といわれて久しい今日、ビジネスに文化交流に、通訳の必要性・重要性は一層増大している。國弘正雄、西山千、斎藤美津子、小林薫氏等国際会議で活躍し、通訳者養成に努めている人々からガイド通訳にたずさわる人々までの仕事の実際と語学修業を紹介し、あわせて通訳志望者への手引きを収めた親切な案内書。

『国際交渉——異文化理解のために』金山宣夫著 新書判206頁, 360円 中央公論社

クラックホーン、ミード等の文化人類学の方法を援用して外交交渉の実例とその問題点を分析し、大衆化・個人化が進行しつつある今日の国際関係の円滑化のために実践的な提言を示している。

『病みあがりのアメリカ』山崎正和著 B6判 222頁, 900円 サンケイ新聞社出版局

1974-5年、コロンビア大学に客員教授として招かれた著者が、ベトナム戦争、都市・人種問題、ウォーターゲート事件による荒廃で屈折したアメリカ人の根底にたくましいアメリカ人の骨格を見出し、ニクソンをシェイクスピアの「逆スター」リチャード三世に見た分析は、強大な権力を持ち、全国民レベルで選出されるアメリカ大統領制の本質を明快に示し、日本の大学の極端な閉鎖性が国際水準から立ち遅れ、結局日本人にとってマイナスであるという指摘など、ユニークな視点から新しいアメリカ論のあり方を示唆している。

『教室の危機——学校教育の全面的再検討上・下』C. E. シルバーマン著、山本正訳 四六判 604頁, 各1,200円 サイマル出版会

社会の未来に教育は大きな役割をになっているが、その重要性ゆえに危機的な現状への批判は大きい。本書は

実証主義と実用主義に裏打ちされた視点から、教師と生徒の接する教育の現場である教室を徹底的に分析し、人間的な教育の実現への指針を提示している。

『教育のない学校——全米を席卷した衝撃の脱学校論』カール・ペライター著、下村哲夫訳 四六判 250頁, 1,200円 学陽書房

個人の自由が国家に優先するという民主主義の根本原則から、学校の役割を生徒の世話とリクリエーションの提供、基本的な技能訓練に限定し、価値観を強制することになる「教育」を追放せよという大胆な主張を述べた教育の根本を問う書。

『未来の学習 (Learning to be)』ユネスコ教育開発国際委員会著、国立教育研究所内フォール報告書検討委員会(代表 平塚益徳)訳 B5判322頁, 3,000円 第一法規

人類の歴史における教育の変遷と未来への展望の中で、現代社会が要請する学校教育のあり方を地球的視野から検討し、具体的改善策を提起した画期的な労作として知られる「フォール報告書」の邦訳。

『日本の英語教育史』高梨健吉・大村喜吉著 四六判288頁, 1,300円 大修館書店

英語教育存廃論争からローマ字問題、翻訳論、そして教授法に関する論争を主に、代表的英学者列伝をまじえた英語教育100年史。

『英語教育大論争』平泉渉・渡部昇一著 四六判238頁, 900円 文芸春秋

雑誌『諸君!』誌上で昨年4月以降展開された「平泉・渡部論争」を再録し、両者の補足的論文を加えた。

(p. 42 よりつづき)

#### 4. 用例その他

用例については、スペースの可能な限り充実されているように思う。とくに旧版からのシステムで、語義の記述のあとに一括して並べてあるのもかえって見やすくよい。

相互参照も旧版にくらべて改善された。とくに *Syn. Ant.* についての参照が充実した。ただし、これも前述したように、たとえば *gay* を引いて *merry* が *Syn.* と分かっていても、意味の区別についての説明がもう少し欲しいような気がする。頻度数の高い語には *adore* ▶ *adore, oracle, oration* 《話す、祈る》のように語源的説明がについて便利である。単語の記憶にも役立つであろう。

全体として、旧版と比べてさらに引きやすく、使いやすく、また情報量も増して、一層充実したユニークな辞書が生れたことを心から喜ぶたい。(早稲田大学教授)



# 展望 通信

## ◆1976年 ELEC 春期英語教育研修会

ELECの春期英語教育研修会は、中学校・高等学校の英語科教員を対象にして、文部省の後援のもとに実施される。

会期：昭和51年3月24日（水）—30日（火）

会場：東京都八王子市大学セミナーハウス（東京都八王子市下抽木）

募集人員：60名

参加費：35,000円

詳細については50円切手同封のうえ、〒101 東京都千代田区神田神保町3-8 ELEC 英語研修所「SP係」あて募集要項を請求されたい。

## ◆ELEC 海外英語研修

1976年度海外英語研修旅行は次の通り実施される。

### 1. ミシガン州立大学英語研修旅行

旅行期間：Aコース——7月26日（月）から8月24日（火）まで

Bコース——Aコースと同じ。

ただし8月16日から20日までは自由行動とする。

英語研修：ミシガン州立大学英語研修センターで7月28日から8月15日まで

旅行費用：Aコース——585,000円

Bコース——515,000円

募集人員：40名

対象：教員、一般社会人および学生

申込：「募集要項」および「申込書」は、東京都新宿区西新宿1の18の8日本交通公社海外旅行新宿支店 ELEC 英語研修旅行係あて請求する。

### 2. ヨーロッパ語学研修旅行

旅行期間：7月24日（土）から8月22日（日）まで

旅行経路：東京～ロンドン（5日間：語学研修）～パリ～ジュネーブ～ミュンヘン～ザルツブルグ～ウィーン～ヴェニス～フローレンス～ローマ～アテネ（エーゲ海クルーズ）～東京

旅行費用：589,000円

募集人員：40名

対象：教員、一般社会人および学生

申込：「募集要項」および「申込書」は、東京都文京区後楽1の3後樂園トラベルサービス ELEC ヨーロッパ語学研修旅行係あて請求する。

## ◆第11回 ELEC 英語教育研究大会

第11回 ELEC英語教育研究大会は11月1日（土）ELEC 会館において開催され、参加者約300名をえて例年にまして成会裡に終了した。

会は清水護 ELEC 運営委員長の開会のあいさつをもって始まり、ICU 準教授 Dr. John C. Condon の「To Communicate in English—North American Patterns of Communication」, および筑波大学教授比嘉正範氏の「Standard Japanese English の提唱」と題する2つの講演と、都立第二商業高等学校名和雄次郎教諭による実演授業、分科会等が行なわれた。

なお、ELEC 同友会総会では会則の一部改正があり、会費の値上げ（年額2,000円）が議決された。

## ◆English Teaching Forum の配布

ELEC では USIA 発行の英語教育専門誌 *English Teaching Forum* の配布を行なっているのので、購読を希望される方は ELEC 出版部あて申し込まれたい。購読料は年額1,200円（含送料）。

■本誌 No. 51 の「基礎語彙について(5)」に下記の誤りがありましたので訂正いたします。

ページ	行	誤	正
34	5	与味	興味
"	13(2か所)	%	‰

■『英語展望』では読者からの原稿を募集しております。内容・分量とも制限はありませんが未発表のものに限ります。掲載分には規定の原稿料を贈ります。

■本誌の年間予約購読をおすすめいたします。購読料は年額1,900円、送料は当出版部で負担いたします。

英語展望 (ELEC Bulletin) 第52号  
定価 480円 (送料 70円)

昭和51年1月1日発行

◎編集人 中島文雄

発行人 酒井杏之助

印刷所 大日本印刷株式会社

発行所 ELEC 出版部 (財団法人英語教育協議会)

東京都千代田区神田神保町3の8

電話 (265) 8911~8916

振替・東京 3-11798

# ELEEC

THE ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL, INC